

2008～2012年度

青山学院大学 FD活動報告書



青山学院大学全学FD委員会

青山学院教育方針

青山学院の教育は
キリスト教信仰にもとづく教育をめざし、
神の前に真実に生き
真理を謙虚に追求し
愛と奉仕の精神をもって
すべての人と社会とに対する責任を
進んで果たす人間の形成を目的とする。

青山学院 スクールモットー

地の塩、世の光
The Salt of the Earth, The Light of the World
(聖書 マタイによる福音書 第5章13～16節より)

青山学院大学の理念

青山学院大学は、「青山学院教育方針」に立脚した、
神と人ともに仕え社会に貢献する
「地の塩、世の光」としての教育研究共同体である。
本学は、地球規模の視野にもとづく正しい認識をもって
自ら問題を発見し解決する知恵と力を持つ人材を育成する。
それは、人類への奉仕をめざす自由で幅広い学問研究を通してなされる。
本学すべての教員、職員、学生は、
相互の人格を尊重し、建学以来の伝統を重んじつつ、
おのおのの立場において、時代の要請に応えうる大学の創出に努める。

2008～12年度 青山学院大学 FD活動報告書 目次

1. 学長あいさつ	1
2. FD活動報告書の刊行にあたって	2
3. 年度別活動一覧	3
4. 新任教職員研修会	9
5. 授業改善のための学生アンケート	57
6. 授業アンケートについての教員アンケート	67
7. 学生FDスタッフの活動	73
8. 教育改善・教育プログラム支援制度	77
9. 学生意識調査	85
10. シラバス充実化	91
11. FDEagoプロジェクト	95
12. FD letter	103
13. 諸規則	105
14. FD推進及び全学FD委員会委員一覧.....	111

1. 学長あいさつ

学長 仙波 憲一

「2008～12年度版 FD活動報告書」の発行に際し、感慨一入である。FD活動が先進的大学で始められたころ、本学も細々とFD推進委員会を発足させた。以来本年7月開催のFDフォーラムには80名程の参加があり、関心の高さを実感できたことは大きな喜びであった。これまでの関係者の方々のご尽力に対し、改めて敬意と感謝を申し上げたい。

FD活動の定義は、例えば中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」答申（平成17年1月）によれば、『教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。』とある。

ではなぜFD活動が必要になったのであろうか。その背景には大学教育の質的転換があったことが見落とせない。大学の使命は学術の発展と継承にあり、これを通じて社会にとって有意な人材を育成し、広く社会の発展に貢献することである。その際、今日の知識基盤社会がまた時代がどのような知識と技能を、さらには人間性を持った人材を要請しているのかを的確に把握し、大学自らが変革し、社会の発展を担える人材を輩出しなければならない。この人材こそ、主体的に物事を考え、積極的に問題を発見し問題解決に取り組める人間であり、他と協働できる柔軟性に富んだ人間である。このためには従来型の知識を一方的に教授するだけでなく、学生に主体的に学ばせる新たな教育方法が必要となる。学生同士は言うに及ばず、教員と学生と職員が学びの共同体として相互に一緒になって考え学ぶ、いわゆる一方向型の受動的学びの〈学習〉ではなく、双方向型の主体的に学ぶ〈学修〉ができる新たな教育の方法と内容を研究開発していかなければならない。またツールとしてのICT等の効果的利用法についても同様である。さらにこれを個人のみで行うのではなく、組織的に様々な部署の人間が参加しなければ効果は上がらない。なぜならカリキュラムは基礎から応用・発展に至るまで、体系的に相互に関連付けられ組織的に運営されるものだからである。一科目で新たな教育方法を導入しても効果は限定的である。

教育サービスの管理運営に関しても同様なことが言える。教育の質的転換に伴い教育支援の方法も変化せざるをえない。教育環境の整備、学修支援の方法、単位履修制度から学則にいたるまでの教育制度の理解とその円滑な運用、研究支援体制等あらゆる場面で、自己点検をしつつ改善を図り、教育サービスの充実と推進役を担うための組織の機能強化と個人の能力開発は欠かせない。

知の協働体として新たな大学教育への改善と開発研究を持続的かつ組織的に担うものこそ大学のあるべきFD活動であり、大学の価値を高めるために欠かせない活動である。今後のさらなる発展を期待したい。

2. FD活動報告書の刊行にあたって

全学FD委員会 委員長
副学長 長谷川 信

本学のFD（Faculty Development）活動は、2003年度から全学的な授業評価アンケートがはじまり、2005年度からFDプロジェクトチームが活動を開始しました。そして、2008年10月からFD推進委員会、2009年4月から全学FD委員会が活動を開始しました。このように、本学の組織的なFD活動が開始されてから、およそ5年間の経過し、その概要が本報告書に収録されています。

本学のFD活動は、次のような点を重視して進められています。第1に、大学を構成する教員、職員、学生、社会の4者が協力して、組織的に教育の改善を行うこと、第2に、学生にとって、また教職員にとって「個々が安心して教育目標に向かって取り組むことのできる環境作り」を実現すること、そして第3に、FD、SD（Staff Development）相互のバランスをとりながら、教職員が協力して教育力の向上に努めることです。

FD活動は、「授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組み」といわれますが、その内容は多岐にわたり、現状ではより幅広い活動が展開されて来ています。本学のFD活動も、単なる授業改善にとどまらず、さまざまな教育支援活動が組織的に展開されはじめています。2013年4月には教育支援課が発足し、今後のFD活動の推進への貢献が期待されます。

本来、個々の教員がおこなっている教育改善の蓄積は、潜在的にたいへん大きなものがあるはずです。しかし、これらの豊富な教育資源は、目に見えないままであり、継承することが難しい現状があります。これらの豊富な資源を可視化するとともに、情報システムを利用しながら、組織的に体系化することがいま求められています。教員と職員が協働しながら、より豊かな、質の高い教育の実現をめざして行きたいと思います。

本学のFD活動として、これまで GPA制度の導入、シラバスの整備、授業アンケートの公開、新任教職員研修、教育改善・教育プログラム支援制度などが推進され、教育力の強化が図られてきました。2010年度に開始された学生意識調査は、学年進行に伴って卒業時調査を含めた経年比較が可能になりつつあります。その結果の一部は「学生の意識調査からみる青山学院大学の学生像」としてホームページ上に公表されるとともに、2013年7月18日のFDフォーラムにおいて分析結果と活用事例が報告されました。また、2012年度からは「FD Eagoプロジェクト」によるFD意識の普及、教育活動の表彰などがおこなわれ、また学生FDスタッフによる「しゃべり場」の企画がはじまるなど、新たな視点からFD活動の領域を拡げつつあります。

今後のFD活動は、学生意識調査の個々の学生へのフィードバック、教育プログラムの開発支援、シラバスによる教育記録の蓄積、授業アンケートの改善などを通じて、本学の学士課程教育の質保証を実現していくことになります。これらのFD活動を推進するための教育支援は、学生支援とともにその重要性を高めることになるでしょう。

3. 年度別活動一覽

	2008年度	2009年度
4月		2008年度後期「授業改善のための学生アンケート」結果公開 ①推、①全 全学FD委員会 発足 全国私立大学FD連携フォーラム「FDマップ」検討WG出席 (立命館大学・衣笠キャンパス)
5月		全国私立大学FD連携フォーラム 総会出席 (明治大学・駿河台キャンパス) ②推 教育改善・教育プログラム支援制度 公募開始
6月		前期授業改善のための学生アンケート実施(～7月) ③推、②全 大学WEBサイトへのシラバス掲載 検討開始
7月		教育改善・教育プログラム支援制度 外部評価委員会開催及び採択プログラム決定 ④推 2010年度新任教職員研修会 検討開始
8月		
9月		前期「授業改善のための学生アンケート」結果 公開 ⑤推
10月	FD推進委員会 発足	⑥推、③全
11月		⑦推、④全 第1回関東圏FD連絡会出席(法政大学・市ヶ谷キャンパス)
12月	後期授業改善のための学生アンケート実施(～1月) 全国私立大学FD連携フォーラム設立記念式典 出席 (立命館大学・朱雀キャンパス) ①推	後期授業改善のための学生アンケート実施(～1月) ⑧推、⑤全 授業改善のための学生アンケート変更案 決定 学生意識調査実施 決定(2010年度より開始)
1月		⑨推 大学WEBサイト FD活動関連情報掲載 検討開始
2月	②推 授業改善のための学生アンケート 検討WG活動開始	
3月	③推 FD関連諸規則制定	⑩推、⑥全 教育改善・教育プログラム支援制度 外部評価委員会 開催 2010年度新任教職員研修会 実施内容決定 大学WEBサイト FD関連掲載情報リニューアル 第2回関東圏FD連絡会出席(法政大学・市ヶ谷キャンパス)

※表中の「①推」は第1回FD推進委員会を、「①全」は第1回全学FD委員会を示し、○内の数字は、当該年度の開催回数を示す。

	2010年度	2011年度
4月	第1回新任教職員研修会 開催 2009年度後期「授業改善のための学生アンケート」結果 公開 学生意識調査実施(1・2年生対象) ①推、①全 2009年度教育改善・教育プログラム支援制度 外部評価委員講評の発表 教育改善・教育プログラム支援制度 公募開始	第1回新任教職員研修会 開催 2010年度後期「授業改善のための学生アンケート」結果 公開 前期授業改善のための学生アンケート 実施見送り 決定 学生意識調査実施(1～3年生対象) ①推、①全 2010年度教育改善・教育プログラム支援制度 外部評価委員講評の発表 教育改善・教育プログラム支援制度 公募開始 FD letter 第2号 発行
5月	教育改善・教育プログラム支援制度 外部評価委員会開催及び採択プログラム決定 ②推 全国私立大学FD連携フォーラム 会員校ミーティング 出席 (立命館大学・東京キャンパス)	第6回関東圏FD連絡会 出席(法政大学・市ヶ谷キャンパス) FD letter 第3号 発行 ②推
6月	③推、②全 全国私立大学FD連携フォーラム総会 出席 (関西大学・千里山キャンパス) 第3回関東圏FD連絡会 出席(法政大学・市ヶ谷キャンパス) ④推	③推、②全 教育改善・教育プログラム支援制度 外部評価委員会開催及び採択プログラム決定 授業改善アンケートについての教員アンケート 実施決定 全国私立大学FD連携フォーラム関東圏懇談会 出席 (法政大学・市ヶ谷キャンパス) ④推
7月	前期授業改善のための学生アンケート 実施 第2回新任教職員研修会及びFDフォーラム 開催 大学WEBサイトへのシラバス掲載案 決定 ⑤推、③全	学生意識調査報告会 開催 第2回新任教職員研修会 開催 授業改善アンケートについての教員アンケート 実施 ⑤推、③全 FDEagoプロジェクト 検討開始
8月	法政大学第5回FDフォーラム及びサマーフェスタ 参加	
9月	HARTコミュニティー学生スタッフの募集 決定 前期授業改善のための学生アンケート結果 公開 ⑥推	第7回関東圏FD連絡会 出席 (法政大学・市ヶ谷キャンパス)
10月	⑦推、④全 2011年度学生意識調査変更案 決定 全国私立大学FD連携フォーラム臨時総会 出席 (立命館大学・東京キャンパス) 第4回関東圏FD連絡会 出席 (法政大学・市ヶ谷キャンパス)	学生意識調査(4年生) 実施方法決定 FD関連資料の貸出開始 ⑥推、④全
11月	⑧推	⑦推
12月	⑨推、⑤全 HARTコミュニティー ミーティングに学生FDスタッフ参加 全国私立大学FD連携フォーラム「実践的FDプログラム」 オンデマンド講義上映会 開催 大学WEBサイトへのシラバス掲載 開始 FD letter 実施 決定 後期授業改善のための学生アンケート 実施(～1月)	FDフォーラム 開催 後期授業改善のための学生アンケート 実施(～1月) 全国私立大学FD連携フォーラム 会員校ミーティング 出席 (立命館大学・東京キャンパス)
1月	第5回関東圏FD連絡会 出席(法政大学・市ヶ谷キャンパス) 2011年度新任教職員研修会 実施内容 決定 私情協コンテンツのオンデマンド配信への参加 決定 ⑩推	第8回関東圏FD連絡会 出席(東洋大学・白山キャンパス) ⑧推、⑤全
2月		⑨推、⑥全
3月	FD letter 第1号 発行 ⑪推、⑥全 教育改善・教育プログラム支援制度 外部評価委員会 開催 2010年度学生意識調査 結果報告会 開催 2011年度学生意識調査 実施案 決定	

2012年度

	委員会 開催	新任教職員 研修会	授業改善のための 学生アンケート	学生意識調査	教育改善・ 教育プログラム 支援制度	全国私立大学 FD連携 フォーラム	関東圏FD連絡会	
4月	4/11①推 ①全	4/3 第1回開催	2011年度 後期結果公開	1～3年生実施 結果の学部公開 検討開始	2011年度 外部評価委員会 講評の発表 公募開始			
5月	5/9②推 5/30③推 ②全				5/16 FDフォーラム開催 (2011年度 成果報告会) 外部評価委員会 開催及び採択 プログラム決定		第9回 連絡会出席 (立教大学・ 池袋キャンパス)	
6月	6/13④推					6/16 総会出席 (中央大学・ 後楽園キャンパス)		
7月	7/11⑤推 ③全		前期実施	結果報告会開催				
8月								
9月	9/12⑥推	9/26 第2回開催	前期結果公開				第10回 連絡会出席 (青山学院大学・ 青山キャンパス)	
10月	10/10⑦推							
11月	11/7⑧推 ④全			4年生実施 (～3月)				
12月	12/5⑨推 ⑤全		後期実施			会員校ミーティング出席 (立命館大学・ 東京キャンパス)		
1月	1/30⑩推						第11回 連絡会出席 (法政大学・ 市ヶ谷キャンパス)	
2月	2/27⑪推 ⑥全							
3月					外部評価委員会 開催			

	FD letter	FDEagoプロジェクト					その他
		マスコット キャラクター	FD Tip	FD Board	Happyくらす 作品コンテスト	その他	
	第9号発行	実施決定	実施決定	実施決定	実施決定		
		キャラクター 決定	制作依頼		募集開始 (～9月)		
	第10号発行	学内周知					
	第11・12号 発行		7月のFDTip	実施開始			
			10月のFDTip		10/31 審査及び 入選作発表	いい授業をありがとう プロジェクト 検討開始	FDハンドブック 制作検討開始
	第13号発行		11月のFDTip		11/21 表彰式		
			12月のFDTip				学生FD しゃべり場出席
			1月のFDTip				
			2月のFDTip				学生FDスタッフ による活動報告
			3月のFDTip				

4. 新任教職員研修会

本学では大学に新規任用の教員はもとより、学院に採用された事務職員についても、配置転換により大学で勤務する可能性もあるため、新規任用の教職員対象のFD研修会を、年度初頭に教育研修活動の概要を説明する第1回、前期の授業終了を踏まえて行う第2回と、通常年2回開催し教職員の資質向上に努めている。

2012年度から、2回目の開催については、外部から講師をお招きし、より実質的な研修を行うことになった。

本書には、2009年度からの研修プログラム次第及び2012年度における開催記録を掲載した。

大学新任教職員オリエンテーションプログラム

日時：2009年4月1日（水）午前11：30～

場所：第19会議室（総研ビル11階）

司会進行：学長室長 本橋 正人

聖書朗読・開会祈祷

マタイによる福音書 第5章13～16節

コリントの信徒への手紙一 第13章4～8節（前半）

学院宣教師・大学宗教主任 シュー土戸 ポール准教授（文学部）

学長挨拶

学長 伊藤 定良 教授（文学部史学科）

「青山学院大学の中期的課題」

学務・学生担当副学長 長谷川 信 教授（経営学部経営学科）

大学事務案内等説明

学務部長 伊豆 一男

庶務部長 永井 純二

学術研究推進部長 加藤 博之

新約聖書 マタイによる福音書 第5章13～16節

「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして灯の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」

新約聖書 コリントの信徒への手紙一 第13章4～8節（前半）

愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。愛は決して滅びない。

2010年度 第1回新任教員研修会次第

(1) 日時 4月2日(金) 13:00～15:00

(2) 場所 第19会議室(総研ビル11F)

(3) 司会

全学FD委員会副委員長 宮川 裕之教授

(4) プログラム

① 祈祷

大学宗教部長 大島 力教授

聖書朗読 ヨハネ福音書8章31～32節

「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」

② 開会挨拶

学務・学生担当副学長 全学FD委員会委員長 長谷川 信教授

③ 「本学の教育研究とFD活動の現状」について

学務・学生担当副学長 全学FD委員会委員長 長谷川 信教授
同副委員長 宮川 裕之教授

④ 「本学の事務機構」について

大学事務局長 濱中 正邦

⑤ 「学事暦、授業等の進め方、成績評価」について

学務部長 伊豆 一男

⑥ 「個人研究費等の予算執行」について

学術研究推進部長 加藤 博之

⑦ 「施設設備利用」について

庶務部施設課長 山田 達二

⑧ 質疑応答

⑨ 黙祷をもって閉会

以上

2010年度FDフォーラム

2009年度教育改善・教育プログラム成果報告会ならびに 新任教員研修会 次第

【第1部】 2009年度教育改善・教育プログラム成果報告会

- ①日時 7月17日（土）14：00～16：00
- ②場所 総研ビル大会議室
- ③対象 新任教員、本学教職員
- ④司会 長谷川副学長 全学FD委員会委員長
- ⑤内容
 - 学長挨拶
 - 2009年度教育改善・教育プログラム成果報告会
 - 意見交換

【第2部】 第2回新任教員研修会

- ①日時 7月17日（土）16：00～17：00（第1部に引続き）
- ②対象 新任教員、全学FD委員
- ③目的 新任教員同士の親睦と前期授業を終えての意見交換
- ④内容
 - 新任教員等との意見交換

【第3部】 懇親会

- ①日時 7月17日（土）17：30～19：00（第2部に引続き）
- ②場所 アイビーホール
- ③司会 宮川全学FD委員会副委員長
 - 学長との懇談会
 - 教員自己紹介等

2011年度 第1回新任教員研修会次第

- (1) 日時 4月1日(金) 12:00～14:30
- (2) 場所 第19会議室(総研ビル11F)
- (3) 司会 学務及び学生担当副学長 全学FD委員会委員長 長谷川 信教授
- (4) プログラム
 - ① 聖書朗読・祈祷
大学宗教部長 伊藤 悟教授
聖書朗読 コリントの信徒への手紙二、4章16～18節
だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。
 - ② 開会挨拶
学長 伊藤 定良教授
 - ③ 「本学の教育研究とFD活動の現状」について
学務及び学生担当副学長 全学FD委員会委員長 長谷川 信教授
同副委員長 加藤 篤史教授
 - ④ 「情報セキュリティ関係の規則等」について
総務担当副学長 岡田 昌志教授
 - ⑤ 「本学の事務機構」について
大学事務局長 伊豆 一男
 - ⑥ 「学事暦、授業等の進め方、成績評価」について
学務部長 上倉 功
 - ⑦ 「研究制度及び研究費等」について
学術研究推進部長 加藤 博之
 - ⑧ 「施設設備利用」について
庶務部施設課長 小池 肇
 - ⑨ 質疑応答
 - ⑩ 黙祷をもって閉会
以上

2011年度 第2回新任教員研修会次第

- (1) 日時 7月9日(土) 14:00～17:00
- (2) 場所 第19会議室(総研ビル11F)
- (3) 司会 全学FD委員会副委員長 加藤 篤史教授
- (4) プログラム
 - ① 開会挨拶
副学長 長谷川 信教授
 - ② 事前アンケートによる、グループ別の各種意見交換
 - ③ ティーブレイク
 - ④ 青山学院大学に必要な教育改善について
 - ⑤ 総括
 - ⑥ 黙祷をもって閉会
以上

2012年度 第1回大学新任教職員研修会次第

日 時 4月3日(火) 12:00～14:30

場 所 第19会議室(総研ビル11F)

司 会 学務及び学生担当副学長 全学FD委員会委員長 長谷川 信教授
プログラム

(1) 聖書朗読・祈祷

大学宗教部長 伊藤 悟教授

聖書朗読 ローマの信徒への手紙、5章3～5節

そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。

(2) 開会挨拶

学長 仙波 憲一教授

(3) 青山学院大学紹介映像「A.からはじまる新しい私。」の視聴及び昼食

(4) 「本学の教育研究とFD活動の現状」について

学務及び学生担当副学長 全学FD委員会委員長 長谷川 信教授
同副委員長 加藤 篤史教授

(5) 国際交流について

広報及び将来構想担当副学長 平澤 典男教授

(6) 「本学の事務機構」について

大学事務局長 伊豆 一男

(7) 「学事暦、授業、成績評価等」について

学務部長 上倉 功

(8) 「研究制度及び研究費等」について

○教育研究費ガイドライン

○2012年度前期 国外出張の手続きについて

○教員研究費等使用に関する説明会の開催について

学術研究推進部長 石黒 隆文

(9) 「施設設備利用」について

庶務部施設課長 山田 達二

以上



各学部の変遷図

●1949年 ●1950年 ●1970年 ●1980年 ●1990年 ●2000年 ●2006年

青山学院大学 2008年 2009年

- 英米文学科 1949
- 第一部英米文学科 1950
- 教育学科 1950
- 第二部教育学科 1950
- フランス文学科 1962
- 日本文学科 1966
- 史学科 1968
- 心理学 2001

**文
学
部**

●基督教数学科 1949
→ 総合計数科学科 1953・1956
→ 経済数学科 1961・1977
●第二部基督教数学科 1950・1961

●商学科 1949
●第二部商学科 1950

●経済学科 1958
●第一・第二経済学科 1968
●商学科：第一・第二商学科（経営学専攻）※

**経
済
学
部**

●経営学科 1966
●第二部経営学科 1966

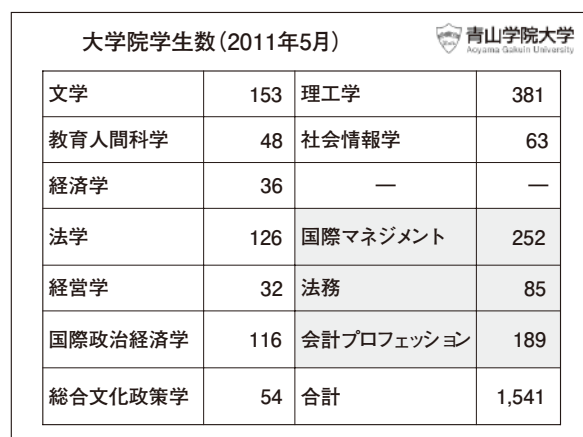
※ 商学科：第一・第二商学科 1953・1973

教育人間科学部 2009年

**文学部
比較芸術学科**
2012年

現代経済デザイン学科
2008年

マーケティング学科
2009年



大学名	学生・院生数 (2011年5月)
青山学院大学	18,509
上智大学	11,986
立教大学	20,877
同志社大学	28,434
関西学院大学	24,167

Ⅱ 教育研究体制の課題

- 1) 青山キャンパス17号館完成(2012年度予定)
人文社会系学部の1・2年生が青山キャンパスへ
⇒4年一貫教育体制
学部教育プログラムの改革
青山キャンパスの再開発(図書館等)
相模原キャンパスの新学部構想



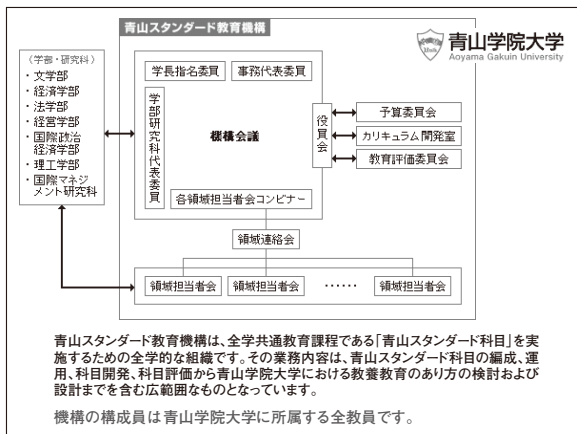
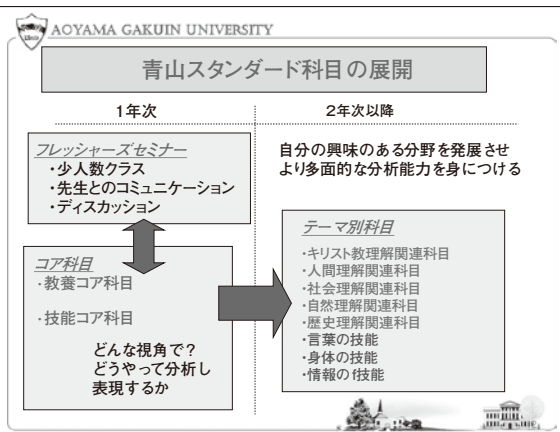
大学17号館完成予想図 2012年度

Ⅲ 本学の特色ある教育の試み

青山スタンダード科目 = 全学共通教育システム

コンセプト:
青山学院大学を卒業すると、
〈一定水準の技能・能力〉
〈一定範囲の知識・教養〉
をそなえていると社会的な評価を受けることを到達目標とする
全学共通教育システム

運営組織: 青山スタンダード教育機構
すべての教員が構成員



Ⅲ 教育研究支援とプログラムの推進

1. 主要な教育研究施設、組織

- 1) 学部、研究科附属研究施設、学会・機関誌
- 2) 総合研究所 プロジェクト研究が進行中
- 3) 社会連携機構
学外諸機関との連携協力により、教育研究活動を展開し、現代的な課題、ニーズに関わる諸事業を展開し、社会に貢献する。
■ 社会学連携研究センター (SACRE)
■ WTO研究センター
■ ヒューマン・イノベーション研究センター (Aoyama HIRC)
■ 国際交流研究センター 国際交流基金との提携
■ アジア国際センター
- 4) 事務組織による支援 学術研究推進部など

2. 教育改革等支援プログラム

[2010年度] 大学生の就業力育成支援事業 ①青山スタンダード教育による就業力育成
産学連携による実践型人材育成事業 ②コミュニティ形成を促進する人材育成担当者向け
のハイブリッド型学習プログラム開発

[2009年度]
組織的な大学院教育改革推進プログラム ①グローバル・エキスパート養成プログラム
戦略的産学連携推進プログラム ②大学間連携によるマネジメント教育プログラムの質の
共有化と相互評価システムの開発
「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラム ③人材ニーズと学生意識との
格差解消による適職発見支援

[2008年度]
産学官連携戦略展開事業 ①知的財産活動基盤の強化 組織的な大学院教育推進プ
ログラム ②学際性を備えた実践的科学研究者・技術者の育成ー「地の塩・世の光」として国
際社会に貢献できる問題解決能力の養成ー 質の高い大学教育推進プログラム ③都心
の文化資源等を活かした知の創造と発信ー 街中メディア拠点を中心に展開する「ラボ・ア
トリエ実習」の魅力化と定着化ー ④学士力としての論理的な文章作成能力育成ー 言語
処理とIT技術を活用した教育システムによる実効的教育の実現ー 社会人の学び直し
ニーズ対応教育推進プログラム ⑤主婦・団塊世代等社会人経験を有する人材に対する
オンライン学習支援者育成プログラム ⑥地域の教育力をイノベーションするワークショップ
デザイナー育成プログラム 戦略的産学連携推進事業 ⑦実践的プロジェクト教育による
多角的連携に基づく人材育成と医療イノベーション 専門職大学院等における高度専門
職業人養成教育推進プログラム ⑧会計大学院におけるコア・カリキュラム

Ⅳ 教育力の向上

1. 基本方針

- ◇FDとは? 「授業の内容及び方法の改善
を図るための組織的な取り組み」
- ◇教育力の向上は大学の責務
- ◇青山学院大学は教育を大変重視
- ◇本学の特徴を生かした活動を
⇒教員、職員が一体となった教育改善へ

2. FD活動のスタート

- ◇ 2003年度後期から全学自己点検・評価委員会で、「授業評価アンケート」を実施。2004年度後期より「授業改善のための学生アンケート」としてスタート
- ◇ 2004年度末に、2007年度に大学基準協会へ認証評価申請することを決定
- ◇ 2005年度にFDプロジェクトチームを発足
- ◇ 2008年10月、大学HPにFD活動のページを新設して、これまでの活動を外部に公表

17

3. FDプロジェクトチームの実績

[2005年度～2007年度]

- ・ 「授業アンケート」の運用
- ・ シンポジウムの開催
- ・ 授業公開の実施
- ・ 「教員アンケート」報告書の作成
- ・ プロジェクトチーム活動報告書の刊行

18

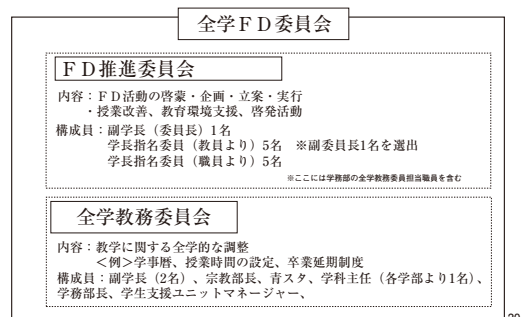
4. FD組織の発足

発足の経緯

- ・ 大学設置基準改正 第25条の3によるFDの組織的活動の義務化
- ・ 2008年10月 FD推進委員会発足
- ・ 2009年3月 全学FD委員会設置
- ・ 2009年3月 青山学院大学FD規則制定

19

本学のFD組織



20

FD推進委員会の役割

- ・ 学長のもとに、少人数で機動的な組織を設置する
- ・ 若手教職員の構想力によって企画立案を進める
- ・ FD活動の啓蒙
- ・ 学部のFD活動を活性化する起動力に
⇒ 全学FD委員会の構成員

21

2009年度の主要な活動

- ・ 授業アンケートの見直し
- ・ 「教育改善・教育プログラム支援」制度の発足
- ・ 次年度の新任教職員研修会プログラムの検討
- ・ 各学部におけるFD活動の事例紹介
- ・ 他大学との連携、交流

22

2010年度の主要な活動

- ・ 新任教職員研修会の開催
- ・ 「教育改善・教育プログラム支援」制度の実施
- ・ 全学的な学生意識調査の実施
- ・ 授業シラバスの学外公開開始
- ・ 授業アンケートの集計結果の学外公開
- ・ 「FD letter」の発刊
- ・ 「実践的FDプログラム」上映会の開催
- ・ 他大学との連携、交流

23

2011年度の主要な活動

- ・ 新任教職員研修会の開催
- ・ 「教育改善・教育プログラム支援」制度の実施
- ・ 全学的な学生意識調査の実施
- ・ 授業アンケートの集計結果の学外公開
- ・ 授業改善アンケートのための教員アンケートの実施と分析
- ・ 「FD letter」の発刊
- ・ 他大学との連携、交流
- ・ 学生FD活動「しゃべり場」の後援

24

教育改善・教育プログラム支援制度による採択テーマ
(2009年度)

事業計画テーマ
シラバスと講義録の統合情報に関する高度活用システムの構築
「科学・技術に関する意識データベース」の構築
各種資格(司書・社会教育主事)教育プログラムの評価モデルの開発
ティーチング&ラーニング・ポートフォリオに基づく総合的教育支援
大学生に対するリーガルリスク教育

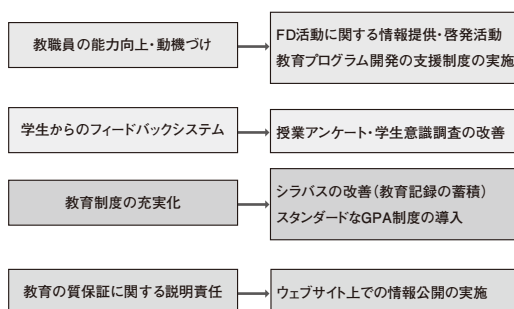
教育改善・教育プログラム支援制度による採択テーマ
(2010年度)

事業計画テーマ
IT専門実験室における演習環境の改善
経済学導入教育用マテリアルの開発
「校友追跡調査に基づく実業要請志向教育プログラム開発のためのシステム構築」
「科学・技術に関する意識データベース」の高度利用 —学生プロファイリングに基づく科学リテラシ科目の構築を目指して—
ティーチング&ラーニング・ポートフォリオに基づく総合的教育支援

教育改善・教育プログラム支援制度による採択テーマ
(2011年度)

事業計画テーマ
経済学導入教育用マテリアルの開発
会計専門職大学院教育における実践的教育の展開
多学部間における英語教育情報共有のためのオンライン・システム構築
翻訳タスクによる読解指導： 教員研修DVDの作成

5. 今後のFD活動



2012年度 第2回大学新任教職員研修会次第

日 時 9月26日（水）13：00～16：00

場 所 第19会議室（総研ビル11F）

司会進行

学務部教務課 戸田隆也

開会祈禱

大学宗教部長 伊藤 悟教授

開会挨拶

学務及び学生担当副学長

全学FD委員会委員長 長谷川 信教授

プログラム

講師：杉原 真晃 先生

山形大学基盤教育院 教育開発連携支援センター 准教授

- (1) 学生の主体的な学習をいかにして引き出すか」についての理論・実践事例
- (2) ワークショップ：青学での実践的課題を語り合う

以上



杉原真晃先生

皆さま、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました、杉原と申します。初めに、本日はこのような場にお招きいただきまして、関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。外部講師は初めてということで、かなりプレッシャーがあるんですけれども、来年以降の外部講師が無しにならないように、きょうは励みたいと思います。

私は山形大学に所属しておりますが生まれは大阪で、きょうは基本的に大阪弁で喋ってしまうことになると思います。お聞き苦しい言葉等、発せられるかもしれませんが、どうかご容赦いただければと思います。

本日は、第2回新任教職員研修会ということで、皆さまのお手元に資料があるかと思います。所々違うところもありますけれども、前のスライドと基本的には同じものですので、前を見ながらお話を聞いていただければいいかと思います。

それで、きょうはどういうふうなスタンスでお話し申し上げようかと悩んでおりますが、私は専門が大学教育論あるいは教養教育論で、FDとして、学習とはどういうものかということの研究をしながら、普段は学校で働いているということなんです。私たち山形大学がいつも大事にしていることは、相互研鑽という理念です。基本的には、現場性だったり、教職員の方々の自立性を重視したりして、お互いが互恵的な関係を取れるようなかたちでということをやっておりますので、本日もこういうかたちのスタンスでやらせていただけるとありがたいと思います。

私は外部講師ですけども、何かすごく専門的なノウハウを持っていて、これをやったらうまくいくぞとか、そういうことは一切思っていないくて、私の話が皆さまの議論の、ほんのきっかけになればいいと思っている限りです。相互研鑽で、現場切実性、互恵の関係を基に、例えば先生方、あるいは教職員の方々が、大学間で連携をしながらネットワークをつくる。そういう切磋琢磨ができればいいと思います。きょうも、決して私は山形大学を代表して来たわけではありませんが、大学間連携のようなかたちで異文化に触れながら、お互いにいろいろ学ばせていただければと思っています。どうぞよろしくお願いします。

本日の目的ですけれども、テーマは、学生の主体性をいかに育むかということになります。目的を3点ほど挙げさせていただきましたので、またご覧いただければと思います。実際に、きょうはどういうことをやるのかという内容につきましてですけども、まず主体性をどうやって育むかについて、私のほうから話しを致しますので、それを聞いていただきます。そして、青山学院大学さんの実践的課題について、皆さま同士で語り合ってください。今回は特に、いろいろなものが議論の俎上に載ると思いますが、講義型の授業ということに少し焦点を当てて、ここにおける実践的課題を語り合っていただこうかと思います。新任の事務職員の方々も十数名居ると拝聴致しまして、恐らく授業を持っていらっしゃると思いますけれども、ぜひ、事務職員の方々も、恐らくつい最近までは学生だったと思いますので、学生の目線で、こういうところが授業で問題があったとか、こういうことをやっている先生がとてもおもしろかったとか、そういうことを先生方と一緒に情報交換していただけると実りある



かと思います。また、先生方が、こういう工夫をしているとか、こんなところで悩んでいるということ、事務の方々にも知っていただくことで、また今後の連携につながっていくかと思っていますので、そういうかたちでお願いしたいと思っております。

1. 主体的学習を求める社会的事情

(1) 中央教育審議会答申(2012.8.28)

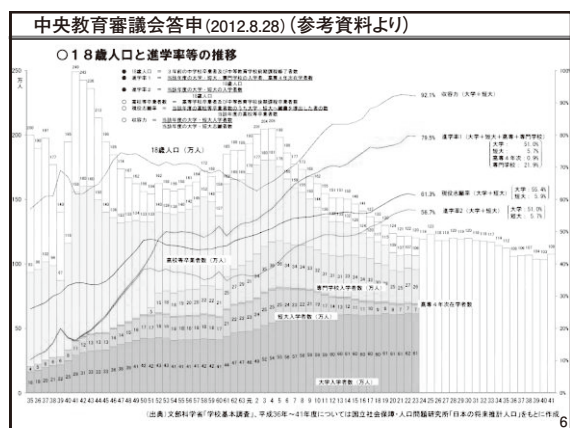
「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて
～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学～」

我が国は未曾有の災害である東日本大震災に見舞われたほか、政治、経済、社会、文化、その他多方面にわたり、当時よりも更に大きな構造的変化に直面している。グローバル化や情報化の進展、少子高齢化などの社会の急激な変化は、社会の活力の低下、経済状況の厳しさの拡大、地域間の格差の広がり、日本型雇用環境の変容、産業構造の変化、人間関係の希薄化、格差の再生産・固定化、豊かさの変容など、様々な形で我が国社会のあらゆる側面に影響を及ぼしている。さらに、知識を基盤とする経営の進展、労働市場や就業状況の流動化、情報流通の加速化や価値観の急速な変化などが伴い、個人にとっても社会にとっても将来の予測が困難な時代が到来しつつある。

5

それでは、まず学生の主体性をいかに育むかということについて、4つのことをこれからお話し申し上げます。つい最近、中教審のほうから、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け主体的に考える力を育成する大学～」というふうな答申が出ました。一番下をご覧ください。個人にとっても社会にとっても、将来の予測が困難な時代、これが今回のキーワードなんです。学生の主体的な学習というのは、決してこの答申に始まったわけではなく、ずっと言われていますし、私たち大学関係者であれば当たり前のように、学生は主体的に学ぶものだというふうなところは、恐らく持っていらっしゃると思います。答申で私が解釈している重要なことは、この「将来の予測が困難である」というところです。そういう時代の主体性とは何かということも、もう一度私たちは考え直さないといけないという意味だろうと思っています。この、青色をつけさせていただいたところは社会的背景となっています。

続いて、この表がまた小さくて大変恐縮なんですけど



ども、縦の棒グラフが18歳人口の変化です。ずっと落ちてきて、今後18歳人口が減っていくんです。これは確実です。その中で、やはりどの大学も、入学者をどう確保していくかというところに大きな問題を抱えると思います。そうすると必然的に、学生さんに何とか入ってきてもらいたいとなりますので、いろいろな学生さんが入ってくるようになるわけです。学力の高低差もあるでしょう。社会的背景、家庭環境の違いもあるでしょう。ひょっとすれば、留学生のウエイトも広がるかもしれませんし、社会人学生の割合も増えるかもしれません。確実に、これまでとは、また違ったかたちの授業、教育のあり方ということを模索していかなければいけない時代にきているというふうにとらえていただけるとよいかと思います。恐らく、あぐらをかいていられる大学は、東京大学、京都大学、早稲田大学、慶応義塾大学ぐらいでしょうか。そうでないところは、すべて、私たち山形大学も道州制の議論とともに、いつなくなるかわからない。20年後の山形大学はないかもしれないという思いで、私たちは普段FDをやっています。そういうかたちで社会が動いてきているということをご認識いただけると幸いです。

中央教育審議会答申(2012.8.28)

将来の予測が困難な時代において高等教育段階で培うことが求められる能力(学士力)

答えのない問題に解を見出していくための批判的、合理的な思考力等の認知的能力

チームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担う、倫理的、社会的能力

総合的かつ持続的な学修経験に基づく創造力と構想力

想定外の困難に際して的確な判断ができるための基盤となる教養、知識、経験

7

こちらが中教審の答申で、こういう能力を学生につけさせようという、4つの大きな軸です。答えのない問題に解を見出していくための批判的、合理的な思考とか、ずっと書いてありますが、なるほどと思います。ところが、もう少し違うバックグラウンドを申し上げたいと思いますが、学生参加型の授業というのが昨今増えてきているんです。アクティブラーニングという言葉で、能動的な学習を学生にさせようという授業形態がよく叫ばれています。しかし、そういう授業が求められる背景には大きく2つあるんですよという議論があります。

ひとつは、今ずっと申し上げてきたような学習意欲、あるいは学力の低下への対応。もうひとつは、中教審で言われていたような、いわゆる高度な創造性です。

先ほど挙げましたような4つの力。こういうものを育てるために、参加型の授業というのをやりましようと言われているんですけども、一方で、そこまでいくちょっと前の話なんですという状況もあると思うんです。そんな創造性とかではなくて、とりあえず私語が大変なんだとか、もう確信犯的に、かばんを机の上に置いて寝ているとか、まず、そういうところからやっていかないといけないんですという事情のある大学さんもあります。そういう意味では、この辺りの両方を意識しながら学生と向き合っていく必要があるのです。

あるいは、こういう研究もあります。ここでは、ボーダーフリーというのが大体偏差値40前後と規定されていますけども、学習の意識は高いけれども、授業に対する期待は低くて授業外ではあまり勉強しない。サークルやクラブ活動にも、あまり熱心ではない学生が多いという結果が出ています。

また違う研究ですけども、これもボーダーフリーは同じ偏差値40ぐらいで、逸脱行動と言います。今、言ったように寝るとか、そういうことを調べると大きく3つぐらいのカテゴリに分けられて、疑似出席ですね。最近だと出席管理システムとかで、学生カードをピッとやって出席しましたとやるんですけど、ピッとやったらすぐ帰る学生が居る。大体、カードリーダーは入り口付近に設置してあるんです。そうすると、入り口でピッとやったら、このまま帰れるわけです。じゃあ、何でカードリーダーを黒板の近くに設置しなかったんだろうとみんな言っているんですけど、恐らくそこまで想定できなかったんでしょうね。動線的に考えると、入ってすぐピッと座るほうがいいんですけど、やっぱり学生は賢いんですね。そういうことがあります。

あとは、ながら受講です。私語の問題。携帯電話、居眠り、漫画、飲食。私も非常勤で短大さんの授業に行っているんですけども、そういうときに、入り口から一番遠い一番後ろという、非常にデンジャラスゾーンに座っている学生が、パンをむしゃむしゃと食べていたんです。何回も目が合っているんですけど、それにもかかわらず食べ続けるわけです。それで、「食べ続けてるわ」と思って、仕方なく近くまで行って、「授業中だから食べないでね」とお願いしたらやめたんです。それで、その学生さんは授業が終わったら、そのまま帰ろうとするので、「ちょっと待って」と。何か一言、言っていっぱいほうがいいんと違うかなと思いながら声を掛けて、「さっきパン食べてたね。何で食べたの」と聞いたわけです。そうすると、「お腹空いていたんです」と言います。お腹空いていたら授業中食べるんやと、びっくりしました。そうしたら、意

外なことに、「こうやって初めて言われました」と言うんです。今まで食べていても、先生は何も言ってこなかったそうなんです。

僕は、授業の中である程度ルールを言うんです。お喋りをしないでくださいね。なぜならば、映画館でみていたら皆さん喋らないでしょとか、あるいは、途中で入ってくるのはいろいろな事情があるでしょうけど、堂々と前を横切らないでくださいと。すでに授業を受けている学生さんの邪魔にならないように、後ろのほうからこっそり入ってこっそり着席してね、と理由をつけて説明するんです。違う学生さんも授業が終わってから来て、そういうルールをしっかりと伝えた先生は初めてです。私は本当に必要やと思っていたんですというような話を聞いたりとかしたので、意外と学生は知らないだけということもあったりするので、言ってみたらいいかなとも思います。

こういう逸脱行動ということもあるわけです。暴言。「おまえに何でそんなこと言われなきゃいけないんだよ」とか言うらしいです。乱暴というのは、腹が立って机とかをけるということです。僕も3年ぐらい前、学生さんに注意したんです。ハサミで髪の毛を切っているんです。「何してるんやろう？」と思って、「ちょっと」と言ったら、ハサミをバンと机の上に投げつけてムスツとしたんです。本当に縮み上がりました。一瞬刺されるんかなと、気を付けないといけないなと思いました。そういう乱暴行動というのも見られるそうです。青学の学生さんはどうですか。こんなの、まさかですよ。ないと思いますけれども、もしありましたら、また後ほどの意見交換の場に出していただければいいかと思います。

2-1. 主体的学習支援の授業実践の位置づけ

学生の主体的な学習を育むために

- ①制度、カリキュラム、授業、課外活動の検討
- ②授業者の役割の検討
- ③主体的学習に影響を及ぼす諸要因の検討
- ④人員、施設・設備、予算、組織構造

12

さて、本日の話のバックグラウンドといいますか、位置付けをお話ししたいと思います。主体的な学習を育むためにはいろいろな話が必要になってきますけれども、全部やっている時間はないので、まず、きょうはこの3、主体的学習に影響を及ぼす諸要因の検討

をして、今回は、1、2、4については扱わないということにしたいと思います。これについては、話す時間がもし必要なようでしたら、また呼んでください。一応、新任用ということで、参考がてらに載せておりますので、1番、2番、4番については、また興味がありましたらご連絡をいただければお返事申し上げます。

③主体的学習に影響を及ぼす諸要因の検討

- ・教育技術
- ・学習環境
- ・教授—学習プロセスの理解
- ・教員の倫理観、学習観

16

さて、3番の、主体的学習に影響を及ぼす要因の検討という内容につきまして、それも話し出すと、細分化すると、本当はいろいろなことがもっとあります。ただ、きょうは教育技術だとか学習環境とか、教育学習プロセスだとか、そういうところに焦点を当ててお話し申し上げたいと思います。

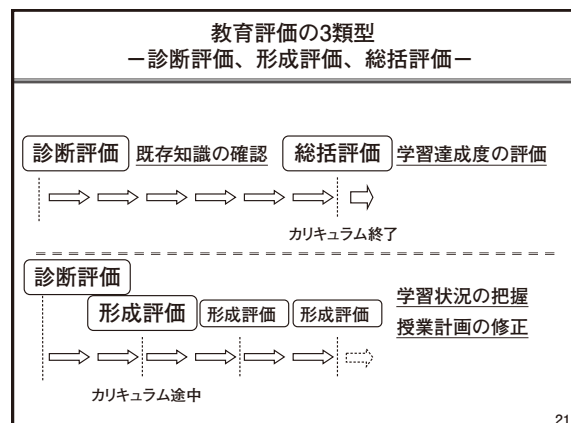
いろいろところで学生の主体性という話をすると、私たちも必ず質問を受けます。主体性と言いますが、それは学生への迎合ではないのかとか、どんな主体性でもいいんですかと。寝るのだって主体性でしょと言うわけです。もちろんその通りです。ですから私たちは、どのような主体的学習を期待するのかということを問わなくてはならない。世の中には、参集、参与、参画とかいろいろな分類がありまして、参集というのは単に集まっているだけの、今の状態です。参与というのは、何かみんなで一緒にやりましょうということで活動を行う。参画というのは、これでしたら研修会自体を皆さんで運営していくというようレベルの分け方ですけども、そういうふうなかたちで分けていらっしゃる方も居れば、受動的なのか能動的なのか、浅いのか深いのかとかいうかたちもあります。こういうものは、大学さん、学科さんで、検討しながら共有していく必要があるんだろうと思っています。

先ほど申し上げたように、先生、個人個人での判断に委ね過ぎてしまうと学生には入っていきません。「こんなの言われたの初めてです」とか「何で先生、そんなに勝手に言うの」とか。「遅刻が許せないなんて、そんなにほかのルールにはないし」というて、逆に責

められてしまうんです。信頼関係を失ってしまう。そういう意味では、ある程度シェアをして統一したルールというのもしいておかないといけないだろうと思います。

本題の近くにつきましたが、それでは、なぜ主体的学習をしないのか。ここが重要な、きょうの1つ目のテーマになります。先生方も工夫をされていると思いますが、学生の学習意欲は向上しないと。いくら授業者が努力しても、学生にも努力してもらわないとよくならないんだと。もちろんその通りです。では、学生に努力してもらうためにどうするかを、私たちは考えなくてはならない。「努力しろ」と言ってするんだったら、多分苦勞はないわけです。学生諸君に、「努力せよ」と叱咤激励して、「わかりました」と言ってし始めたら、もう万々歳です。よかったねということですが、そういう学生ばかりではありません。それでうまくいく人も居るでしょうけれども、そうでない場合は、駄目だねと。でも、私たちは、学生がやる気ないから、私がいくらやっても駄目なんだといってあきらめないで済むようにしたいわけです。目の前の学生に何とか育ててほしい。いい人生を切り開いていく力をつけてほしいと願っているわけです。

そのために、なぜ向上しないのかを診断しなくちゃいけないんです。観察、質問紙、インタビューですね。あるいは、直接学生に話を聞いてみるというようなことがあっていいんだと。この診断評価、形成評価については、次のスライドでご説明します。



21

教育の評価には、大きく3つの類型がありまして、診断評価、形成評価、総括評価というのがあります。こういう難しい言葉は、決して覚える必要はありません。こんなんがあったなというぐらいで、軽く流していただければ結構です。診断評価というのは、既存知識の確認のために行います。よく、プレイズメント・テストと言われるんですが、それに該当します。そして、15回の授業が終わったら成績評価のためのテスト

をします。それを、総括評価と言います。これは、学習達成度を評価するために行う評価なんです。

一方で、診断評価をして、次に形成評価というのが入ることがあります。これは何かというと、例えば15回の授業の内の3回目と5回目と7回目とか、カリキュラムの途中に入れていきます。何のためにするかというと、成績のためではなくて、学習できているか、ちゃんとわかっているかという確認をして、わかっていない場合は、もう一回来週説明しようかなとか、補習教材を提示しようかなとか、授業計画を修正していくために行う確認のためのテストです。それを何回かやっていて、最終的には総括評価にたどり着くというかたちが、一応評価の3類型というふうになっております。

2-3. なぜ、主体的学習をしないのか

①知識的要因

主体的な学習のあり方を知らない

②技能的要因:

主体的な学習のあり方を知っているけれど、うまくできない

③情意的要因:

主体的な学習のあり方を知っているけれど、やろうとしない・やる気を持たない

22

さて、なぜ主体的学習をしないのか、大きく3つに分けられます。1つは知識的要因。知らない。やり方がわからない。2つ目、やり方は知っているけどうまくできない。3つ目、やり方を知っているけども、やろうとしない。大きく、この3つに分かれています。きょうは、その3番目にターゲットを当てたいと思います。1番と2番については、こんなんありますということで、また参考がてらにご覧いただければと思います。

なぜ学習意欲が向上しないのか。情意的側面に沿ってご説明します。いろいろありますけども、例えばこういう研究があります。大学、あるいは専門分野に対して、適応しているか、していないかを進学動機との関連でいいますと、当たり前と言えは当たり前なんですけれども、適応できている人は進学動機、要は、目的意識がはっきりしている。逆に、適応できていない人は、はっきりしていない。あいまいだとか周囲の勧めだとか、やはりそういったものは、意欲が高まらないというふうな結果が出ています。

あるいは別のデータ、全部はちょっとお話し申し上げられませんが、また後ほどご覧ください。これも

熊本大学さんが8年ほど前、学生にアンケートを取りまして、A、B、Cに分けたわけです。特に多い意見は板書。これは逆に言うと、学生さんは読みにくかったら嫌なわけです。丁寧じゃなければ嫌だとか、板書せずに口頭だけでと喋られるとついていけないとか、いろいろあるわけです。スピードが速すぎるとか。このスライドもスピードが速いでしょ。僕も時間をせきながらやっているんで、ついつい速くなってしまうんですが、これはハンドアウトをお配りしているのですが、これはハンドアウトをお配りせずにメモを取りだしたら、多分皆さん怒りだすと思います。もうついていかれへんがな、情報量が多すぎる、というふうになると思います。

話し方、これは私もついつい大阪弁で速いんですけども、速すぎる。知識を知っている人が喋っていることを知らない人が聞くというイメージ、わかりますかね。僕なんかは、最近の若者の喋っている言葉は何を言っているかわからないですからついていけないんですけど、彼らや彼女らは、知っている世界だからウワーと喋る。1つ、2つわからない言葉が出てきたら、僕は途中で投げ出します。アウト。僕はサブカルチャーのことは知りません。ゲームの話をしだしたら、もう、延々と続きます。そういう話し方のスピード。そういったものには気を付けないといけないです。

a) 特に多い意見

<話し方>

スピードが速すぎる
大切な所やまとめはゆっくりと
声が小さい
はっきりとした話し方で
気持ちのこもった話し方を
(教室によっては)マイクの使用を

<授業時間>

開始時刻に遅れないで
延長しないで

27

これはおもしろいですね。気持ちのこもった話し方。どういう感じなのでしょう。よく学生に聞くのは、こういうかたちで、ただテキストを、「2012年度第2回大学新任教職員研修会次第です。日時は……」と90分されたら、それは眠くなりますよね。お経を聞いていたら眠くなるのと一緒で、いい意味も悪い意味もなく、単調な話し方というのは、やはりつらくなるものです。話しているほうは、ものすごいノリノリなんです。ノリノリでバーッと喋るんですけど、大抵そういうときというのは、学生さんはノレないことが多いかと思います。

a) 特に多い意見
<レジュメ・配布資料> レジュメを配って 内容が中途半端 資料を授業に沿ったものに 多すぎて重要な点がわかりにくい 早めにウェブに掲載して <説明・解答> 設問を詳しく丁寧に説明して 設問の答を明確に詳しく書いて 他の先生や実務家に尋ねても、正確な解答を明示して

28

あとは、説明。回答もそうですが、丁寧に説明してほしいとか、ほかの先生や実務家に尋ねても正確な回答をしてほしいとか。これは私もよくやってしまうんですけども、ごまかしてしまうとかいうことがないように、次回には必ず、学生からきた質問には答えるようにしています。

難易度。難しすぎる。言い回しが難しすぎる。私たちの使う専門用語というものは、やっぱりちょっと難しいかもしれない。そういう意味では、サイエンスコミュニケーションというのがサイエンスの世界ではありますけども、難しい言葉を難しくないかたちで説明できるような意識は持たないといけないかもしれないです。

深刻な意見というのが中にはありまして、先ほど言いましたように教科書を板書しているだけとか、板書をノートに写すだけとか。あとは、私語が多い、ばかにしたような言い方をしないでほしい。汚い言葉を使わないでほしい。いらっしゃるようです。地方国立大学である熊本大学でも、こういうふうな意見が出てくる。授業の計画が思いつきや行き当たりばったりだとか、脱線がひどい。私も脱線がひどいんですけども、時と場合で、脱線がよかったという場合もありますが、なかなか、学生はこれがつらい。ここは重要だと思います。学生の理解への配慮です。理解度を把握しないでどんどん進められても困るということだと思います。あとは評価。課題があいまいでわかりにくいとか、いろいろ書いてあります。Cの、好評な授業への意見というのは、また後ほどグループワークの際にご参考いただければよいかと思います。

こういうかたちで、いろいろ紹介をしてみました。ここで、突然のようですがグループディスカッションを行っていただきたいと思います。テーマは、学生の主体的な学習、あるいは学習意欲に関する皆さんの授業、事務職員さんの方は、自分が受けてきた経験から結構です。どのような問題を抱えているか。

そして、どのような学習意欲の低い学生が見られるか。それは一体なぜなのかについての、意見交換、情報交換をしていただこうと思います。

ここで… グループディスカッション(1)を行います。 テーマ： 「学生の主体的学習」「学生の学習意欲」に関する、みなさん各々の授業(講義型授業)における課題 ①授業においてどのような問題を抱えているか どのような「学習意欲の低い学生」が見られるか ②学生は、なぜ学習意欲が低い・向上しないのか
--

40

グループディスカッションの進め方 ・6名程度で1グループを形成。身体が向き合うように座る。 ・タイムスケジュール (1) グループ形成, 自己紹介 約6分(1人1分×人数) 氏名、所属、専門領域、テーマ①について (2) テーマ②についての意見交換 20分 テーマ①に関して、「なぜ、学習意欲が低い・向上しないのか」(テーマ②)について ※ どなたか1人、グループの議論を記録してください。

41

グループディスカッション



杉原先生

さて、休憩を取られてリフレッシュされたと思いますので、今から、また30分ほど私のほうから話を致しまして、その後グループワークというふうに進めてまいります。では、前のほうをご覧ください。

できれば、きょうは講義型の授業に特化したいと思っています。先ほどは、なぜこうなのかということを考えていただきましたので、これからの時間は、講義型授業の学習意欲向上のための対応について、どうやっていこうかというふうな解決に向けて、皆さまの議論のきっかけをつくりたいと思います。

3. 講義型授業における学習意欲向上のための対応

- 3-1. 学生の声、教員の経験からのノウハウ集
- 3-2. 学生の主体的学習を意識した授業計画
- 3-3. 学習意欲向上の理論

42

3つほどご紹介していきたいと思います。まず、私たちが2年ぐらい前につくった、学生の声と教員の経験からのノウハウ集というものがあります。それが、このビデオ『あっと驚く大学授業NG集』でして、ホームページで毎週1本ずつご覧いただけるようになっております。きょうは、この一部を今からご覧いただくと思います。これをつくった目的は、ここにNGと書いてありますけども、決してこの人たちが駄目で、つるし上げて、こういうやつ給料を差っ引けとか、そういうことをやろうとしたわけではありません。あくまでも、議論のきっかけにと思ってつくったものです。ですから、中にはギリギリのグレーゾーンのものもあります。これは全然NGではないだろうというものもあります。そういったものをちりばめながら、皆さま方、ご覧いただいた方々が、じゃあ自分たちはどうかとか、じゃあどうやったらうまくいくかといったようなものを考えていただきたいと思います。つくったものです。

ビデオで流すために多少誇張してあります。あとは、自分で言うのもなんですけど、ユーモアを入れたかったのでユーモアを入れています。なので、ぜひ笑ってください。ここで笑っていただかないと、私はなかなかつらいものがございます。おもしろければですよ。おもしろくなかったら笑わないでください。一部分だけ、3つほど見ていただこうと思います。

(DVD始まり)

「2. 学生を見下す」視聴

申し上げるのを忘れましたが、これは演技です。決して盗み撮りではございません。学生も演技です。その辺りをよろしく願います。では、続きまして。

「3. 身内自慢」視聴

「4. 放任教室」視聴

こういうかたちで、今、3問だけご覧いただきましたが、興味がありましたら、また、この下にアドレス

3-1. 学生の声、教員の経験からのノウハウ集

学生の学習意欲の向上を阻害する講義型授業の事例
ビデオ「あっとおどろく大学授業NG集」

- | | |
|--------------|---------------|
| 1. ダメ教師かな? | 7. 僕たちに怒っても…。 |
| 2. 学生を見下す | 8. 一方通行 |
| 3. 身内自慢 | 9. えこひいき |
| 4. 放任教室 | 10. 情報の嵐 |
| 5. 後部座席 満席です | 11. 教師の時間 |
| 6. 重ね書き | 12. 黙る人 |

参照: <http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/kyouiku/video.htm>

43

がありますのでご覧いただければと思います。

あそこにヒントのいくつかは示しましたが、今、ご覧いただいたようなかたちをどうしていくのかということも、恐らく1つではないと思うんです。たとえば、身内自慢がありましたけれども、それがうまくいくときもあるわけです。先生の生まれ育った環境とかを聞けてよかったというときもあるんですけども、それがマイナスに働くときもあって、じゃあ何が違うんだろうとか、そういったことも、また後ほどお話しいただけるといいかと思います。

3-2. 学生の主体的学習を意識した授業計画

(1) シラバスの構造

- ◇授業名
- ◇授業担当者名, 開講日時, 対象学年等
- ◇学習目標・到達目標
- ◇講義概要
- ◇授業計画
- ◇評価方法
- ◇教科書、参考書

44

続きまして、学生の主体的学習を意識した授業計画について、少しお話し申し上げます。何かというと、シラバスです。シラバスの構造は学校によってもいろいろ違いますが、青山学院さんは恐らくこういうかたちになっているのかと思います。シラバスを書かれた先生方は多いと思いますので釈迦に説法かもしれませんが、確認のためにということでしばらくおつきあってください。

シラバスは何かということです。このときに、学生の学習といったものを軸にシラバスというものをつくらせて、授業計画を編成していく必要があるのだろうということです。これまでは教育といいますと、こんなことを教えます、こんな内容を取り扱います、こんなテストをしますという、何を教えるかというところに

重心があったんですけども、その先に、では、それによって一体何が学ばれるのかとか、どのような知識機能、能力が身につくのかということを、読者である学生は知りたいわけです。どのような学習活動を行う必要があるのか。どのような知識の能力が評価の対象となるのか。いつごろ、どのように備えればいいのかとか。あるいは、費用がどの程度かなども書くことになるかと思います。

これは山形大学の中で調査をしたことがあるんですけども、学生が重視する項目で一番多かったのが成績評価です。成績評価にかかる内容と水準と方法です。要はここです。成績評価の対象となる活動はいつごろ備えればいいのかとか、そういう辺りを一番気にするようです。

あるいは、学習内容、学習形態です。講義型なのか演習型なのかとか、そういったことも学生は心配します。先ほど皆さんにさせていただきました、グループワークというかたちの授業が苦手で、自分はやりたくないですという学生も中には居ます。聞いているだけの、講義型のほうが楽だからかもしれません。あるいは、学生によっては、かつて、例えば中学校だとか高校の時代に、文化祭だとかいろいろなかたちで、チームで何かに取り組んだときに嫌な思い出のある学生が結構居ます。リーダーになったけども、先生とチームメンバーとの間で板挟みになって、すごく悩んでしまったからもう嫌なんですという学生は結構居ます。そういう意味で、どういう学習形態なのかということも学生は気にしていますので、こういったものもシラバスを書く際には意識をしていただくとよいかと思います。

3-3. 学習意欲向上の理論

学習意欲を高めるための「ARCS」モデル (Keller, J. M., 2010)

- A: Attention (注意)
- R: Relevance (関連性)
- C: Confidence (自信)
- S: Satisfaction (満足感)

46

続きまして、学習意欲向上のための理論について、少しご紹介したいと思います。世の中には、学習に関する概念というのがたくさんありまして、すべてご紹介するわけにもまいりませんので、きょうはその内のひとつだけを紹介したいと思います。何かといいますと、この「ARCS (アルクス) モデル」というもの

です。アークスモデルとも読みます。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、Aはアテンション、Rはレリバンス、Cはコンフィデンス、そしてサティスファクションと。この要素をうまく組み合わせれば、学習意欲が向上しますというモデルです。こういう専門的な用語というのは、ぜひ気になさらないでください。なんとなく、こうなもんなのかなと心に残ったものだけを、後ほどのグループワークでご活用いただければよいかと思います。

ARCSモデル A: Attention (注意)

- ①知覚的喚起
概念間の手順や関係をフローチャート・絵コンテ・略図・漫画など目に見える方法で示す、強いアイコンタクトをとり熱意を表わす、等
- ②探求心の喚起
トピックを問題含みに質問する、矛盾を感じさせる、未解決の問題を説明する、等
- ③変化性
説明方法に多様性を持たせる(口頭、板書、スライドなど)、内容の提示と回答を求める事象との間に多様性を持たせる(質問、練習、パズルなど)、等

47

Aのアテンションはどのようなものかといいますと、知覚的な刺激を使いましょうということです。あるいはここに、強いアイコンタクトとありますけども、やっぱりこうやってお話しするのと、ずっと下を向いて喋るのとでは、全然学生の注意喚起、アテンションが違ってきます。では、どうやって見るんですかというときに、いろいろなノウハウがあります。のの字型にこうやって見ましようという人も居れば、Z型に見ればという人も居ます。いろいろなやり方があります。ある先生は、心の友方法とか言うて、4つほど、教室の前と後ろ、右側の前と後ろによくうなずいてくれる学生を見つけるそうです。その学生をパッと見て、パッと見て、パッと見て、パッと見たら全体を見ているようになるらしいです。そういう方法を取ってらっしゃる人も居るかもしれません。やっぱり私たちはこういう職ですから、先生の中にも人との付き合いが得意ではない人も居ると思います。そういう人は、目を見るのが恥ずかしかったらおでこを見ると、遠くからは目を見ているように見えるとか、そういうちょっとした工夫ひとつでだいぶ変わってくることもあるようです。

探究心の喚起ですね。これは問題含みの質問をしたりとか、要は単に知識を教えるだけではなくて、そこから質問、あるいは疑問をわかせるような構成にしたりしていくということです。変化性、説明方法に多様性を持たせる。こうやって、90分ずっと喋っているばかりだと、やっぱりつらいです。私なんかもこうい

う仕事をしていますから、ほかの先生の授業とかを見に行くんです。私は仕事だし、どんな授業をやっているのか本当に知りたくて、ワクワクしながら見に行くんですけれども、大体50分たったら集中力は切れます。はあっと疲れて、途中から耳に入ってこなくなるんです。僕は50分ですけども、大体心理学的には15分と言われています。50分でなんやろうと思ったときに、中学、高校の授業が50分なんです。多分僕は、それが体に刻み込まれているのかなという感じはしました。

そういうかたちで、15分間、あるいは50分間も同じ話を続けるのが無理なときは、少し板書を入れるとか、先ほどのようにちょっと動画を入れるとか、あるいは、「…」といった感じで沈黙を入れるだけでも変わるんです。大体、ずっと喋っているとBGMになるんです。皆さんも経験ありませんか。車をずっと運転していて眠くなって、とまってエンジンを切ったらお子さんが起きるとかありませんか。あれは状況が変化するからです。静かだから、ハッと起きるということもあります。特に板書のときがいいと思います。ずっと喋らずに、書いていると必然的に黙るので、何か違うことが始まったぞという雰囲気が生まれるのです。そういったものもうまく使っていきましょうというのがアテンションです。

ARCSモデル R: Relevance (関連性)
①目的志向性 獲得できる知識・技能が学習者のゴールに関連していることを説明する、ゴールに関連した事例や課題を用いる、獲得した概念やスキルを活用させる応用問題をさせる、等 ②興味・動機との一致 個人ごとの達成機会とグループによる協同作業を組み合わせる、目的達成のロールモデルを提示する、等 ③親しみやすさ 三人称や人類全般に言及する文章より人称代名詞や人々の名前の使用を含んだ文章を用いる、学習者にとって身近な場面から具体的に事例をあげる、学習者の名前を覚え呼ぶ、等
48

R、これが、結構学問的には重要だと思います。目的です。一体何のためにやっているのかということ、しっかりと自覚してもらう。これは何に役立つんですとか、これの先に一体何が待っているのかということ意識させる。私は教養教育専門なので、そういう授業を1年生に向けてやっているんです。教養教育とは一体どういうものなのかというような、歴史的な変遷とか、今、中教審でこんなことを言われていますとか、山形大学は教養教育でこういうことを目的としていますとか。あとは、いろいろな研究者、論者の、教養とはこうだみたいなものを紹介しながら、では、皆さんにとっての教養とは何でしょうか。皆さんは、山形

大学で1年間教養教育を受けますけども、何を指したいですかというような授業をやっていると、学生のほとんどが、教養教育のことなんて考えたこともなかった。教養が一体何であって、何のために教養教育を受けているのかと初めて考えた。それまで学生は、専門を学びに大学に来ているので、教養というものは邪魔なものなんです。考えたこともないからということで、彼らは非常に、目が覚めるように変わっていきます。そういうかたちの、目的志向性も非常に重要なんだろうと思っています。



興味、動機との一致というのはわかりやすいことだと思いますし、親しみやすさということもそうですね。学習者の名前を覚えるというのは、人数が増えてくるとなかなか難しいかもしれませんが、ある学生はこう言っていました。山形大学は一学年、大体1,800人居ますから、教養教育の段階では僕らはいちいち覚えていないんです。そうすると学生は、「スギハラ先生だ」と思っても、「先生は私のことを覚えていないだろう」と思うみたいで声を掛けないと言います。もったいないと。ここで声を掛けたら何かいろいろな話ができるかもしれないし、「研究室来る？」とかいって、お茶でも飲みながら喋ったら、すごくいい学びがあるかもしれないんですけども、声を掛けづらいんです。ですから、こちらが名前を覚えて、逆に、「おお、田中くん」とか呼びかけたら、向こうは「何で知ってるんですか」とか喜んで、ウワーとエンジンがかかってくるということもあります。これが関連性、レリバンスです。

次は自信。これも重要なところですけども、学習目標を提示。要は自己決定です。自分が一体どこまでたどり着けばいいのかということが見えるということです。ある程度、それを自己決定できる裁量があれば、決められた学習ではなくて自分で決めていけるということである気が出てくる。

成功の機会。これは、もういわずもながだと思えますけども、小さな成功体験が次へのモチベーションをつくるということです。個人的なコントロール、これもそういうことです。青学さんは多分違うと思いますけど、私たちも大学のいろいろな教授会のような会議

ARCSモデル C: Confidence (自信)
①学習要件 学習目標(行動目標)の提示・自己決定、最終レポートの基準や例の提示、等 ②成功の機会 学習者に活動(簡単なものから難しいものへ)させ成功を支援する、成功のフィードバックを与える、等 ③個人的なコントロール 学習内容・順序や評価方法等を選択させる、学習環境を選択させたり自ら作らせたりする、成功にかかる個人の努力を認める、等
49

で、いくら意見を言ってもまったく反映されなかったら、その内、言うのやめようと思いますよね。思いませんか？ こういうのを学習の無力感というんです。何回やっても無理やなと思って、自分でコントロールできないものだと、もう手が届かないところやと思うと、どうしても人間というのはモチベーションが下がります。そういうことに関しての要素だと思ってください。

ARCSモデル S: Satisfaction (満足感)
①内発的な強化 新たに獲得した知識技能を使用する機会を与える、タスクを習得した学習者にまだ達成していない学習者を助ける機会を与える ②外発的な報酬 賞賛の言葉、個人的な注目(脅威・監視であってはならない)、成果が見えるように提示させる、等 ③公平感 学習内容や要求水準等に関して、日常授業と最終テストとの間に一貫性を持たせる
50

次は満足感。サティスファクションですけど、これは内発的な共感です。内発的動機づけとか、外発的動機づけとかよくありますが、とにかくおもしろい。使ってみたら使えた。解決できたとか、そういう内発的なおもしろさ。外発的な報酬というのは、称賛。「よかったね」、「すごいね」とか、質問をしたら、「いい質問だね」とかいう、ひとつの言葉が大きく変えたりします。あとは公平感です。この辺りも、学生は非常に敏感に感じています。

こういったものがうまく組み合わせられていると、学習の意欲が上がりますというひとつの紹介を致しました。このモデルから、学習意欲が向上しない理由ということを少し考えてみると、例えばこうなるんじゃないかと思います。

アテンションでいうと、例えば、授業が単調で退屈で眠いとか、考える機会が少なくて受け身になってしまふとか、ほかに気になることがあるとか。なので、

この辺りに対する対応策を考えれば学習意欲は向上するのではないかと。

レリバンスでいうと、専門分野との関係性、キャリアとの関係性、それから世界との関連性をわかるように説明をしたり、考えてもらう時間をつくったりとか。あるいは、教師に反感を持っていると、何を言ってもその後は入ってきません。

先ほど、はさみを投げつけた学生を紹介しましたが、私はやっぱり失敗しました。そのときちょっときつく言ってしまったので、はさみを投げた学生は半年間ずっと反抗的な態度を取りまして、僕がいかに柔軟な対応政策を取ろうが、もう向こうは聞く耳を持たない。結果、学習成果が低かったです。学びが全然深まらなかったです。それは僕の責任だと思っています。反感を持っているとしたら、どうやって関係性をつくっていくかということを、また考えていただくといいかもしれません。

自信でいいますと、不安である、指示を待ってしまうとか、恥ずかしい、あきらめている。よく、「じゃあ何か質問ありますか」とマイクを回すと、ひとつも言えないんです。何で言えないのと学生に聞くと、恥ずかしいというのが多いです。やっぱり、みんなの前で言うのは恥ずかしい、あるいは「KY」になりたくないとかよく言います。空気を読みたいんです。中学校ぐらいからだと思いますけども、そういう子、いませんでした？「はいはいはい」と小学校のときは手を挙げるんですけど、そのうち挙げなくなるんです。それは、「挙げてるよ、ばかじゃない」みたいな空気がどこかで生まれるんです。日本で不思議な国なんです。僕も小6のときに、意識的に挙げなくなりました。「挙げてるやつ、ばかじゃない」というほうに自分で乗ったんです。そういうことがあるようです。ですので、こういう空気をどうやってつくり変えていくかということも、またひとつ私たちの挑戦課題なのかもしれません。

サティスファクションという、満足しないということです。暗記ばかりでつまらない。そもそも勉強が嫌いだという人は少なくないと思います。ですので、満足できる活動へ逃避していくと。クラブ、サークル、アルバイト、子どもたちとゲームをするとか、そういう活動になってしまいます。

さて、では、今からまたグループディスカッションを行っていただきます。テーマは、先ほど1番と2番についてお話いただきましたので、どれでも構いません。その内の1つでも構いませんし2つでも構いません。時間の許す限り、これに対して、どうやれば学



習意欲が向上して主体的に学生は学習するようになるのかという工夫についてのアイデアを、ぜひ交換していただきたいと思います。

その前に、私の授業実績における工夫について少しご紹介をして、グループディスカッションに入りたいと思います。

4. 講義型授業の実践事例

- ◆科目名
・「保育課程総論」
- ◆カリキュラム上の位置づけ
・幼稚園教員免許必修科目、保育士資格選択必修科目
講義形式
- ◆受講者
・2年生(某大学短期大学部)。60名×2～3クラス
- ◆授業構造
・確認テスト10分、講義60分、演習20分

52

講義型授業の実践事例です。これは、私が非常勤で言っている短大さんのほうの授業紹介です。幼稚園教員免許の必修科目で、60人を3クラスなり、2クラスぐらい持っているというかたちです。授業構造は、本当は最初90分喋ったときもあるんですけど、ちょっと無理だということがわかりまして、すぐに講義を60分ぐらいにして演習を半分入れました。確認テストについては後ほど申し上げます。

授業目標はこんな感じです。

「保育課程総論」授業目標

保育課程(教育課程)の意義および保育内容の構造などを学び、保育課程の立案・作成ができるようになる

- ・保育課程の意義を理解し、説明する
- ・保育課程の構造を理解し、説明する
- ・保育課程を立案・作成する

53

内容はこんな感じです。後ほどご興味がありましたらご覧ください。

授業内容

- 保育課程の概要について学ぶ
- 長期指導計画と短期指導計画の概要について学ぶ
- 幼稚園における教育課程の意義やあり方について学ぶ
- 保育所における保育計画の意義やあり方について学ぶ
- 実践編1:保育所0～2歳児に関する保育計画について学ぶ
- ⋮

54

学習活動につきましては、講義とテストをするだけでは、学生はどうしても受け身になって、アテンションとサティスファクションが欠如してパタパタパタ…と寝ますし、当然のごとく机の下でこうやって携帯をいじっている。バレバレなんですけど、見つかっていないと思っているんでしょうね。ずっとやってらっしゃるんです。で、これはまずいと。これを私が叱責して、「おい、やめなさい」とかっていうルールをつくってもよかったんですけど、やっぱり違うかたちでチャレンジしたいと思って、とりあえずテキストの内容を活用する演習、ワークを入れてみよう。それが、先ほどの20分間演習と書いたものです。

しかし、ワークに割く時間分のテキスト内容を説明できない。20分演習に取りますから、その分どうしてもテキストを伝えられないわけです。どうしようかと思って、仕方なく、授業時間外で読んできてくださいと。私はゼロの状態から説明しませんが始めて、こういう構造になったわけです。しかし、大体、読んできてもらうだけだと読んでこないんです。なので、テストを冒頭にやります。知識確認テスト10分と書いているのはそこです。授業の最初にテストをしますと。それは成績評価に入れますということで、10問穴埋めクイズ、これは暗記型の確認テストをいきなりやります。その後で解説をして、最後に演習をするという大きな構造を取りました。

それでも、私もこんな話を皆さまの前でしながら、全然パーフェクトに授業ができているわけではありません。課題もたくさんあります。例えばこれです。やはり、そうはいえども学生は覚えることを目標としてしまうんです。しかし、この保育計画の構造を覚えるだけでは実践には活用できないんです。指導案、授業案とかよく言いますが、授業のアイデア、案を、計画を、シラバスのようなものをつくっても、それは

それ。実際に実習に行くと、そんなつくった計画はどこかに行ってしまうんです。目の前で全然違うことをやりだすというようなことが起きてしまうと、まったく意味がないんです。本来、構造の深い理解というのは、保育実践そのもので、本当は計画をずっとつくっていくと、頭の中で保育をしているという状況にならないといけないんです。でも、全然ならなくて、単に覚えているだけということで、言うたら無駄な時間になってしまっているわけです。これはなぜかと思ったんです。私なりに、いろいろと学生に聞いたり考えたりして、恐らくこういう3つがあるのかと思っています。

覚える学習を行ってきたんだ。そうだろうと思います。考える、あるいは実践と関連付けるというタイプの学習に慣れていない。先生の授業がづらいんですという学生が結構居ます。私はこうやって考えるのが苦手なんです。でも頑張りますと言ってくれていますけれども、慣れていないんです。あるいは、もともと実践との関連が見えないということもあるだろうと思いましたが、後ほどどういうふうにしたかということも紹介したいと思います。

あともうひとつは、単一の価値観に縛られるということも問題点としてはありました。けんかは駄目だよとか、みんな仲良くしなくちゃ、おもちゃは順番に使いましょう、保育者は自立的に考えた保育をしようというものが、ひとつの価値観として学生たちを縛りつけるんです。学校現場というのは、「みんな仲良くしましょう」という職員室が、「エッ」というような、ものすごくドロドロしたものなわけです。みんな仲良くというのは、結構罪だったりするんですね。子どもを逆に苦しめている場合だってあるわけです。したほうがいいけんかもあるかもしれませんということに、なかなか気付かない。そうすると、実際に勤め始めたときに、園の方針とか保育士の保育感、子どもの実態とかの多様性に対応できないんです。そして、苦しめられて辞めていくとかということにつながる。

なぜかと思ったときに、大学の教室内の活動では単一の価値観でも困らないんです。だから、これで落ち着いていくんだろうと思うんです。「これでいいじゃないですか、教科書に書いてあるし」というふうになる。あるいは、理想を持っている。割合、理想の強い人が保育士さんを志望するんです。あるいは、やっぱり教育学という授業は理想を教える場ですから、そういうふうな授業があるということも、こういう単一の価値観にしばられる要因のひとつなんだろうと思います。

それによりまして、私もどうやっていこうかと思ったんですけど、ひとつは、実践との関連をつくるためにケーススタディを入れました。そして、先ほどのテキストの60分の中に、多様な子どもの理解と保育の接触をするように、教科書以外のケーススタディ用のサブテキストを使うようにしました。最後の20分間の演習のワークでも、具体的に多様な状況をシュミレーションするようにして、それも評価しますということで学生に伝えるようにしました。そして、学習のやり方に慣れていない人を想定して、段階的な指導をしました。



具体的にどういうことかという、これはケーススタディです。自分の領域に人が入ってくると突然攻撃をしますと。楽しく遊んでいる女の子のところに男の子が来て、ガリガリガリ、「ギャー」と言って追いかける。初めは、これは女の子が悪いと。別に男の子は何も邪魔していないのにガリガリしてはいけません。なので、この子をしかりますと。Eちゃんとここに書いてありますが、「駄目でしょ、Eちゃん。あなたもやられたら嫌でしょ」とか言いがちなんですけど、そうではない可能性もありますという話を、ケーススタディを通してやります。誰でも嫌ですよ、みたいな話をします。

ワークの事例の多様性については、例えば具体的な事例を自分で考えてみてください。これを、今度は学生同士でグループをつくってシェアしてもらいます。そうすると、自分の想定とは違う事例が出てきて、いろいろなゆがみかたがあるんだとか、いろいろな状況って考え得るんだということが、ここで学んでいられる…といいと思っています。

段階を踏んだ支援については、ワーク、演習をやるときに苦手な学生も居ますので、最初はとりあえず書いてくださいと。とにかくたくさん、最初は量やでという話をしています。その次に、質に入っていくんです。こう書いてあるけど、こんな考え方ってどうか、

私のほうからコメントを入れます。そして、書き直してもらおうという段階をつくります。その次は、ほかの学生の意見に触れるようにします。2ばかりやっていると、大体先生のパターンがわかってきて、今度は先生の求めることに順応しようとするのです。それでは困るので、ほかの学生の意見もいろいろあるんですよということで触れていきます。最終的には、これに実際触れなくてもほかの学生の意見を想定する、多様性を自分の頭の中でシミュレートできるところまで持っていきたいんですけど、なかなか、ここはまだ、今、挑戦の段階でうまくいっていません。こんなかたちで授業を頑張っているということです。

A R C Sモデルも含めて、何か今までの話でご質問があれば、グループディスカッションの前に受け付けたいと思いますが、いかがでしょうか。ご質問はありますでしょうか。ありませんか。では、グループワークの中で、また聞きたいことがあったら遠慮なく手を挙げて聞いてください。

今からグループディスカッションを行います。先ほど申しあげましたように、学習意欲を向上させる工夫についてのアイデアを交換していただきます。

ここで…, グループディスカッションを行います。 テーマ: みなさん各々の授業(講義型授業)における課題 テーマ①:授業においてどのような問題を抱えているか どのような「学習意欲の低い学生」が見られるか テーマ②:学生は、なぜ学習意欲が低い向上しないのか に対する, ③:「<u>学習意欲を向上させる工夫</u>」について
--

63

グループディスカッションの進め方 ・先ほどと同じグループ。 ・タイムスケジュール (3)テーマ③についての意見交換 30分 テーマ①②に対する「学習意欲を向上させる工夫」 についてのアイデア (4)全体発表 30分(3分×10グループ) テーマ①②③を整理して発表 ※ 整理した記録は、後ほど、全グループ分を全員にコピーして返却。

64

グループワーク



杉原先生

それでは、発表のほうに移りたいと思います。1グループ3分を目安にご発表いただければと思います。全員出て来ていていただいても構いませんし、代表の方だけでも構いません。皆さんの人選にお任せしたいと思います。発表される方はこちらのほうに来ていただいて、資料を置いたらこういうふうの前に映りますので、マイクを持ってプレゼンテーションしていただければと思います。発表が終わりましたら、労をねぎらう意味で、皆さん拍手をしていただければと思います。

2班

井上裕太(相模原キャンパス 進路・就職グループ)



こんにちは。相模原キャンパスの進路グループにおります、事務職員の井上裕太と申します。よろしくお願ひ致します。私たちは3つまとめました。

1つ目、どのような学習意欲の低い学生が見られるか。これについて、2つタイプを挙げました。ひとつは、消極的な学生ということです。誰かリーダーが居れば付いていくんですけども、自分だけで、何か主体的に物事を行うことはしないという学生。もうひとつのタイプ、こちらのほうは少したちが悪くて、先ほどもおっしゃっていた通り、「なに頑張っちゃってんの」みたいな、頑張る学生とか意欲の高い学生に対してうがった見方をしてしまう学生。こういうものが居ると思います。

そういうものに対して2番目の、なぜ学習意欲が低いのかということなんですけど、これはたくさん出たんですけど1つにまとめてしまいました。一番大切なのが、将来とどうつながっていくのかを正確に認識できていないというところで、学習の目的がどこにあるのかははっきりしていないから、何で頑張るのかわからないしやる気を出すこともできない。そういうものだと思います。

3つ目に挙げました、これらの問題に対して学習意欲をどう向上させるのかという工夫。これについて3つの観点でまとめました。1つは、内容をどうするかというものです。やっぱり一番大切なのは、魅力的な授業の内容を用意して、それを学生に提供することであるという意見が出ました。あとは、例えば、先生自身がすごく情熱を持って自分の学問に対する熱い思いを語るとか、そういう先生は人気があるよね、みたいな話も出ました。そういう喜びを伝えていくということも必要なのではないかと思います。

2つ目が方法です。これは、グループワークを取り入れるとか、最初のオリエンテーションのときにルールを明確にしたり、意識を改革して学生にまじめに取り組ませることの格好良さみたいなものを伝えていたり、そういうものができると思います。

3つ目に挙げた、適切な資料の配布というのも大切だと思います。例えば穴埋め形式にして、それだけがあれば済むのではなくて、主体的に授業に参加しなければならないような資料などを用意できると思います。

最後、3つ目にキャリアというものを挙げました。これは、その授業が自身のキャリアとどうつながっているかということに関係しているんですけど、理想のキャリアというものと今の自分というものの距離を把握させることによって、「もっと頑張らなければいけない」とかいう焦りを生ませる。そういうことで学習意欲を高めることができるのではないかと思います。あとは、目的を明確にして、この授業がどう将来につながるのかということをしっかり気付かせることによって、学習意欲を向上させることができるのではないのでしょうか。以上で2班の発表を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

杉原先生

ありがとうございました。では、続きまして1班の発表にいきたいと思います。

1 班

勝谷紀子（社会情報学部 助教）

社会情報学部の勝谷と申します。グループ1を代表させていただいて報告致します。私どもが話しまして、まず1つ目、どういうふうな学習意欲の低い学生が見られるか。多く挙がりましたが、その内3つを挙げますと、私語が多い学生。私もおととい、200人程度の心理学の授業をやりまして、まあうるさかったです。もう途中で投げ出したしたくなっただけですけども、何とかこらえてやりました。2つ目は科目に興味のない学生が居る。3つ目が、知識のない学生が居る。こういったものが挙がりました。



2番目に、では、なぜ学習意欲が向上しないのかということについて、いくつかの要因が挙がりました。まず、必修科目のために、取らなければいけないけれども、そもそも興味がない。2つ目が、単位を取るための履修になっている。興味がないんだけど取らなければいけない。3つ目が、なじみのない科目がある。4つ目が、レジュメが統一していない。配布資料ということです。私語が多いために、つられてほかの学生も私語をしてしまって、みんながということがあ。そして最後に、その科目をなぜ取っているのか学生自身が考えていない。先ほど、関連性という話がありましたが、そういったことかと思います。

最後の3つ目、学習意欲を向上させるにはどうするかということで、たくさん挙がりましたが、その内の知識がないとか私語が多いとかいったことを中心に話していきました。具体的にどうしたらいいとかということについて、まず興味を持ってもらう工夫をしようということが挙がりました。具体的には、実際の社会と関係付けるように考えてもらう。あとは、知識がないということが挙がりましたので、学生の知識量のケアをするといったことが挙がりました。そして、私ども教員も、例えば教えるスキルに関するものとか、教員力を向上するようなカリキュラムを組んではどうか。もうひとつが、教室の環境を整える。私語が多いというのがありましたので、なるべくコントロールす

るような環境を整えるといったことが挙がりました。

こうしたことを踏まえまして、ただわかりやすい授業というのをするだけではなくて、興味を持てるような授業を心掛けていきたいと思います。最後の結論としてまとまったということになります。以上でおしまいです。

杉原先生

ありがとうございました。大変ご苦労されているようで、何かこれがヒントになればいいかと思います。ありがとうございます。続きまして、3班のご発表をお願いしたいと思います。

3班

澤田 淳（文学部日本文学科 准教授）

私は文学部日本文学科の澤田と申します。いろいろと、いくつか話があったんですけども、まずテーマ1として、授業においてどういった問題を抱えているのか。あるいは、どういった学習意欲の低い学生が見られるのかということで、いくつか出たんですけど、そのひとつとして、指示したことはできるけども、自分でテーマを決めることはできない。そういう学生が多いということでした。例えば、前期の終わりにレポートを書かせて、夏休みの間に学生が持ってくるわけですけども、後期の授業でそのレポートを見たときに、何回か教科書的なものをなぞってしまっている。自分のテーマとして、その問題が考えられていない、深められていない。そういった学生が多いということです。



学習意欲の低い学生ということなんですけども、私が所属している文学部の日本文学科に関して言いますと、それほど居ないんです。非常にまじめに授業を受けていますし、ある程度学習意欲のある学生かと思えます。ただ、理工系の先生に聞きますと、どうしても理工系だと実験が多い。1クラスの人数もやはり多くて、百人以上のクラスで実験を行うということも多いそうなんです。その場合だと、やはり実験に参加しない、意欲の低い学生というのが出てきてしまう。そう

いった問題が挙がっております。

次に2つ目の、なぜ学生の学習意欲が向上しないのかということなんですけども、いくつか出ました。まず1つは、実生活に結びついていないということです。やはり、授業で行っている理論なり体験なりの話が、自分たちの身近な実生活に結びついていない。そうすると、やはり学生というのは学習意欲が低くなるということです。私の教えている日本語文法とかいった科目でも、例えば活用とか係り結びとかいったものを教えたとしても、係り結びに関しては、もう現代の日本語ではほぼ失われていますのでピンとこないんです。ただ単に、古典の文章を楽しむ。どうしても、そういったレベルにならざるを得ないと。

2つ目としましては、これは理工系の先生から出た話なんですけど、知識の獲得の仕方がわからないという学生が多いということでした。やはり、私たちが授業で行う場合には、ある体験の中のひとつを切り取ったことを教えるわけで、その背後にはいろいろなリンクする科目なり概念がある。その一部を、私たち教員は1つの科目で教えざるを得ないんですけど、それがその体験の中でどういう位置付けにあるのかというのが、少しわかりにくいということだと思います。これは、理工系に限らず文系の学問においてもそうだと思います。

それから、3つめと致しまして、受け身になってしまっている学生が多い。4つ目と致しまして、将来に結びつかない不安というものを抱えている学生が多い。それが、結果的には学習意欲の低下につながっているのではないかと思います。具体的に、私の授業でいきますと、日本語学では日本語文法の授業を受けて、卒論を書いて、でも、それが将来、自分が就きたい具体的な職業というものに直結しないケースが多々あるわけです。やはり学生にとっては、将来に直結しない分、学習意欲が落ちてしまう要因になっているということです。

最後に3つ目の、では、学習意欲を向上させる工夫はどういったものが考えられるかということなんですけども、まず1つは身近な題材の中にヒントがあるんだということを、できる限り授業の中で提示するということです。これは理工系の先生の話聞いても、例えばペットボトルひとつとっても、そこには授業で扱った話とリンクするものがたくさんあるということです。日本語文法の話でいきますと、例えば、学生自身が使っている若者言葉というものの中に、実は、今話した授業の文法項目というのがすごく密接につながっている。そうすることによって、学生自身が、そうい

うことかと。自分たちもよく使っているんだということで、何か授業と結びつくものがあると思います。

2つ目としまして、プレゼンテーションや小テスト等をできる限り行って、学生を、単に授業に来て座って、鐘が鳴ったら帰るというような受動的なものではなくて、能動的なものにしていく。これは、先ほど先生が紹介してくださったことに、非常に大きなヒントがあると思います。ぜひ、僕も実践していきたいというふうに思っています。

最後ですけれども、2番目の最後のところにもつながるんですけども、将来と結びつく、役に立つことを具体的に教えることによって、学生の学習意欲というのが向上していくのではないかとということです。具体的に私の科目でいきますと、例えば日本語教育とか、あるいは中学とか高校の国語教育の、そういった職業とも結構結びつく授業なんだよということをできる限り教えることで、ある程度、卒業した後の自分たちの将来像というものを見えるようにするというのを心掛けたいというふうに考えています。

ただ、もちろん将来と結びつくということがすべていいとは限らないという人も居て、2人の職員の方々に聞くと、私たちが学生時代のときは、それほど将来のことというのは考えずに授業を受けていた。でも、その授業が最終的に何らかの自分たちの役になる、血と肉になるというふうに考えれば、それはそれでいいのではないかと。常に将来の職業という話で結び付けなくてもいいのではないかとというような意見もありました。ですので、この辺は、両方バランスを取りながらやっていくのが大事ではないかということでした。3班の発表を終わります。

杉原先生

ありがとうございました。大変中身も濃くて、具体的な事例も入っていてよかったと思います。では、続きまして4班の発表をよろしくお願いします。

4班

佐藤 かつら（文学部比較芸術学科 准教授）

こんにちは。文学部比較芸術学科の佐藤と申します。

平塚 広義（経営学部 助手）

経営学部の平塚です。よろしくお願いします。

佐藤

私たちの班は、全員教員ということになりました。

理工学部の先生、それからほかの所属の者ということで学生の気質も違いまして、特に大学院国際マネジメント研究科では、あまり意欲の低い人というのは見



られない。そもそも社会人が入ってきているので、みんな目的意識が高く、特に問題行動がないというようなこともありまして、大分いろいろと違いました。その違った中で、もちろん意見をいただいたんですが、まず一般的に出たこととして、私や理工学部の先生からは、百人を超える授業だと、やはり困難だと思う。居眠りがあったり私語が見られたりする。それから、理工の先生からは、実験を人任せにってしまう学生が居ると。このような問題が出ました。

その理由について考えたところ、いくつか出たんですけども、大体こんなところ。先ほどもご発表がありましたけれども、単位が目的で来ている。それから、高校と大学のギャップがある。求められている学習のやり方が異なる。これはかなり問題でして、根本的にこういうことから教えなければいけないのではないかと、実際こういうことをしている大学もあるというようなご意見もありました。それから、高校生には大学受験という目的があるけれども、ということで、単位が目的という話とかぶるんですけども、目的意識がなかなか持てない。それから、私は比較芸術学科で歌舞伎とか古典芸能について教えているんですけども、古典芸能にはなかなかとっつきにくいという学生につきましては、やっぱり内容に興味を持てないで、だんだんと沈んでしまう。難しいのではないかと構えてしまうといったようなことも考えております。これらに対しまして、私たちがグループとして話しあったことは次の点で、選手交代致します。

平塚

私たちのグループで話し合ったことは2点なんですけれども、1点は、内容に多様性を持たせたいのではないかと。見ていただくとわかるんですけども、グループワーク、ケーススタディ、映像を入れたり板書をしたり、板書とスライドのバランスをとったり。これは内容も、講義の内容と進め方の2種類になると思うんですけども、それに多様性を持たせることで、もしかしたら興味を維持することができる動機付けになるのではないかと。この点がディスカッションからきました。

ただ、この際に何点か挙がった疑問点が、例えばグループワークをした場合、グループで評価をするのはどうかと。私が提案したんですけれども、グループでやってしまうと、どうしてもぶら下がっている学生が出てくるので、その人に対しての対応だとか公平さというのをどうするか。そのときは、評価を個人とグループの両方に、バランスをわけてうまく組み合わせたらどうかという提案がありました。

もうひとつの点は、多分、ニーズを把握するということにも掛かってくると思うんですけれども、青山学院大学には一体どういう学生が来ているんだろうというのが、6カ月たってまだつかめていない部分があるので、皆さんも他のいろいろな大学から来て、青山学院の学生のことを学びながら、それを把握してうまく興味を引けるような方法を工夫できたらいいのではないかという結論になりました。ありがとうございます。

杉原先生

ありがとうございます。いいですね。ニーズを、興味を、いろいろなかたちで調査したりしていただくと、本当にいいと思います。ありがとうございます。では、続きまして、5班の発表をよろしくをお願いします。

5班

大塚 類（教育人間科学部教育学科 准教授）

5班の発表を担当させていただきます、教育人間科学部の大塚と申します。よろしくお願い致します。私たちの班は、教員4名と職員2名で構成されております。

問題としては、クラスのサイズを分けて考えようという話になりまして、まず小クラスの場合には、あまりにも人数が少なかったりすると、グループワークなどいろいろな取り入れたいときに難しくなってしまうというような意見が出ました。百何十人とか2百人を超える大クラスの場合には、やはり私語が多い、どうしても寝てしまう。あとは携帯電話やスマートフォン、iPadとかをいじっている。ただ、スマートフォンとかiPadに関しては、それが授業の内容に関連することとか、辞書を調べているのか、内職をしているのかということが、ちょっとわかりにくいので、注意をしていいのかどうかも迷うというような意見が出ました。

クラスのサイズにかかわらずということでは、まず学生自身の目的意識の有無によって、まったく態度は異なってくるだろうということがありました。例え



ば、私は教育学科なので、教職を取るためには絶対に取らなければいけない必修の授業というのがたくさんあります。そうやってきたときに、先生になりたい、教免が取りたいという目的意識はあっても、自分に興味のないものでも必修でとにかくいろいろなものを取らなければいけないという、義務感とか強制感があると、やはり意欲が低下してしまうのではないかということを感じます。あとは、去年まで大学生だった構成メンバーの職員の方のご意見としては、先生がモゴモゴ喋っていると、もうその時点で眠気とかいろいろなことを誘ってしまうのではないかというようなことがありました。

次に、では、なぜ意欲が低いのだろうかということ、まず、単位が取りやすすぎるのではないかということです。やっぱり、あまりにも多くの人数を落としてしまうと、教務の方から注意を受けるというようなことがあるということです。あとは、充実度星3つ、単位取りやすさ星5つみたいなのがネット上で流れているようで、そういう意味で、学生は簡単どころだけを攻略していくゲーム感覚のようになっているのではないか。

それから、先ほど先生の話にもありましたけど、そもそも授業中に食べ物を食べてはいけないとか私語をしてはいけない、携帯をいじってはいけないというようなことが注意されない限りわからない。だから、まず注意しなければいけないのではないかというようなことですか、これも先ほどの先生のお話と関連して、やっぱり教員側からのアテンションが感じられないので、結局、もうどうでもいいやとなってしまうのではないかということでした。

この2つ目の、なぜというところを踏まえて、対策として、1つはシラバスにルールを明記したほうがいいのではないか。というのは、私語に関しても、学科とか学部内で注意する先生としない先生がバラバラだということを学生から聞いたりしますので、当たり前なんだけれども、できれば大学とか学部で、私語をしている学生は先生が注意するというかたちでルールを共有できたり、学生にいろいろ明記して、そうなんだとわからせることが大切なのではないかと。それから、

毎回出席を取る。というのは、一生懸命に学習している学生にとっては、やっぱり出席を取ってほしいという要望が実際に出てきていることもあるので、モチベーションを維持させたり、さらに高めたりするためにも効果があるのではないかと思います。ある先生の体験としては、同じ授業でも毎回出席を取ったときと取っていないときでは、取っているときのほうが学生の平均点が上がったことがあるというお話が出ました。

対策の続きで、教員からのアテンションを学生は欲しているんだということで、小クラスの場合は学生の名前を教員が努力して覚えて、「何々さん、どうですか？」というようなかたちにします。私の場合も2百何人とかを持っているんですけど、大クラスになると覚えることは難しいので、もしかしたらシール型の名札とかを配布して名前をいつもわかるような状況にして、「何々さん、どうですか？」ということで、何々さんという名前であなをアテンションしていますよということを伝える。

それから、これはほかの班の発表の内容にもありましたけれども、学習内容が自分の将来の就職活動ですとか人生にいかにつながるのかということを、きちんと伝えていったり、教える内容を厳選することによって明確化したりする。ある先生のご実践ですと、3分間のビデオを見せて、さらにもう一回、一緒に見ながら説明するみたいなかたちで、厳選することによって、その90分の授業で伝えたいことをきちんと伝える。学生にもわかりやすくするというような意見が出ました。以上です。

杉原先生

いいですね。私も名札というのは初めて聞きました。学生証とかをセンター試験のときとかは置きますから、授業のときに置いてもいいのかなと、私もふとヒントを得らしていただきました。ありがとうございます。それでは、最後に6班のご発表をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

6班

藪口康夫（法務研究科 教授）

それでは、6班のディスカッションについて報告させていただきます。今回報告致しますのは、大学院法務研究科、いわゆる法科大学院に着任致しました藪口と申します。よろしくお願い致します。この第6班の構成メンバー6名はバラエティに富んでいるのですが、ひとつ共通の問題点は、ここ数年、いわゆる学部での

大教室講義をやっていない人たちの集まりになってしまったということです。そこで、自分たちの経験を言いたすとバラバラになってしまうので、教員側はかつて、他大学になりますけれども、百人とかその程度、多い場合は大教室授業を担当したときの記憶を思い出し、また事務職員の方々には、ご自分が学生だったときの経験などから語ってもらうということで、なるべく統一するように致しました。



出てきた問題は、若干抽象的になってしまったんですけども、ピンクの線を引いたところがタイトルということになります。問題点としては、確かに一般的にあるように、よく大教室授業では後方の席で私語をしているとか携帯をいじっている、居眠りをしたりする。つまり、意欲があるとはあまり思えないような学生がだんだん見られてくる。これをどうするのかということだったんですけども、実は、この班は大前提にいろいろ問題がありまして、われわれが思ったのは、そもそも教室に来ている人というのは、それなりにこの授業を学ぶ意欲があって来ているはずだと。だから、意欲がないのに来ているという人については答えようがないということで、一応、ちゃんと来て、少なくとも単位は取ろうと思っているのではないかとということを前提としてお話ししたことになります。

そのときに、これらが起きるのはなぜなのかということで原因を考えていくと、1つは、必修科目であるために必ずしも科目に興味がなく来てしまった。結局、卒業するためには仕方がない。単位は取らなければいけないんだけど、それ以上の興味がないという場合もあるだろう。それから、大教室になってしまうから、確かに少々の私語をしても、教員がいちいち目くじらを立てて注意するわけではないということもあって、規律が緩むという部分もあるかもしれないということです。問題としては、遅刻、途中退席、欠席等も有り得るだろうということになりました。

これらの原因について戻りますと、先ほどのような原因に加えて、授業内容をそもそも理解していない、もしくはできていないからだということが考えられるのではないかと。それから、教員の授業態度と書いてし

まいましたが、態度というよりは授業運営という響きでありまして、具体例としては、結局教員が教科書を棒読みしているだけだったら、一生懸命聞くよりも自分で読んだほうが早いということになりますので、授業に参加するモチベーションを持っていないのではないかという指摘もありました。また、休講が多いというのもあまりよくないとありました。ただ、休講については、最近、必ず補講するようになりましたから、その問題は改善されたのかもしれません。

やや抽象的ですが、これらの問題を、ある程度単位を取ろうと思って来ている学生のモチベーションをそれ以上下げないといいますか、できることならさらに意欲を向上させるという点ではどうすればいいのか。必修科目の問題というのは、なかなか現場の教員でどうこうというのは難しいものがありますけども、これは教員の側としては必修だと思っているけど、学生にその意味がなかなかつかめないということがあるんだったら、なぜこのような科目が必修として配置されているのかということを、ちゃんと説明するなりしてわからせるということが必要になるんだらうということになりました。

それから、棒読みなのは論外かもしれませんが、授業内容が理解できていないということについては、確かにいきなり教員が来て何かを喋り始めても、それはわからないだろうと。やっぱり、予習項目というものがあ程度、明示されるということが必要なのではないということになりました。横には、教員の教授力の向上とも書いてありますけど、教授力にもいろいろありまして、もちろん喋り方とかあるとは思いますが、ここでの中心は、棒読みにならないためにはある程度教科書に書いてあることを自分で読んできて、その上で授業を聞くと、読んできたことが理解できる。つまり、読んできた知識を使うことによって、何か一定の問題解決の参考になる。または、実際に解決ができるといったような体験を積ませることが必要なのではないということになりました。そのためには、やはり授業の中に、なるべく身近な例を取り上げることが必要になるのではないということなのです。

この、予習項目の明示というのを具体的に言えば、実は、ただ単に教科書の何ページから何ページを読んでおけというだけでは足りないということです。なぜかといいますと、そうしますと多くの学生は、いわゆる3段階といいますか、教員に言われた、読んだ、わからなかった、で終わってしまうということになりがちだからです。何十ページもある中で、ただ読めと言われても、実はどこが大事かもわからなかったりする

わけなのです。ですから、ひとつの例としては、先ほどいったように予習項目の中で、このページをある程度読んで、それらの知識を使うとこの問題がある程度考えられるようになりますといったような、設問であるとか設例を与える。それは、科目によっては穴埋めであったりそうでないものもあったりするかと思いますが、特に自然系とか社会系ではそういうものを用意するということが考えられるのではないかと。ただ、これは人文系では難しいかもしれないという意見もありました。その中で身近な例ということになります。

私が専門としている法律学の場合でやりますと、教科書にはルールが書いてあると。ただ、ルールだけ説明されても実際にイメージがわからないわけだから、そのルールを使うと、実際に世の中で起きている事件はどのように解決されるのか。また、どのような方法で考えていくことができるのかといったようなサンプルを与えて考えてきてもらう。それを実際に授業でどうするのかというと、授業への参加を促すために一番いいのは、ひとつの考えとしてはテストというのがあるわけですけども、もうひとつの考えとしては、授業中にその設問について教員のほうから質問して学生に答えてもらうということです。間違えていたら正しい方向に誘導していくというのものもあるかもしれないし、いきなり正解が出てきたとしても、わざと学生の頭をコンフューズさせるために、こういう考え方はありませんかというふうに振ってみる。それは私が言ったんですけども、そのような方法があると。

こうしますと、学生としては、ただ単に読んでいと言われたが、読んできたことには設問に答えられなければいけないし、授業で答えられないと恥ずかしいということになりますので、予習してこうという気にすることができるのではないかというふうに考えたわけでありまして。

そのほかには、質問しやすい学習環境をつくる。これは多分、今日ではオフィスアワーというかたちで、比較的实现されているのではないかと思います。あとは、視聴覚資料の使用とは書いたんですけども、これは単に、90分ただ喋り続けて帰るだけだとよくわからないということへのアンチテーゼで、別に視聴覚資料がすべて素晴らしいと言っているわけではありません。一応、グループの議論の中では、もちろん問題点だとかということも共有されております。だから、もちろん90分すべて視聴覚資料を使えばいいわけではなくて、15分の集中の切れ目とか、そういうところで使うとかいったことでもいいのではないかというふう

に思いました。

やや抽象的で、まとまっているのかという疑問はあるんですけども、第6班と致しましては、テーマについて例を入れながら議論して、このようにまとめた次第でございます。

杉原先生

特に今の発表は、最初に皆さまにお話しさせていただいた、主体的学習の2つの目的ですね。1つは、学習意欲が低下して大衆化した学生さんへの対応として、主体的な学習をテーマに持ってきたということ。もうひとつが、予測困難な時代という中教審の答申の紹介をしながら、高度な創造性というところとか、そういうところを育成しないといけないのではという意味での、主体的な学習がテーマに挙がってきたという話を申し上げました。こちらの、後者のほうに該当するような、非常にいい議論をしていただいたと思います。1～6班までお聞きしていて、いろいろな考え方が出てきたので、私自身も多く勉強になりました。

時間が終わってしまいまして、皆さまにはいい議論とご発表をいただいたと思います。いかがだったでしょうか。3時間が過ぎてしまいました。最後に一言だ

け申し上げたいことがありまして、きょうは講義型の授業という、非常にピンポイントな話で進みました。ところが、大学という教育の場に関しては、恐らく授業が一番中核ではあると思いますが、それ以外の要素もたくさんあると思います。きょうは、本当はこんなことも議論しないといけないだろうし、例えば図書館を整備しないといけないとか、eラーニングシステムをどう使っていくのかとか、教室の整備も必要ではないか、学生のサポートシステムもあっていいのではないか、カウンセリングの話、いろいろまとめて、全体で学生を育てていくことの、ごく一部だったと思います。ぜひ、せっかくのつながりですので、また今後とも継続的に皆さんで、じゃあ今度はこういうテーマで議論してみたいねとか、インフォーマルな場をつくっていただいて、ともに学んでいただけたらと思います。

先ほど申し上げましたけれども、今いただきました資料は、皆さまに後日、何かしらのかたちでフィードバックできるようになるそうですので、また何かの参考にしていただければと思います。これで、一応私のお話とグループワークを終了させていただきたいと思っています。

学生の主体性をいかに育むか

山形大学基盤教育院／教育開発連携支援センター
杉原真晃
sugihara@kdw.kj.yamagata-u.ac.jp

1

本日の目的

テーマ:

「学生の主体性をいかに育むか」

目的:

- ・学生の主体性(主体的学習)をいかに育むかについての意識を高める, 理論や実践事例を知る。
- ・それをもとに, 自身の講義型授業における不安, 課題, 工夫, 楽しみ等について, 考える
- ・参加者間でそれを共有し, アイデアを交換する

2

本日の内容

- (1) 「学生の主体性をいかにして育むか」についての話を聞く
- (2) 青山学院大学での実践的課題を語り合う
講義型授業における、学生の主体的学習・学習意欲についての課題
ex. ・学生の学習意欲をどう高めるのか
・私語をどのようにコントロールすればよいか
・学生生活全体においていかに主体的・能動的にさせるか

3

学生の主体性をいかに育むか

1. 主体的学習を求める社会的事情
2. 主体的学習の支援にかかるBackground
3. 講義型授業における学習意欲向上のための対応
4. 講義型授業の実践事例

参考資料: 演習型授業の実践事例

4

1. 主体的学習を求める社会的事情

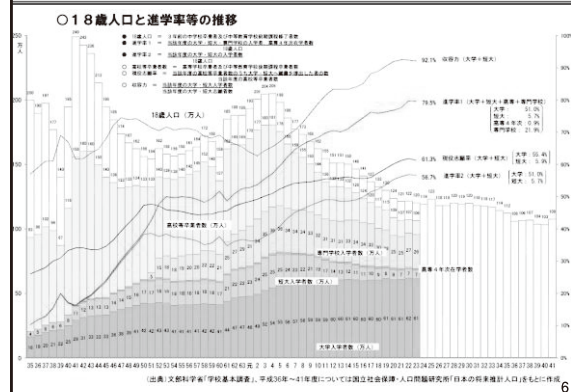
(1) 中央教育審議会答申(2012.8.28)

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて
～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」

我が国は未曾有の災害である東日本大震災に見舞われたほか、政治、経済、社会、文化、その他多方面にわたり、当時よりも更に大きな構造的変化に直面している。グローバル化や情報化の進展、少子高齢化などの社会の急激な変化は、社会の活力の低下、経済状況の厳しさの拡大、地域間の格差の広がり、日本型雇用環境の変容、産業構造の変化、人間関係の希薄化、格差の再生産・固定化、豊かさの変容など、様々な形で我が国社会のあらゆる側面に影響を及ぼしている。さらに、知識を基盤とする経営の進展、労働市場や就業状況の流動化、情報流通の加速化や価値観の急速な変化などが伴い、個人にとっても社会にとっても将来の予測が困難な時代が到来しつつある。

5

中央教育審議会答申(2012.8.28) (参考資料より)



6

中央教育審議会答申(2012.8.28)
将来の予測が困難な時代において高等教育段階で培うことが求められる能力(学士力) 答えのない問題に解を見出ししていくための批判的,合理的な思考力等の認知的能力 チームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担う,倫理的,社会的能力 総合的かつ持続的な学修経験に基づく創造力と構想力 想定外の困難に際して的確な判断ができるための基盤となる教養,知識,経験
7

中央教育審議会答申(2012.8.28)
生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業へ転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである。
8

1. 主体的学習を求める社会的事情
(2) 学生参加型の授業が求められる背景 (田中, 2003) ① 高等教育のユニバーサル化にともなう学生の学習意欲の低下への対応 ② 臨床場面で生きて働く臨床知の獲得や科学技術の爆発的展開にコミットできる高度な創造性の育成 (3) ボーダーフリー大学の学生の認識 (山田, 2009) ・ボーダーフリー大学の学生は、学習意識が高いが、授業に対する期待が低く、授業外であまり勉強しない ・サークルやクラブ活動にもあまり熱心ではない
9

1. 主体的学習を求める社会的事情
(4) ボーダーフリー大学の学生の逸脱行動 (葛城, 2012) ・疑似出席 - 中抜け、エスケープ等 ・ながら受講 - 私語、携帯電話、居眠り、マンガ、飲食、ゲーム等 ・教員への反抗 - 暴言、乱暴等
10

2. 主体的学習の支援にかかるBackground
2-1. 主体的学習支援の授業実践の位置づけ 2-2. どのような「主体的学習」を期待するのか 2-3. なぜ、主体的学習をしないのか 2-4. なぜ、学習意欲が向上しないのか
11

2-1. 主体的学習支援の授業実践の位置づけ
学生の主体的な学習を育むために ① 制度、カリキュラム、授業、課外活動の検討 ② 授業者の役割の検討 ③ 主体的学習に影響を及ぼす諸要因の検討 ④ 人員、施設・設備、予算、組織構造
12

cf. ①制度、カリキュラム、授業、課外活動の検討

- ・制度：学生FD委員、学生報償制度、授業アンケート
- ・カリキュラム：学生創造型授業、実習・演習との連携
- ・授業：グループ学習、ワークシート・双方向ツール、授業時間外学習の充実（ICT活用含）
- ・課外活動：クラブ・サークル、ボランティア、インターンシップ

13

cf. ②授業者の役割の検討

- ・研究者、専門家（research, profess）
- ・教授者、伝達者（educate, transmit）
- ・学習者の理解者（listen, understand, counsel）
- ・学習の支援者（advise, coordinate）

14

cf. ④人員、施設・設備、予算、組織構造

- ・少人数教育の充実
- ・TA・SA等の学習サポート体制の整備
- ・ラーニング・コモンズの設置
- ・LMS、e-learning等の充実
- ・給料アップ
- ・経営と教育の対話

15

③主体的学習に影響を及ぼす諸要因の検討

- ・教育技術
- ・学習環境
- ・教授－学習プロセスの理解
- ・教員の倫理観、学習観

16

2-2. どのような「主体的学習」を期待するのか

主体的な学習のあり方の分類例

- ・参集・参与・参画（林, 1994）
 - ・受動的消費者・能動的生産者（Riesman, 1986）
 - ・浅い学習・深い学習（Biggs and Tang, 2007）
- 各大学、各学科、コース等で検討・共有

17

cf. 深い学習と浅い学習の理解のレベル（Biggs and Tang 2007）

-
- 振り返って熟考する（reflect）
 - 離れた課題に適用する（apply: far problems）
 - 仮説を立てる（hypothesize）
 - 原理に結びつける（relate to principle）
 - 身近な課題に適用する（apply: near problem）
 - 客観的理由をあげて説明する、解説する（explain）
 - 自分なりの理由をあげて主張する、論じる（argue）
 - 関連づける（relate）
 - 中心となる考えを理解する（comprehend :main ideas）
 - 状況や特徴を述べる、記述する（describe）
 - 言い換えていう（paraphrase）
 - 文章を理解する（comprehend: sentence）
 - 確認する、名前をあげる（identify, name）
 - 記憶する（memorize）

18

2-3. なぜ、主体的学習をしないのか

- ・工夫して授業をしているけれど、いっこうに学生の学習意欲が向上しない
- ・いくら授業者が努力しても、学生にも努力してもらわなければ良くならない
- 「学生諸君、努力せよ！」と学生を叱咤激励する…
- それで解決するならOK…そうでない場合は…?
- あきらめないで済むために…、

19

2-3. なぜ、主体的学習をしないのか

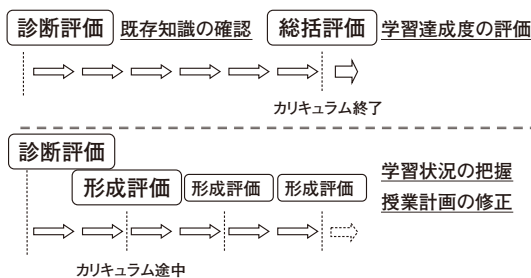
↓
まず、「学習意欲がなぜ向上しないのか」について
診断しなければ…。

→観察、質問紙、
インタビュー
診断評価、形成評価



20

教育評価の3類型 —診断評価、形成評価、総括評価—



21

2-3. なぜ、主体的学習をしないのか

- ①知識的要因
主体的な学習のあり方を知らない
- ②技能的要因:
主体的な学習のあり方を知っているけれど、
うまくできない
- ③情意的要因:
主体的な学習のあり方を知っているけれど、
やろうとしない・やる気を持たない

22

cf. 知的・技能的要因による学習意欲への対応

- ①知識的要因、②技能的要因への対応例
- ・授業時間内外で主体的学習を課す
 - ・授業時間内外で教える、アドバイスする
 - ・参照できるテキストを作成し、活用させる
 - ・ICT、Teaching Assistant等を活用する
 - ・授業内外での主体的学習の機会を増やす
 - ・繰り返し行わせる

23

2-4. なぜ、学習意欲が向上しないのか(③情意的要因)

- ◆自分の専門分野に関する適応度を「高適応群」と「低適応群」に分類した上での、進学動機との関連
- 高適応群と関連が高い**進学動機**
- ・自分の興味・関心を生かせる
 - ・希望職業に就ける
 - ・自分が必要とする資格を取得できる
- 低適応群と関連が高い**進学動機**
- ・学歴取得
 - ・周囲の勧め
- (柳井ら, 2004)

24

2-4. なぜ、学習意欲が向上しないのか
・熊本大学「授業改善のための学生アンケート」 (2004年度後期・2005年度前期実施分)より a) 特に多い意見 b) 深刻な意見 c) 好評な授業への意見
25

a) 特に多い意見	
<板書>	
読みやすく	キレイに
丁寧な字で	文字が小さいと見えにくい
口頭だけでなく板書を	より多くの板書を
分かりにくい箇所は板書を	語句だけでなく説明も書いて
省略せずにきちんと最後まで	板書の前に立たれると見えない
板書を消すのが早すぎる	ノートにまとめてきて板書を
スピードが速すぎる	板書の時間と説明の時間を分けて
黒板の下の方まで書きすぎると見えにくい	

26

a) 特に多い意見
<話し方> スピードが速すぎる 大切な所やまとめはゆっくりと 声が小さい はっきりとした話し方で 気持ちのこもった話し方を (教室によっては)マイクの使用を <授業時間> 開始時刻に遅れないで 延長しないで
27

a) 特に多い意見
<レジュメ・配布資料> レジュメを配って 内容が中途半端 資料を授業に沿ったものに 多すぎて重要な点がわかりにくい 早めにウェブに掲載して <説明・解答> 設問を詳しく丁寧に説明して 設問の答を明確に詳しく書いて 他の先生や実務家に尋ねても、正確な解答を明示して
28

a) 特に多い意見
<内容の適切性・難易度・スピード> 初めてこの問題に取り組む学生も参加しやすい内容に 学術的にもおもしろいと思うような授業を 内容が難しすぎる 言い回しが難しすぎる 細部よりも、まず大きな視点から 毎時間のつながりがわかるよう 難しい所が速くならないよう、ペース配分を 進み方が速すぎる
29

a) 特に多い意見
<視聴覚機器> パワーポイントやOHPの切り替えは速過ぎないように スライドやOHPだけではなく、板書もして OHPやパワーポイントのハンドアウトを配布して 手書きのOHPは見にくい ホワイトボードでの赤ペンの字は見にくい ホワイトボードは大きな字で ホワイトボードは大きな部屋では使用しないで
30

b) 深刻な意見
<教師のやる気> 教科書を板書しているだけの授業 板書をノートに写すだけの授業 <学生への態度や授業中の言葉遣い> 学生によって態度が違うのは不公平 私語が多い 学生を馬鹿にしたような呼び方をしないで 汚い言葉を使わないで
31

b) 深刻な意見
<授業の準備・計画> 何をどう説明するか、前もって段取りを 教える側にも予習は必要 計画的に授業を進めて 思いつきや行き当たりばったりで授業しないで 話の脱線がひどい 思いつきばかりしないで
32

b) 深刻な意見
<学生の理解への配慮> 学生の理解度を把握すべき 学生の様子を見ながら進めて 先生一人で授業をしないで 論理的にわかりやすく話して マイクが不調で聴き取りにくいのに構わず話し続けなくて
33

b) 深刻な意見
<課題と評価> 課題が曖昧でわかりにくい 採点を返却してもらわないと改善のしようがない テスト中に話をしないで <教員間の調整> 同じ科目なのに教員間で教える内容に差がある 先生によってやり方やレベルが大きく違う クラスによって差がありすぎた
34

c) 好評な授業への意見
<熱意> 資料は毎回詳しく、先生の情熱が伝わった 難しかったけど、わかりやすい説明で、よく理解できた 質問に行ったときも、非常に熱心に教えていただいた とても熱意の伝わる授業だった <こまめな課題・評価> 毎回のテストによって授業の重点がわかった レポートが数回あり、授業内容を振り返ることができた レポート課題を通してたくさん考えることができた
35

c) 好評な授業への意見
<周到的準備・組立て・資料> 体系的に授業が進められたので、理解しやすかった 重要な事例ばかりで、無駄のない有意義な授業だった 資料がたくさんあって、深く理解していく上で役立った 毎回レジュメがあったので、全体像がつかみやすかった プリントのまとめ方が分かりやすかった 説明資料の書き込み形式が良かった パワーポイントをメールで送っていただき、理解に役立った
36

c) 好評な授業への意見
<理解しやすさと興味深さ> むやみに難しい用語を使わず、実例に即した授業で、興味を持てた 取り上げられる事例がわかりやすく、理解の助けになった 知らないことがたくさんあって、興味深かった いいペースで、飽きることがなかった 話し方がうまくて、興味を持つことができた 理解しやすいように工夫され、役に立った 自分の頭で考えさせられることで、理解が深まった 今まで受けた授業の中で最も有意義で考えさせられる授業だった 今問題になっている事を適切に採り上げ、わかりやすかった

37

c) 好評な授業への意見
<コミュニケーション> 毎回、質問や感想に対して、先生がコメントを書いてくださるのが嬉しかった 質問や感想などを毎回書いて出せるのが良かった 些細な質問でも丁寧に答えてもらえ、質問しやすかった 他の授業に比べ、双方向が実現されていた 少人数で意見交換ができる環境だった グループワークが取り入れられ、他の人の考えを聴き、考えることができた レジュメの作り方や発表の仕方の勉強になった いつも学生に気を遣ってくださり、気持ちよく授業が受けられた 私語を注意してくださり、良い環境で授業を受けることができた

38

c) 好評な授業への意見
<視聴覚機器> 図や資料を多く使って、視覚的にも理解しやすい授業だった OHPで実物を見ることができて、講義内容を身近に感じることができた ビデオ等、授業をわかりやすくする工夫が良かった ビデオが興味や理解を深めるのに有効だった プロジェクターでの説明が分かりやすかった スクリーンの使用が良かった

39

ここで…
グループディスカッション(1)を行います。 テーマ: 「学生の主体的学習」「学生の学習意欲」に関する、 みなさん各々の授業(講義型授業)における課題 ① 授業においてどのような問題を抱えているか どのような「学習意欲の低い学生」が見られるか ② 学生は、なぜ学習意欲が低い・向上しないのか

40

グループディスカッションの進め方
・6名程度で1グループを形成。身体が向き合うように座る。 ・タイムスケジュール (1) グループ形成、自己紹介 約6分(1人1分×人数) 氏名、所属、専門領域、テーマ①について (2) テーマ②についての意見交換 20分 テーマ①に関して、「なぜ、学習意欲が低い・向上しないのか」(テーマ②)について ※ どなたか1人、グループの議論を記録してください。

41

3. 講義型授業における学習意欲向上のための対応
3-1. 学生の声、教員の経験からのノウハウ集 3-2. 学生の主体的学習を意識した授業計画 3-3. 学習意欲向上の理論

42

3-1. 学生の声、教員の経験からのノウハウ集

学生の学習意欲の向上を阻害する講義型授業の事例
ビデオ「あっとおどろく大学授業NG集」

- | | |
|--------------|---------------|
| 1. ダメ教師かな? | 7. 僕たちに怒っても…。 |
| 2. 学生を見下す | 8. 一方通行 |
| 3. 身内自慢 | 9. えこひいき |
| 4. 放任教室 | 10. 情報の嵐 |
| 5. 後部座席 満席です | 11. 教師の時間 |
| 6. 重ね書き | 12. 黙る人 |

参照: <http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/kyouiku/video.htm>

43

3-2. 学生の主体的学習を意識した授業計画

(1) シラバスの構造

- ◇授業名
- ◇授業担当者名, 開講日時, 対象学年等
- ◇学習目標・到達目標
- ◇講義概要
- ◇授業計画
- ◇評価方法
- ◇教科書、参考書

44

3-2. 学生の主体的学習を意識した授業計画

(2) 「学習」を軸にしたシラバス

- ・読者は「学生」。学生が読んで次のことがわかる記述が大切。
 - ・何を学ぶのか, どのような知識技能・能力が身につくのか
 - ・どのような学習活動をおこなう必要があるのか(聞く, 書く, 調べる, 議論する, 体験する等)
 - ・どのような知識技能・能力が評価の対象となるのか
 - ・成績評価の対象となる活動(試験, レポート等)に, いつ頃, どのように備えればいいのか
 - ・教科書にかかる費用はどの程度か など
- ・学生が重視する項目は,
 - ・成績評価にかかる内容と水準, 方法(「評価方法」)
 - ・学習内容, 学習形態(「講義概要」「授業計画」)

45

3-3. 学習意欲向上の理論

学習意欲を高めるための「ARCS」モデル (Keller, J. M., 2010)

- A: Attention (注意)
- R: Relevance (関連性)
- C: Confidence (自信)
- S: Satisfaction (満足感)

46

ARCSモデル A: Attention (注意)

① 知覚的喚起

概念間の手順や関係をフローチャート・絵コンテ・略図・漫画など目に見える方法で示す, 強いアイコンタクトをとり熱意を表わす, 等

② 探求心の喚起

トピックを問題含みに質問する, 矛盾を感じさせる, 未解決の問題を説明する, 等

③ 変化性

説明方法に多様性を持たせる(口頭, 板書, スライドなど), 内容の提示と回答を求める事象との間に多様性を持たせる(質問, 練習, パズルなど), 等

47

ARCSモデル R: Relevance (関連性)

① 目的志向性

獲得できる知識・技能が学習者のゴールに関連していることを説明する, ゴールに関連した事例や課題を用いる, 獲得した概念やスキルを活用させる応用問題をさせる, 等

② 興味・動機との一致

個人ごとの達成機会とグループによる協同作業を組み合わせる, 目的達成のロールモデルを提示する, 等

③ 親しみやすさ

三人称や人類全般に言及する文章より人称代名詞や人々の名前の使用を含んだ文章を用いる, 学習者にとって身近な場面から具体的に実例をあげる, 学習者の名前を覚え・呼ぶ, 等

48

ARCSモデル C:Confidence(自信)
①学習要件 学習目標(行動目標)の提示・自己決定、最終レポートの基準や例の提示、等 ②成功の機会 学習者に活動(簡単なものから難しいものへ)させ成功を支援する、成功のフィードバックを与える、等 ③個人的なコントロール 学習内容・順序や評価方法等を選択させる、学習環境を選択させたり自ら作らせたりする、成功にかかる個人の努力を認める、等
49

ARCSモデル S:Satisfaction(満足感)
①内発的な強化 新たに獲得した知識技能を使用する機会を与える、タスクを習得した学習者にまだ達成していない学習者を助ける機会を与える ②外発的な報酬 賞賛の言葉、個人的な注目(脅威・監視であってはならない)、成果が見えるように提示させる、等 ③公平感 学習内容や要求水準等に関して、日常授業と最終テストとの間に一貫性を持たせる
50

「ARCS」モデルから考える「学習意欲が向上しない」理由
A:Attention(注意) → 単調で退屈・眠い、思考する機会がなく受け身になる、他に気になることがある R:Relevance(関連性) → 専門分野・キャリア形成・生活世界との関連性がわからない、反感を持っている C:Confidence(自信) → 不安、指示待ち、恥ずかしい「難しいできない」とあきらめている S:Satisfaction(満足感) → 暗記ばかりでつまらない、勉強嫌い、「満足できる」活動へ逃避する
51

4. 講義型授業の実践事例
◆科目名 ・「保育課程総論」 ◆カリキュラム上の位置づけ ・幼稚園教員免許必修科目、保育士資格選択必修科目 講義形式 ◆受講者 ・2年生(某大学短期大学部)。60名×2～3クラス ◆授業構造 ・確認テスト10分、講義60分、演習20分
52

「保育課程総論」授業目標
保育課程(教育課程)の意義および保育内容の構造などを学び、保育課程の立案・作成ができるようになる ・保育課程の意義を理解し、説明する ・保育課程の構造を理解し、説明する ・保育課程を立案・作成する
53

授業内容
保育課程の概要について学ぶ 長期指導計画と短期指導計画の概要について学ぶ 幼稚園における教育課程の意義やあり方について学ぶ 保育所における保育計画の意義やあり方について学ぶ 実践編1:保育所0～2歳児に関する保育計画について学ぶ ⋮
54

学習活動

「講義＋テスト」では、学生は受け身になる
（「注意」「満足」が欠如する）

- テキストの内容（獲得知識）を活用するワークを導入する
- しかし、ワークに割く時間分のテキスト内容を説明できない
- 授業時間外でテキストを読んできてもらう（予習）

- ・授業時間外学習での読書、知識習得
- ・授業時間内での知識習得確認テスト
- ・授業時間内での学習内容（テキスト・配布資料）の解説、質疑応答
- ・授業時間内でのワーク（知識の活用）

55

学習に関する問題点とその理由 (1)

- ◆保育課程・計画（指導案）の構造を「覚える」ことを目標とする

- ⇔構造を覚えるだけでは保育実践には活用できない
- ・構造の深い理解は、保育実践そのもの

理由 → 「覚える」学習をこれまでずっとおこなってきた

「考える」「保育実践と関連付ける」等の学習に慣れていない
保育実践への関連が見えない

56

学習に関する問題点とその理由 (2)

- ◆単一の価値観（良い保育、良い子ども、良い保育士）に縛られる

ex ケンカはダメ、みんな仲良く、おもちゃを順番に使う、
自律的に考えて保育をする

- ⇔単一の価値観だけでは、園の方針、保育士の保育観、子どもの実態・成育歴、保護者の実態・子育て観等の多様性に対応できる保育計画が立てられず、保育実践がうまくいかない

理由 → 教室内の活動では、単一の価値観でも困らない

子育て・保育の「理想」を持っている（理想が強い）

子育て・保育の「理想」を教える授業がある

57

教授・学習活動の工夫

- ◆ケーススタディの導入による多様な子ども理解・保育との接触

- ◆ワークにおける具体的・多様な状況の想定

- ・具体的な状況のシミュレーション
- ・多様な意見（状況）の紹介

- ◆ワークにおける具体性、多様性の評価

- ・保育計画を立てる際に、具体的な状況、考えられうる多様な状況が記述されているかどうかを評価する

- ◆段階的な活動の支援

- ・「理解」「思考」「表現」に段階を作り、徐々に段階を上げていく

58



ワークの事例

教育課程における「ねらい」と「内容」を編成していくうえで、ふまえておかねばならないことには、主に次のような観点があったことと思います。

- ①子どもの実態（生活経験、発達の過程など）
- ②保護者の実態（家庭環境、就業形態、保護者の願いなど）
- ③地域の実態（自然環境、土地の文化や気候、地域の特徴など）
- ④園の実態（園自体の規模・設備・自然環境・人的配置や構成、クラス編成など）

では、これらの観点をふまえて、具体的に「ねらい」と「内容」を作成してみてください。

それぞれの観点に関して、その具体的な事例を自分で適当に想定し、それを踏まえた保育計画（月案）のねらいと内容（の一部）を作成してみましょう。

60

例:①子どもたち(2歳児6名)には活発に走り回るようになってきた子が多い。春になり飛び始めた蝶々に興味を持ち追いかけてたり絵本の写真を見たりするようになってきた。

②車での移動や、ゲームなど室内での遊びが多く、身体をダイナミックに使う楽しさや自然環境に親しむ機会はあまりないようである。両親共働きで核家族であり、平日はもちろん、休日もあり外で自然の中で身体を動かしながら過ごすことは少ない家庭が多い。

③歩いて20分ほど行ったところに大きな公園があり、そこにも草木や虫がたくさん存在している。現在、5月であり、季節が良く、外で遊ぶにはもってこいの時期である。しかし、公園までは交通量が多い道路を行かなければならない。

④大きな公園に2歳児6名を連れていくには人手が足りず、安全面でまだ不安がある。一方、園には広い庭があり、草木が生え、蝶々やバッタなどの虫がたくさんいる。虫とり網は年少用の小さなものから年長用の大きなものまで揃っている。

→ねらい:虫を捕る喜びを味わう、虫や草木の存在を知りそれらへの親しみを持つ、身体を存分に動かす楽しさを味わう。

内容:好きな遊びの時間に園庭で虫とりを新たに始める。一斉保育の時間に虫ニュースをしたり、虫とりかけこをしたりする。

61

段階をふんだ「理解」「思考」「表現」の支援

- ① 聴く・読む→考える→書く
- ② 聴く・読む→考える→書く→教員からの質問・反論→書き直す
- ③ 聴く・読む→考える→書く→他学生の意見に触れる→書き直す
- ④ 聴く・読む→考える→書く→他学生の意見(多様な意見)を想定する→書き直す

62

ここで…,

グループディスカッションを行います。

テーマ:

みなさん各々の授業(講義型授業)における課題

テーマ①:授業においてどのような問題を抱えているか
どのような「学習意欲の低い学生」が見られるか

テーマ②:学生は、なぜ学習意欲が低い・向上しないのか
に対する、

③:「学習意欲を向上させる工夫」について

63

グループディスカッションの進め方

・先ほどと同じグループ。

・タイムスケジュール

(3)テーマ③についての意見交換 30分

テーマ①②に対する「学習意欲を向上させる工夫」
についてのアイデア

(4)全体発表 30分(3分×10グループ)

テーマ①②③を整理して発表

※ 整理した記録は、後ほど、全グループ分を全員にコピーして返却。

64

参考資料

本日は取り扱いませんが、
演習型授業における
学生の主体的学習・学習意欲
を育成するための資料です。

65

参考:演習型授業の実践ノウハウ集

学生の主体的な学習を阻害する演習型授業の事例
ビデオ「学生主体型授業へのアプローチ」

- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1. グループに入れない学生がいる | 6. グループの中に内職をしている学生がいる |
| 2. グループの人数が多すぎる | 7. 時間配分の指示がないと… |
| 3. オリエンテーションが大雑把 | 8. 授業外学習をしない |
| 4. ディスカッションだけでは… | 9. 攻撃的なコメントは… |
| 5. 過干渉 | 10. あっさりコメントでは… |

参照: <http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/kyouiku/video2.htm>

66

参考:演習型 授業の実践事例

「なせば成る！～大学生活事始め～」(教養セミナー)

- ・演習型、教養科目、選択科目
- ・主に新入生(6学部)が受講
- ・20名～40名

67

「なせば成る！～大学生活事始め～」授業目標

- ・山形大学を知ること、山形大学を創ることを通して、大学生としての学びや生活のあり方について知り・考え・行動する
- ・山形大学での自らの学びをスタートするための土壌を作る

- (1) 山形大学における現在の教育のしくみ、および大学生活の様子を理解し、自らの学びおよび生活のイメージを構築する
- (2) 大学での学びの特徴を理解し、アカデミック・スキルおよび主体的な学習のあり方を身につける
- (3) 自らの拠って立つ山形大学に関する自分なりの意義を見出し、山形大学の中でより良く生きるための活動を創り出す

68

学習活動

第1回授業

「新入生歓迎フェスティバル」のフィールドワーク

授業時間外学習1

図書館主催のガイドツアーへの参加、インフォメーションセンター訪問、国際交流ラウンジでの留学生との交流、教養科目の「お薦めの授業」についての情報収集

第2回授業

山形大学教育システムについての概説、山形大学の地域とのかかわりについての文献調査、周辺地域へのフィールドワーク



69

学習活動

授業時間外学習2

山形大学博物館訪問、元気プロジェクトへの申請企画案作成

第3回授業

企画の発表とグループ編成、グループでの企画ブラッシュアップ作業

授業時間外学習3

企画についてパワーポイント文書の作成

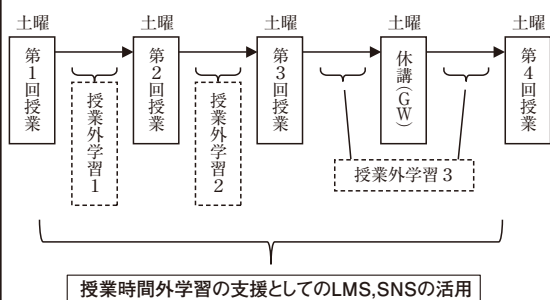
第4回授業

パワーポイント文書の発表、相互評価、修正、再発表(企画発表コンテスト)



70

学習活動



71

学習に関する問題点

- ◆学習の学生間格差
 - ・学習意欲や学習成果の個人差、学生間不和の発生
 - ・グループ全体の学習の質への悪影響
- ◆活動の自己目的化
 - ・「何のために」「何を学んだのか」を問うことを忘れる
 - ・活動的にはなるが学習が深まらない
 - ・「与えられた課題をこなす、良い成績をとるため」に化すことも
- ◆学習目標の下方修正
 - ・学習目標の自己決定と困難な課題からの逃避
 - ・学生間格差によるグループでの目標基準の低い設定

72

教授・学習活動の工夫
◆個人ワークをベースとしたグループワーク ①授業内外での個人ワーク(個々人で調査、企画) ②グループワーク(1分間プレゼンテーション、ディスカッション) ◆SNSやジグソー法による他学生の学習、自分の学習の透明化・共有化 ◆面談の導入:個人・集団の目標や学習スケジュールの設定・修正、つまずきの相談 ◆山形大学生として「やりたいこと」を見つけ出し、その企画を立てる(「山形大学元気プロジェクト」への申請) ◆企画を立てるうえで必要な情報(山形大学について、学生について、地域社会について等)を知る
73

学習に関する問題点の理由
◆学習の学生間格差 ・学習意欲や学習成果の個人差、学生間不和の発生 →批判されるのが怖いので意見が言えない、 サークル・他授業の課題・自動車教習所等で忙しい学生と本授業を優先する学生との存在 ◆活動の自己目的化 ・「何のために」「何を学んだのか」を問うことを忘れる →学生間の多様な意見を調整することに意識がいきすぎる ◆学習目標の下方修正 ・学生間格差によるグループでの目標基準の低い設定 →時間がない、自らが傷ついてまで企画を仕上げることもない
74

参考文献
Biggs, J., and Tang, C., Teaching for Quality Learning at University, 3rd edition, Open University Press, McGraw-Hill, 2007. 林義樹「学生参画授業論—人間らしい「学びの場づくり」の理論と方法」学文社, 1994年. 葛城浩一「ボーダーフリー大学が直面する教育上の困難—授業中の逸脱行動に着目して—」香川大学教育研究第9号, 2012年, 89-103. Keller, J. M. (鈴木克明訳)『学習意欲をデザインする—ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン』北大路書房, 2010年. Riesman, D. (喜多村和之他訳)『高等教育論:学生消費者主義時代の大学』玉川大学出版部, 1986年. 田中毎実「大学授業論」京都大学高等教育研究開発推進センター編『大学教育学』培風館, 2003年, 21-38頁. 柳井晴夫、椎名久美子、石井秀宗「大学生の学習意欲等に関する調査研究—国公立大学学生3万人の調査結果について—」大学入試研究ジャーナル, 14, 1-14, 2004年. 山田浩之「ボーダーフリー大学における学生調査の意義と課題」広島大学大学院教育学研究科紀要第三部第58号, 2009年, 27-35.
75

グループワーク発表レジュメ

1 班

① どのような 学習意欲の低い学生 が見られるか。

- ・ 私語の多い学生
- ・ 興味のない学生
- ・ 知識のない学生

② なぜ 学習意欲が低い・向上しないのか。

- ・ 必修科目の為、そもそも 興味がない
- ・ 単位をとる為の 履修 になっている
- ・ なじみのない科目である
- ・ レジュメが 統一していない
- ・ 私語が多い為、つられて私語をする
- ・ その科目を何故とっているのか、
学生自身が考えていない。

③ 学習意欲を向上させるには!

・ 学生に 興味 をもってもらう
ex) 実際の社会と関連付ける

- ・ 学生の 知識量 のケア
- ・ 教員の 教員力 の向上の為
カリキュラムを組む
- ・ 教室の 環境を整える
(私語の注意など)

⇒ ただわかりやすい授業をするの
ではなく、

興味をもてる授業 をこころがける!!

2 班

① どのような 「学習意欲の低い学生」 が見られるか?

- もの静かで消極的な学生
→ 誰かリーダーがいればついて行くが、
自分では動かない。
- 元気で学生、意欲の高い学生をよかにする
元気になることが「かっこ悪い」と思う学生

② なぜ 学習意欲が低いのか?

- 将来とのつながりを言語化できていない。
→ 学習の目的がどこにあるか、
はっきりしていない。

③ 「学習意欲を向上させる工夫」について

内容 …… 内容を充実させる。
情熱を持って、喜びを伝える。

手法 …… グループワーク・オリエンテーション
適切な資料

キャリア …… 理想のキャリアと、今の自分との距離を
認識
将来につながることを気付かせる。

3 班

① 指示したことはできるが、自分で
テーマを決めることができず

② 実生活に結びついていない
・ 知識の獲得の仕方がわからず

・ 受け身になっている
・ 将来に結びつかない不安

③ ◎ 身近な題材 中のヒント
・ プレゼンテーション・小テスト 等で
能動的に参加させる
・ 将来と結びつく・役に立つことを伝える

4 班

① 100人を超える授業

→ 困難、居眠り、私語がみられる。

。実験を人まかせにしよう

② 単位が目的で来ている

- 。高校と大学のギャップがある
 - └ 求められている学習のやり方が異なる
 - └ 高校生には大学受験という目的があるが...

。内容に興味を持っていない

。難しいとためてしまう

③ 内容に多様性をもたせる

グループワーク → この場合、
ケーススタディ グループに対する評価
映像 個人に対する評価
板書 のバランスをとる
スライド 必要がある

、青山学院大の学生への興味をひく方を工夫する

... 今後の課題

5 班

ー 内題 ー

A. クラスのサイズ

小クラス : グループワーク難しい

大クラス : 私語多い、寝る、
携帯;

B 共通

- 。目的意識の有無
(明確に有る場合と無い場合)
の違い
- 。目的意識はあっても
義務感/強制感があると
意欲低下
- 。教員の声小さい

ー 何故意欲に低いのか、

- ① 単位に取り急い、ゲーム感覚
ネット上で評価
- ② 注意をよめないで、半信半疑
(例: 私語、携帯...)
- ③ 教員からの Attention が
感じられない

ー 対策 ー

- ① シラバスにルールを 明記。
(出来れば大学/学部で共有)
- ② 出席をとる ← 一課題ごとに
学習している学生
にとって効果あり

- ① 授業においてどのような問題を抱えているか
どのような学習意欲の低い学生がみられるか
- ・後方の席での私語, 携帯, 居眠り
 ↳ (理由) 必修科目 (科目に興味がなし)
 ↳ 大教室での授業
 - ・遅刻, 途中退席, 欠席
- ② 学生はなぜ学習意欲が低い・向上しないか
- ・授業内容を理解していない
 - ・教員の授業態度 (α. 稀読み
 休講が多い)
- ③ 学習意欲を向上させる工夫
- ・予習項目の明示・教員の教授力の向上
 - ・身近な例を取りあげる
 - ・質問しやすい学習環境
 - ・視聴覚資料の使用

③

対策

- ③ 小クラスの場合
学生の名前を呼ぶ

大クラスの場合
名札を配る

趣旨: 教員からの Attention
 を学生に感じ易い

- ④ 学習内容の将来の救済や
人生に如何に結びつくかを伝
える

- ⑤ 教える内容を絞る/明確化
ビジュアル化等の工夫

5. 授業改善のための学生アンケート

本学では2003年度より、授業内容・方法に関する学生へのアンケート調査「授業改善のための学生アンケート」（以下、本アンケートと略）を全学的に実施している。全学FD委員会の発足に伴い、2009年度からは全学FD委員会が主催となり、本アンケートを実施している。

【実施の目的】

「大学が、学生により良い授業を提供し、授業改善を図るための手段」として、学生によるアンケートを実施する。

【実施の概要】

本アンケートは、全学共通の質問・回答項目にて、演習科目、実験、実習科目等の一部の科目を除いた全ての科目を対象として実施されている。

各学期末の授業時間内、授業担当者の教室からの退席を前提とし、無記名による17問の選択式回答（マークシート）及び2問の自由記述式回答から成るアンケート調査を行う。学科および授業担当者により、独自に質問を追加することが可能となっている。アンケートの回収は受講生の協力によって行われている。

本アンケートの結果は、当該科目の成績評価への影響がない時期に各授業担当者へ報告される他、一定の集計を経て全教職員および学生に公表される。その際、学部によっては科目単位での結果公表を実施している。

2009年度に本アンケートの質問・回答の見直しを行い、2010年度より新しい質問・回答にて実施している。

2011年度前期は東日本大震災の影響による授業期間短縮のため、本アンケートの実施が見送られた。

※ 本アンケートの集計結果は、本学WEBサイト（<http://www.aoyama.ac.jp/>）に掲載している。

「授業改善のための学生アンケート」設問項目

<～2009年度>

A. 学生自身の授業に対する姿勢に関する質問

1. あなたがこの授業を履修した理由は何ですか。（複数回答可）

〔回答〕授業内容に興味があったから、教員に魅力があったから、空き時間があったから
単位がとりやすいから、必須科目だから

2. あなたのこの授業に対する学習意欲は高かったと思いますか。〔※〕

3. あなたはこの授業にどの程度出席しましたか。

〔回答〕ほとんど出席した、3分の2程度出席した、半分程度出席した、3分の1程度出席した
ほとんど出席しなかった

4. あなたの授業出席時の学習態度は積極的でしたか。〔※〕

B. 授業・成績評価に関する質問

5. 開講時に授業の目的・意義が明確に示されていましたか。〔※〕

6. 開講時に成績評価の基準が明確に示されていましたか。〔※〕

C. 授業内容・教授方法に関する質問

7. この授業のクラスサイズ（受講者数）は適切でしたか。

〔回答〕とても多い、やや多い、適切、やや少ない、とても少ない

8. この授業はわかりやすかったですか。〔※〕

9. この授業の難易度はどうでしたか。

〔回答〕とても難しい、やや難しい、適切、やや易しい、とても易しい

10. この授業の速度と話し方の速度は適切でしたか。〔※〕

11. 黒板（あるいはビデオ、教材提示装置、配布資料など）の使い方は適切でしたか。〔※〕

12. この授業は学習意欲を刺激されるものでしたか。〔※〕

13. 授業や受講生に対する担当教員の熱意が感じられましたか。〔※〕

14. この授業の総合評価を5段階で評価してください。

〔回答〕とてもよい、よい、どちらともいえない、悪い、とても悪い

15. この授業を終えて、自分のためになったことは何ですか。（複数回答可）

〔回答〕新しい知識が身に付いた、関連分野をさらに学びたくなった
問題発見・解決能力が付いた、人間形成に役立った、コミュニケーション能力が向上した

D. 理工学部設置科目に関する質問

16. あなたは、この授業の予習、復習を平均してどのくらいしましたか。

〔回答〕1時間以上した、1時間位した、30分位した、15分位した、全くしていない

17. 補佐（助手、TA）の数や助力はどうでしたか。（実験・実習科目のみ）

〔回答〕とてもよい、よい、どちらともいえない、悪い、とても悪い

E. 担当教員による個別質問（13問まで設定可）

F. 自由記述欄

- ・この授業の良かった点、改善すべき点等について書いてください。
- ・担当教員による個別質問

※ 設問2・4・5・6・8・10・11・12・13は共通の回答

〔回答〕強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない

<2010年度～>

A. 授業への取り組みに関する質問

1. あなたがこの授業を履修した理由は何ですか。（複数回答可）

〔回答〕 授業内容に興味があったから、教員に魅力があったから、空き時間があったから
単位がとりやすいから、必須科目だから

2. あなたはこの授業にどの程度出席しましたか。

〔回答〕 ほとんど出席した、3分の2程度出席した、半分程度出席した、3分の1程度出席した
ほとんど出席しなかった

3. あなたは授業内容を理解するため積極的に取り組んだと思いますか。〔※〕

4. 1回の授業につき、あなたは予習・復習を平均してどのくらいしましたか。

〔回答〕 3時間以上、2時間、1時間、30分以下、全くしていない

B. 教員（授業内容・教授方法）に関する質問

5. この授業は「講義内容」（シラバス）を基本にして授業が行われましたか。〔※〕

6. この授業の難易度はどうでしたか。

〔回答〕 とても難しい、やや難しい、適切、やや易しい、とても易しい

7. この授業の進行速度は適切でしたか。

〔回答〕 速すぎた、やや速かった、適切、やや遅かった、遅すぎた

8. 教員の説明の仕方は分かりやすいものでしたか。〔※〕

9. 教科書や配布資料は授業内容を理解するうえで効果的でしたか。

〔回答〕 強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない
この授業では教科書・配布資料を使用しなかった

10. 黒板やプロジェクター等の使い方は効果的でしたか。

〔回答〕 強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない
この授業では黒板・プロジェクター等を使用しなかった

11. この授業に対する担当教員の熱意が感じられましたか。〔※〕

12. 授業時間内外における質問への対応は適切でしたか。〔※〕

13. 補佐教員（助手、TA）のサポートは適切でしたか。

〔回答〕 強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない
この授業には補佐教員がいなかった

C. 授業の成果に関する質問

14. あなたは、この授業の開講時に示された到達目標を十分に達成したと思いますか。〔※〕

15. この授業の内容は興味深いものでしたか。〔※〕

16. この授業の総合評価を5段階で評価してください。

〔回答〕 とてもよい、よい、どちらともいえない、悪い、とても悪い

17. この授業を履修して、自分のためになったことは何ですか。（複数回答可）

〔回答〕 新しい知識・技能が身に付いた、新しいものの見方が身に付いた
関連分野をさらに学びたくなった、問題発見・解決能力が付いた
人間形成に役立った、コミュニケーション能力が向上した

D. 担当教員による個別質問（13問まで設定可）

E. 自由記述回答

・この授業の良かった点、改善すべき点等について書いてください。

・担当教員による個別質問

※ 設問3・5・8・11・12・14・15は共通の回答

〔回答〕 強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない

2008年度

学期			前期										後期									
キャンパス			青山			相模原			合計				青山			相模原			合計			
学部	実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	
青山スタンダード全学共通(専任)	33	29	88	89	79	89	122	108	89	32	30	94	102	96	94	134	126	94				
	24	16	67	340	297	87	364	313	86	78	42	54	414	339	82	492	381	77				
	6	6	100				6	6	100	16	14	88				16	14	88				
	8	5	63				8	5	63	96	78	81				96	78	81				
	9	7	78	20	20	100	29	27	93	63	51	81	56	53	95	119	104	87				
	27	22	81	89	89	100	116	111	96	132	99	75	212	205	97	344	304	88				
	5	4	80				5	4	80	17	16	94				17	16	94				
	42	39	93				42	39	93	83	68	82				83	68	82				
	2	2	100	18	17	94	20	19	95	29	27	93	39	34	87	68	61	90				
	5	5	100	0	0	0	5	5	100	31	22	71	82	68	83	113	90	80				
青山スタンダード全学共通(非常勤)	1	1	100				1	1	100	24	20	83				24	20	83				
	2	2	100				2	2	100	45	34	76				45	34	76				
	16	12	75	7	6	86	23	18	78	42	35	83	40	37	93	82	72	88				
	3	2	67	3	1	33	6	3	50	29	21	72	90	81	90	119	102	86				
	18	16	89	3	3	100	21	19	90	42	40	95	44	44	100	86	84	98				
	4	4	100	1	1	100	5	5	100	31	28	90	94	86	91	125	114	91				
	4	4	100				4	4	100	25	25	100				25	25	100				
	2	1	50				2	1	50	42	33	79				42	33	79				
	44	38	86	45	45	100	89	83	93	45	37	82	42	41	98	87	78	90				
	51	36	71	99	87	88	150	123	82	47	30	64	92	89	97	139	119	86				
青山スタンダード全学共通(専任)				6	5	83	6	5	83				7	6	86	7	6	86				
				0	0	0	0	0	0				0	0	0	0	0	0				
				156	129	83	156	129	83				164	132	80	164	132	80				
				38	32	84	38	32	84				103	88	85	103	88	85				
				42	41	98	42	41	98				37	26	70	37	26	70				
				8	8	100	8	8	100				5	5	100	5	5	100				
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	0	0	0																			
	0	0	0																			
青山スタンダード全学共通(非常勤)	306	251	82	964	860	89	1,270	1,111	87	949	750	79	1,623	1,430	88	2,572	2,180	85				

※理工学部は理工学研究科の授業を含む。

2009年度

学期			前期						後期												
キャンパス			青山			相模原			合計			青山			相模原			合計			
学部	実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)
学部	青山スタンダード全学共通(専任)	37	37	100	93	81	87	130	118	91	36	33	92	98	93	95	134	126	94	94	
	青山スタンダード全学共通(非常勤)	26	17	65	368	365	99	394	382	97	63	44	70	429	366	85	492	410	83	83	
	全学共通第二部(専任)	6	5	83				6	5	83	13	10	77				13	10	77	77	
	全学共通第二部(非常勤)	8	6	75				8	6	75	90	64	71				90	64	71	71	
	文学部(専任)	14	11	79	16	14	88	30	25	83	74	62	84	50	46	92	124	108	87	87	
	文学部(非常勤)	38	34	89	83	80	96	121	114	94	143	100	70	188	183	97	331	283	85	85	
	文学部第二部(専任)	4	3	75				4	3	75	19	15	79				19	15	79	79	
	文学部第二部(非常勤)	40	38	95				40	38	95	78	66	85				78	66	85	85	
	教育人間科学部(専任)				7	7	100	7	7	100				13	13	100	13	13	100	100	
	教育人間科学部(非常勤)				1	1	100	1	1	100				26	26	100	26	26	100	100	
	経済学部(専任)	3	2	67	22	15	68	25	17	68	27	21	78	36	31	86	63	52	83	83	
	経済学部(非常勤)	5	5	100	2	2	100	7	7	100	34	25	74	89	77	87	123	102	83	83	
	経済学部第二部(専任)	0	0	0				0	0	0	23	18	78				23	18	78	78	
	経済学部第二部(非常勤)	3	2	67				3	2	67	31	20	65				31	20	65	65	
	法学部(専任)	16	13	81	8	6	75	24	19	79	43	35	81	41	40	98	84	75	89	89	
	法学部(非常勤)	3	2	67	1	1	100	4	3	75	26	21	81	88	82	93	114	103	90	90	
経営学部(専任)	18	17	94	4	4	100	22	21	95	48	44	92	40	40	100	88	84	95	95		
経営学部(非常勤)	6	5	83	4	4	100	10	9	90	28	26	93	107	94	88	135	120	89	89		
経営学部第二部(専任)	2	2	100				2	2	100	25	25	100				25	25	100	100		
経営学部第二部(非常勤)	3	2	67				3	2	67	30	23	77				30	23	77	77		
国際政治経済学部(専任)	52	39	75	48	45	94	100	84	84	47	37	79	45	43	96	92	80	87	87		
国際政治経済学部(非常勤)	50	33	66	91	91	100	141	124	88	45	34	76	98	94	96	143	128	90	90		
総合文化政策学部(専任)	31	26	84	7	7	100	38	33	87	27	19	70	5	4	80	32	23	72	72		
総合文化政策学部(非常勤)	26	21	81	0	0	0	26	21	0	21	11	52	1	1	100	22	12	55	55		
理工学部(専任)				152	137	90	152	137	90				179	150	84	179	150	84	84		
理工学部(非常勤)				39	38	97	39	38	97				94	75	80	94	75	80	80		
社会情報学部(専任)				72	57	79	72	57	79				56	51	91	56	51	91	91		
社会情報学部(非常勤)				15	15	100	15	15	100				25	23	92	25	23	92	92		
教職課程科目(専任)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
教職課程科目(非常勤)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
教職課程科目第二部(専任)	0	0	0				0	0	0	0	0	0				0	0	0	0		
教職課程科目第二部(非常勤)	0	0	0				0	0	0	0	0	0				0	0	0	0		
合計	391	320	82	1,033	970	94	1,424	1,290	91	971	753	78	1,708	1,532	90	2,679	2,285	85	85		

※理工学部は理工学研究科の授業を含む。

2010年度

学期	前期						後期					
	青山			相模原			青山			相模原		
キャンパス	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)
学部	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)
青山スタンダード(専任)	36	30	83	91	87	96	127	117	92	95	81	85
青山スタンダード(非常勤)	28	15	54	368	303	82	396	318	80	440	354	80
全学共通第二部(専任)	5	3	60				5	3	60	11	7	64
全学共通第二部(非常勤)	6	5	83				6	5	83	69	50	72
文学部(専任)	12	11	92	13	13	100	25	24	96	64	57	89
文学部(非常勤)	37	30	81	87	85	98	124	115	93	161	141	88
文学部第二部(専任)	6	5	83				6	5	83	13	9	69
文学部第二部(非常勤)	43	37	86				43	37	86	78	66	85
教育人間科学部(専任)				11	11	100	11	11	100	14	14	100
教育人間科学部(非常勤)				2	2	100	2	2	100	53	45	85
経済学部(専任)	12	9	75	19	16	84	31	25	81	39	36	92
経済学部(非常勤)	13	7	54	2	2	100	15	9	60	93	79	85
経済学部第二部(専任)	0	0	0				0	0	0	15	11	73
経済学部第二部(非常勤)	3	2	67				3	2	67	25	12	48
法学部(専任)	16	15	94	8	8	100	24	23	96	35	26	74
法学部(非常勤)	4	3	75	0	0	0	4	3	75	31	22	71
経営学部(専任)	18	18	100	9	6	67	27	24	89	43	38	88
経営学部(非常勤)	7	5	71	5	3	60	12	8	67	34	28	82
経営学部第二部(専任)	3	3	100				3	3	100	20	19	95
経営学部第二部(非常勤)	1	0	0				1	0	0	27	20	74
国際政治経済学部(専任)	44	39	89	45	41	91	89	80	90	45	35	78
国際政治経済学部(非常勤)	47	25	53	94	84	89	141	109	77	42	26	62
総合文化政策学部(専任)	36	32	89	7	7	100	43	39	91	32	22	69
総合文化政策学部(非常勤)	34	20	59	0	0	0	34	20	59	28	16	57
理工学部(専任)				151	127	84	151	127	84			
理工学部(非常勤)				37	32	86	37	32	86			
社会情報学部(専任)				102	91	89	102	91	89			
社会情報学部(非常勤)				31	27	87	31	27	87			
教職課程科目(専任)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
教職課程科目(非常勤)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
教職課程科目第二部(専任)	0	0	0				0	0	0			
教職課程科目第二部(非常勤)	0	0	0				0	0	0			
合計	411	314	76	1,082	945	87	1,493	1,259	84	1,736	1,475	85
										2,652	2,153	81

※理工学部は理工学研究科の授業を含む。

学期	前期						後期					
	青山			相模原			青山			相模原		
キャンパス	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)
学部	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)	A 実施対象 科目数	B 回収 科目数	B/A (%)
青山スタンダード(専任)							31	24	77	118	102	86
青山スタンダード(非常勤)							62	41	66	460	380	83
全学共通第二部(専任)							9	4	44			
全学共通第二部(非常勤)							57	41	72			
文学部(専任)							51	44	86	48	46	96
文学部(非常勤)							121	81	67	163	147	90
文学部第二部(専任)							10	8	80			
文学部第二部(非常勤)							72	51	71			
教育人間科学部(専任)							26	22	85	15	15	100
教育人間科学部(非常勤)							37	25	68	54	49	91
経済学部(専任)							37	32	86	48	37	77
経済学部(非常勤)							19	14	74	81	68	84
経済学部第二部(専任)							0	0	0			
経済学部第二部(非常勤)							0	0	0			
法学部(専任)							35	26	74	37	34	92
法学部(非常勤)							30	20	67	83	76	92
経営学部(専任)							49	49	100	33	33	100
経営学部(非常勤)							37	27	73	117	94	80
経営学部第二部(専任)							13	10	77			
経営学部第二部(非常勤)							8	2	25			
国際政治経済学部(専任)							44	39	89	45	40	89
国際政治経済学部(非常勤)							42	29	69	117	101	86
総合文化政策学部(専任)							32	22	69	6	6	100
総合文化政策学部(非常勤)							35	28	80	0	0	0
理工学部(専任)										133	117	88
理工学部(非常勤)										89	75	84
社会情報学部(専任)										101	86	85
社会情報学部(非常勤)										44	30	68
教職課程科目(専任)							0	0	0	0	0	0
教職課程科目(非常勤)							0	0	0	0	0	0
教職課程科目第二部(専任)							0	0	0			
教職課程科目第二部(非常勤)							0	0	0			
理工学研究科(専任)										34	23	68
理工学研究科(非常勤)										7	5	71
合計							857	639	75	1,833	1,564	85

*震災の影響で前期は授業期間を短縮したため、「授業改善のための学生アンケート」は実施しなかった。

6. 授業アンケートについての教員アンケート

2011年3月11日の東日本大震災の影響による授業期間短縮のため、2011年度前期は授業時間の確保が最優先され、「授業改善のための学生アンケート」実施を見送った。その代わりに、全授業担当者を対象に「授業改善のための学生アンケート」に関するアンケート調査を行い、今後の改善に活かせる貴重な意見を聴取することができた。

授業改善アンケートについての教員アンケート

全学 FD 委員会委員長 副学長
長谷川 信

本アンケートは本学の授業改善アンケートをより有用なものに改善するために、教員の皆様に授業アンケート結果の活用方法や改善策についてお尋ねするものです。お時間をとり恐縮ですが、ご協力をお願いいたします。

1. 専任教員か、非常勤教員か、教えてください（どちらかに○を付けてください）。 専任 ・ 非常勤

2. 授業改善アンケートの集計結果を授業の改善に活用されていますか？（○を付けてください）

- a. とても活用している b. 少し活用している c. どちらともいえない
d. あまり活用していない e. 全く活用していない

2-1. 質問2で「a」または「b」を選ばれた方へ質問します。授業改善アンケートをどのように授業改善に活用されていますか？（○を付けてください。複数回答可。）

- a. 高い評価を受けた授業の方法を引き続き実践する。
b. 低い評価を受けた授業方法を改善する。
c. 異なる授業方法を試した時に学生の評価の変化を見る。
d. 他の教員と学生の評価を比較し、よい授業の方法について話す。
e. 自由記述欄の具体的なコメントを授業の改善に活用する。
その他の活用方法がありましたら、記述をお願いいたします。

2-2. 質問2で「d」または「e」を選ばれた方へ方に質問します。授業アンケートを活用されない理由は何ですか？（○を付けてください。複数回答可。）

- a. 大学の授業は学生に評価されるべきものではないから。
b. 授業の良し悪しによらず、大学の授業は学生が努力して理解すべきものであるから。
c. 自分はよい授業を行っており改善する必要はないから。
d. 学生による授業改善アンケートの評価は客観的でなく有益な指標でないから。
e. 授業アンケートの結果を見てもどのように改善すべきか明らかでないから。
その他の理由があれば、記述をお願いいたします。

3. 授業改善アンケートの結果に対応して、どのように授業を改善したらよいかについて情報を得られるならば、利用したいですか。（○を付けてください）

- a. 利用したい b. 利用しない c. どちらともいえない

4. 現在の授業改善アンケートの質問項目の中で、授業を改善する上で役立っている質問項目と役立っていない質問項目がございましたら、記入欄に○を付けてください（どちらにも該当しなければ、○を付ける必要はありません）。

	質問項目	役立っている	役立っていない
①	あなたがこの授業を履修した理由は何ですか		
②	あなたはこの授業にどの程度出席しましたか		
③	あなたは授業内容を理解するため積極的に取り組んだと思いますか		
④	1回の授業につき、あなたは予習・復習を平均してどのくらいしましたか		
⑤	この授業は『講義内容』（シラバス）を基本にして授業が行われましたか		
⑥	この授業の難易度はどうでしたか		
⑦	この授業の進行速度は適切でしたか		
⑧	教員の説明の仕方は分かりやすいものでしたか		
⑨	教科書や配布資料は授業内容を理解するうえで効果的でしたか		
⑩	黒板やプロジェクター等の使い方は効果的でしたか		
⑪	この授業に対する担当教員の熱意が感じられましたか		
⑫	授業時間内外における質問への対応は適切でしたか		
⑬	補佐教員（助手、TA）のサポートは適切でしたか		
⑭	あなたは、この授業の開講時に示された到達目標を十分に達成したと思いますか		
⑮	この授業の内容は興味深いものでしたか		
⑯	この授業の総合評価を5段階で評価してください		
⑰	この授業を履修して、自分のためになったことは何ですか		
⑱	この授業の良かった点、改善すべき点等について書いてください		

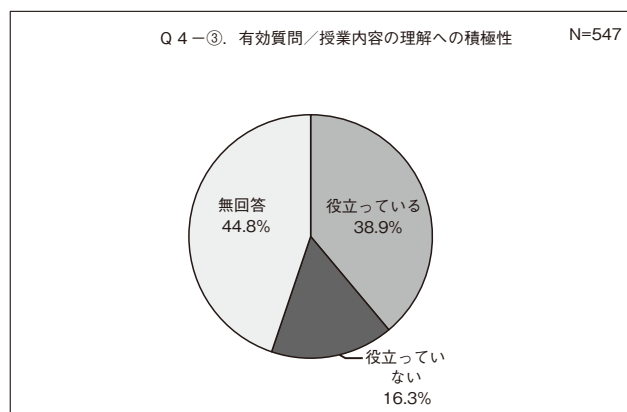
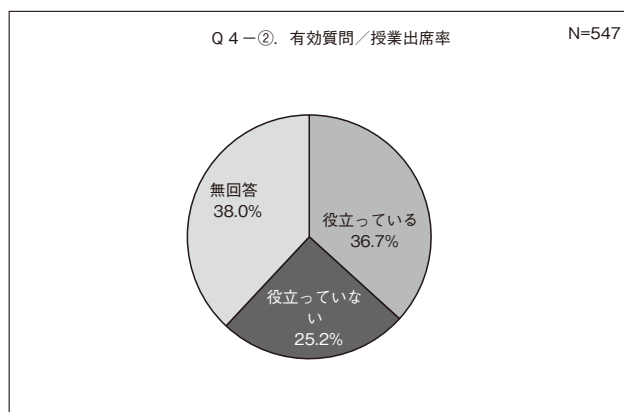
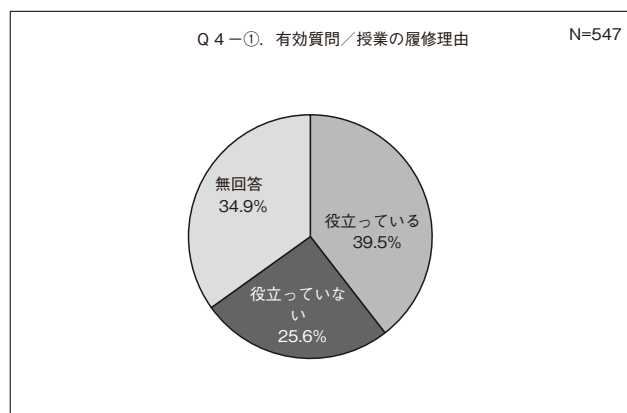
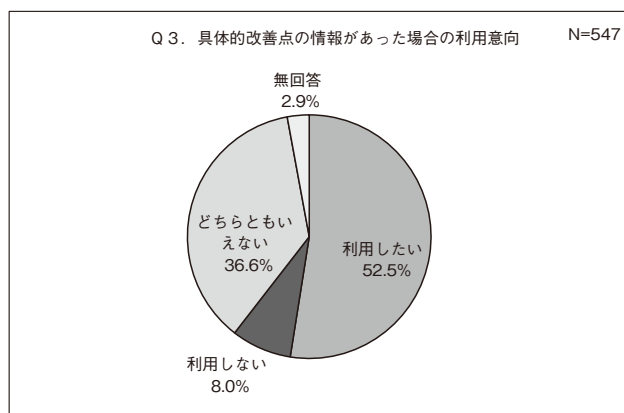
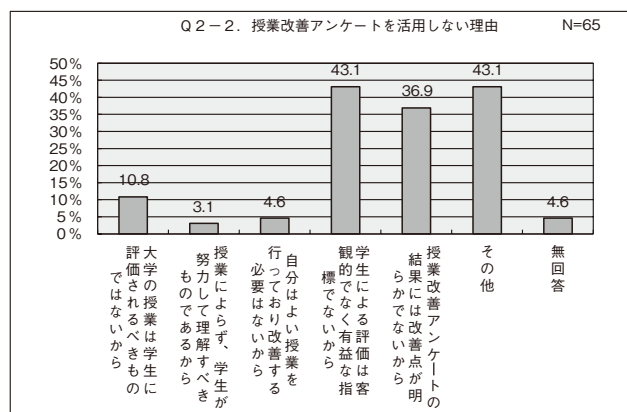
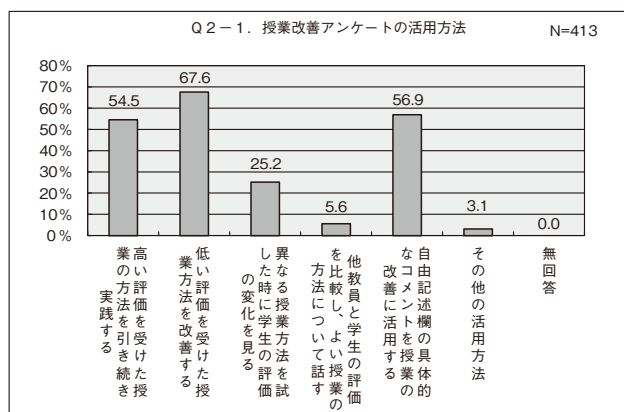
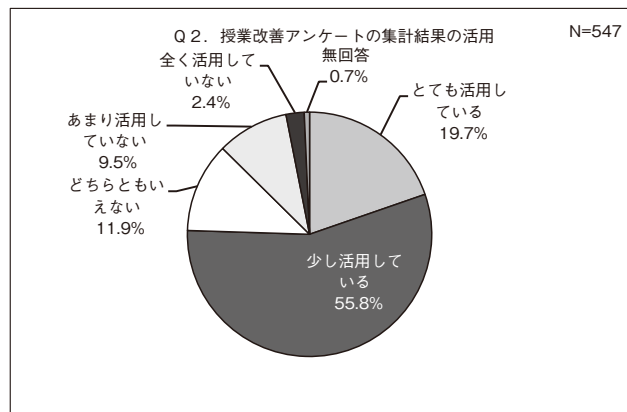
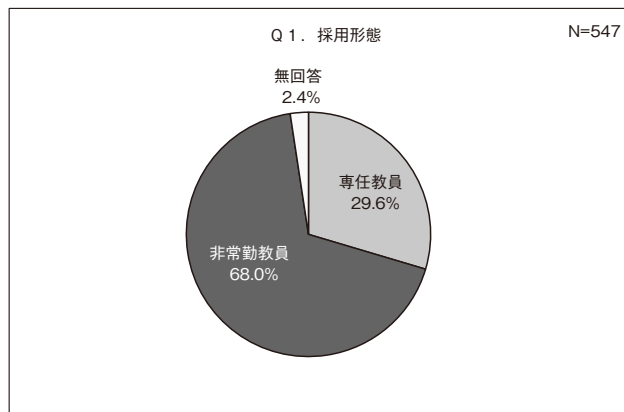
これ以外に授業改善を行う上で有益な質問内容として、現在の質問項目以外に考えられるものがあれば教えてください。

- _____
- _____
- _____

5. 本学の授業改善アンケート制度を改善する上で、よいアイデアがありましたら教えてください。

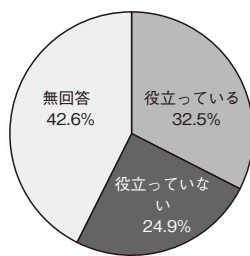
ご協力ありがとうございました。

アンケート集計結果



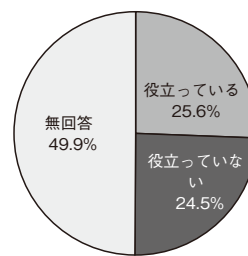
Q 4-④. 有効質問／予習・復習

N=547



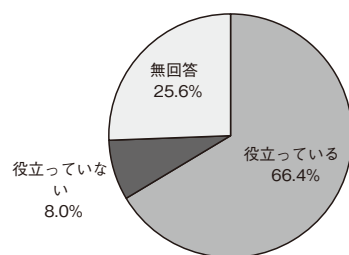
Q 4-⑤. 有効質問／シラバスに沿った授業進行

N=547



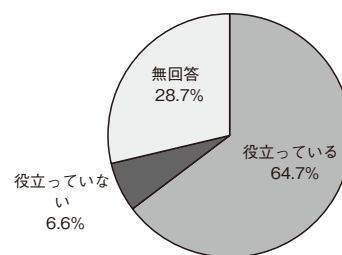
Q 4-⑥. 有効質問／授業の難易度

N=547



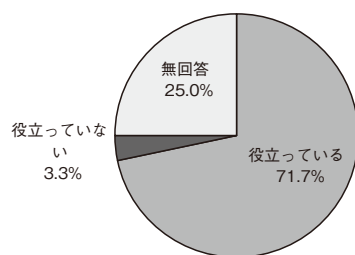
Q 4-⑦. 有効質問／授業の進行速度

N=547



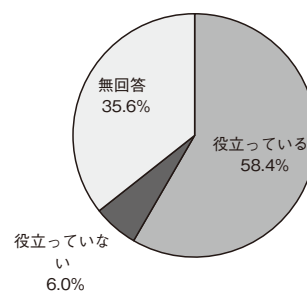
Q 4-⑧. 有効質問／教員の説明の仕方

N=547



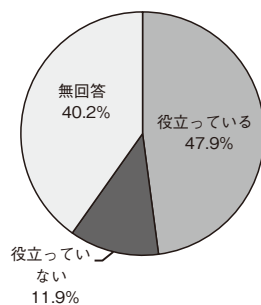
Q 4-⑨. 有効質問／教科書・配布資料の効果

N=547



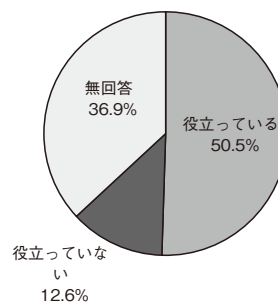
Q 4-⑩. 有効質問／黒板・プロジェクター等の効果

N=547

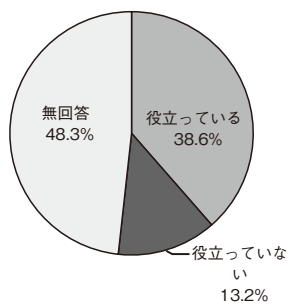


Q 4-⑪. 有効質問／担当教員の熱意

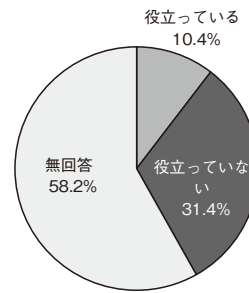
N=547



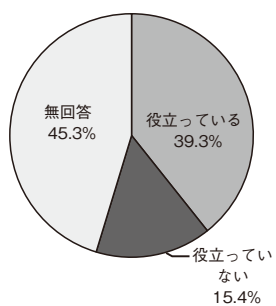
Q 4－⑫. 有効質問／授業時間内外における質問への対応 N=547



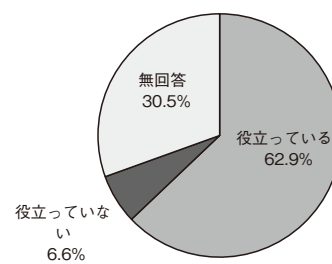
Q 4－⑬. 有効質問／補佐教員のサポート N=547



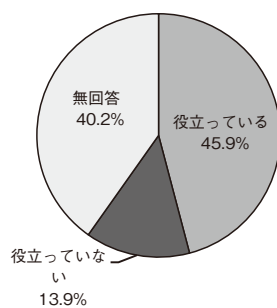
Q 4－⑭. 有効質問／到達目標の達成度 N=547



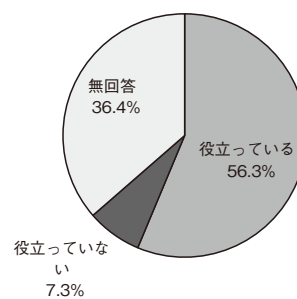
Q 4－⑮. 有効質問／授業内容の興味深さ N=547



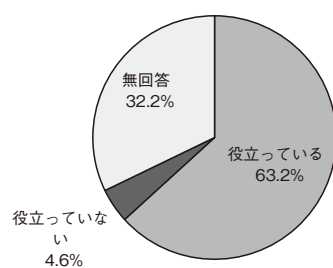
Q 4－⑯. 有効質問／授業の総合評価（5段階） N=547



Q 4－⑰. 有効質問／自分の為になったこと N=547



Q 4－⑱. 有効質問／授業の良かった点、改善点等 N=547

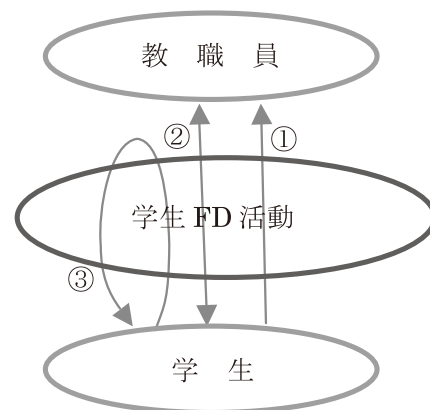


7. 学生FDスタッフの活動

学生FD活動って何？

学生が大学における授業改善のために行う諸活動のことをいいます。

そもそもFDという言葉はFaculty Developmentの略ですので、どうしてそこに学生がかかわってくるのかと疑問を持たれる先生もいらっしゃるかも知れません。けれども、少し改めて考えてみると、教育の質は教員だけではなく学生側の努力によって、また教員・職員と学生とよい協力関係によって高められるものなのです。図に示したように、学生FD活動は少なくとも3つの効果を通して授業改善に役立つようです。



①学生の想いやニーズの伝達。例えば、受講生が講義を理解する上でどんな困難に直面するのか、受講生の知的関

心を高めるためにはどんな授業の方法が有効かなどといった疑問に教員は十分に答えられないことも多いと思います。学生FD活動はそのような情報を学生から教員へ伝えることがあります。

②教職員と学生の協力関係を醸成。多くの学生は教員・職員を話づらい存在であると感じています。教員側も、学生は世代も違う教員と話したくはないだろうと決めつけていたりします。しかし、学生たちの中にはもっと教員と話してみたいと思っている学生が意外に多くいるものです。学生FD活動は学生と教職員のコミュニケーションの場を作り、教職員と学生のギャップに橋渡しをしてくれることもあります。そのようなコミュニケーションを通して教職員と学生の間に信頼関係が生まれて、よりよい学びの場を作ることができます。

③学生の自己認識の変化。学生FD活動を通して、教育の質を高めるためには学生自身が講義に臨むときの態度を変えなければならないと認識する効果も期待できます。

このような効果を通じて、学生FD活動は大学教育の質改善に役立つ可能性があるのです。

青山学院大学の学生FDスタッフ

青山学院大学では2011年度第5回全学FD委員会でFD推進委員会運営細則を改正し、FD推進委員会のもとに学生スタッフを置くことができることになりました。

青山学院大学FD推進委員会運営細則 (学生FDスタッフ)

第8条 必要な場合には、委員会の下に学生FDスタッフ（以下「スタッフ」という。）を置くことができる。

2 スタッフは、委員会の委員の指示により、FD活動に係る業務に当たる。

3 スタッフは、本学の学部又は大学院研究科に在籍する学生で、FD活動への参加を希望する者の中から、委員会が任命する。

現在約10名の学生が学生FDスタッフとして活動しています。2011年度は11月19日（土）に「全学しゃべり場！2011」を開催し、いろいろな学部の学生たちが集まり、青山学院大学の講義をもっとよいものにするためにはどんなことが求められているかについて語り合いました。その時に出された意見を集約して、代表の学生たちが副学長に意見書を手渡しました。その意見書の中には、例えば、「学生たちはもっと教員のことを知りたいと思っているのでFacebookなどのSNSに登録してほしい」というような思わぬリクエストも出てきました。

また、青山学院大学の学生FDスタッフは関東圏学生FD連絡会のメンバーとして活動しています。2012年3月10日（土）には、この会の主催による「学生FD NEXT1 ～集まろう！繋がる点と広がる輪～」というイベントが法政大学市ヶ谷キャンパスで開催されました。このイベントには関東を中心に全国の19大学から学生・教職員も参加して、「NEXT大学の授業を盛り上げろ！」というテーマ（さまざまな授業の問題をかかえる仮定のNEXT大学を想定しその大学でどのように授業を盛り上げるかという課題です）で意見交換を行いました。発表された意見の中で、「教員が熱意のこもったよい授業をしないので学生がやる気を失う。努力しない学生を見て教員もやる気をなくす。やる気がないので単位を落とし駆け込んでくる学生に対応する職員もうんざりする。このような悪循環が起きている」という発表が印象的でした。また、学生FD活動の意見交換を聞いていて興味深いのは、多くの参加学生が「大学の授業を良くするためには学生側の態度や意識が変わらなければならない」という発言をすることです。



学生FD活動の連携

学生FDスタッフは自分の大学の中だけに留まっていません。全国には学生FD活動を行っている大学がたくさんあります。それらの活動に携わる学生たちが横のネットワークを形成しつつあります。

立命館大学を中心として以前から全国学生FDサミットが年2回開かれてきました。2012年2月25日（土）、26日（日）には大阪の追手門学院大学を会場にして「学生FDサミット2012冬」が開催されました。全国から56大学の学生と教職員が合計340名参加し、白熱した意見交換が行われました。青山学院大学からは学生3名、教員1名が参加してきました。2日目の「しゃべり場」では学生・教員・職員がいっしょになって小グループでの話し合いが行われました。話し合いのテーマは「どんな大学に通いたいかな」で、それぞれの思いを語り合った後、「そんな大学にするために私たちは何ができるか」という実践に向けての話し合いが行われました。



他大学の学生FD活動

今回「全国学生FDサミット2012冬」を開催した追手門学院大学では、学生FDが教職員と学生の橋渡しを目的として学内の教員を紹介する「追大教員図鑑」の編纂のための研究室訪問や教員インタビュー、学生がベスト・ティーチャーを選んで表彰するという活動も行っています。



また、FD Letter第1号でも紹介しましたが、立命館大学は学生FD活動がとても活発です。学生FDスタッフ主催で学生たちが教員の研究室を訪問するキャンパス・ツアーを開催したり、学生FDスタッフたちが選んだ教員にインタビューを行って学生目線で教員紹介を行う企画などを行っています。それらの活動の成果は学生FDスタッフが作るニュース・レターや学生FDのウェブサイトを通して学内外に情報発信されています。

岡山大学の学生FDグループ「SweeTFooD」は学生の発案による授業の創作、授業評価アンケート項目の検討、習得単位の上制限の緩和などの修学システムの検討などにも学生がかかわっています。札幌大学の学生FDグループ「札大おこし隊！」は「サットーーク」という学生と教職員が気軽に話し合える交流の場の開催、学生発案型授業の創設、授業マナーNG集の刊行などに積極的に学生が参加しています。他にもたくさんの大学で学生が大学の授業改善にかかわってくるようになっていきます。

今後も教育の質の改善のために、教員だけの努力だけではなく、学生たちとの情報交換や協力、職員の方々のサポートが一体となることが、求められていくようになるだろうと思われます。そのため、青山学院大学でも生まれたばかりの「学生FD活動」を大切に育てていけたらと考えています。

8. 教育改善・教育プログラム支援制度

【開催経緯】

2009年度より、学内公募による「教育改善・教育プログラム支援制度」が実施された。

【実施の目的、実施概要】

この制度は、本学で行われる教育の質的向上をめざす取組みや新たな教育プログラムの開発を支援することによって、教育の改善・改革を進めるため、始動した。学部・学科や研究科、青山スタンダード教育機構、あるいは学部横断的なグループを単位として申請され、選考に通過したグループに対して、予算を補助し、運営している。

[実施の目的]

本学の教育現場において実践され、成果を得られるような「教育内容の質的改善」や「教育プログラムの導入・実施」などの取組みが期待される。また、得られた成果は全学部で共有し、発展的に活用するとともに、将来的には学外GPなどへの発展によって、本学の社会的評価が高められるような取組みが期待される。

<申請具体例>

- ・2012年度のキャンパス再配置を視野に入れた、学部教育、教養教育プログラムの開発
- ・全学横断的な初年次導入教育のプログラム化
- ・学生個人による「学習ポートフォリオ」の導入と活用
- ・ICTやマルチメディアを利用した授業支援プログラムの開発
- ・異学部・学科間の連携による、学際的な教育プログラムの提案
- ・学生の学習支援強化を目的とするTA養成プログラムの導入
- ・進路選択のミスマッチを防ぐためのキャリア形成プログラムの開発

[採択予定件数] 2～4件程度

[予算配分予定額] 総予算500万円程度（申請額）

用途について

- ※ 懇親会等での飲食代としての使用は不可
- ※ 物品購入費としての使用は、できる限り避けること
- ※ 同テーマの助成金との併用は認めない

[「申請グループ・単位」の考え方について]

申請の単位は、学部・学科、研究科など既存の組織に限定せず、学部・学科等を横断したグループでも可能である。ただし、本制度の目的を「本学で行われる教育の質的向上をめざす取組みや新たな教育プログラムの開発」としているため、学外者は含めない。

[プログラムの採択・予算配分額の審査および実行後の評価]

大学執行部が選定した、約3名程度の他大学の高等教育の専門家等を外部評価委員が、プログラムの採択、予算配分額の審査、及び実施後の評価を執り行う。

[審査の基準]

- ・本制度の目的にふさわしい企画であること
- ・実効性をもち目標を達成する可能性があること
- ・本学の特徴を生かした企画であること
- ・予算的に妥当な計画であること 等

[採択後の義務]

- 期限内に定められた報告書を提出すること
- 成果について学内発表する機会を設けること
- ホームページ、刊行物によって成果を公表すること

2009年度「教育改善・教育プログラム支援制度」全体講評一覧表

代表者氏名	竹田 賢（経営学部）
事業計画テーマ・概要	【シラバスと講義録の統合情報に関する高度活用システムの構築】 学部学生にICTを利用した新しい学習支援環境を提供することを第1義としながら、教員に対しては、2012年キャンパス再配置を念頭においたカリキュラム再構築を検討するための基本情報と契機を与える。具体的には、 1) シラバスの精緻化と利用促進に係る問題 2) 学生の学習ニーズの把握に係る問題 3) 教材作成の重複と共有利用の促進 4) 教員が講義に投じるコストの可視化 5) 教員相互の授業見学に係る実行可能性 これら5つの課題について、同時に解決するシステムの構築を目指す。
メンバー	荒木 万寿夫、加藤 篤史、矢内 一利、大道 千穂
結果コメント	基本計画が事前にできていたため、削減された予算の範囲内で良い成果を上げることができたと思われる。実際のシステム整備・ソフトウェア整備を先生方自らの手で進めたことは、これからの学生教育への良い効果として期待できる。目的は達成でき、またこれからの教育での実用可能性が高まったと思われる。
代表者氏名	三條 和博（経済学部）
事業計画テーマ・概要	【「科学・技術に関する意識データベース」の構築～大学におけるリテラシー教育の基盤整備を目指して】 青山スタンダード科目「科学・技術の視点」の担当者として、2004年度以来授業によって学生の意識がどのように変化したかを調査する目的で「科学・技術に関する意識調査」を実施してきた。現段階で、過去5年、延べ約5,000人分の生データが紙媒体で蓄積されている。本事業では、このデータを電子化して「科学・技術に関する意識データベース」を作成する。 得られたデータベースは、当該科目の評価ならびに改善のために役立てる。また、データベースならびにその解析結果は全学で共有できる形とし、本学における自然科学系教養教育のあり方全体について検討する際の基礎データを提供することを目指す。
メンバー	中田 恭子（理工学部）
結果コメント	今回の目的はデータベースの構築であったが、データは初期の計画の倍以上入力された。データ入力をしながら、システムとしての課題を見つけ、それを改善する努力がみられたことは、大変良かった。今後の課題として、他の教員に使用していただき、その結果を学内に公開してフィードバックしていただきたい。
代表者氏名	小田 光宏（教育人間科学部教育学科）
事業計画テーマ・概要	【各種資格（司書・社会教育主事）教育プログラムの評価モデルの開発】 各種資格（司書・社会教育主事）における筆記試験の出題ならびに採点における相互評価の可能性・有効性について調査・検討し、望ましい成績評価の在り方を明らかにする。 資格育成プログラムについて、科目構成・授業内容など、全体的な評価を行う。本学では、すでに一般的な青山スタンダード科目や専門科目などを対象とした「授業改善のための学生アンケート」はすでに実施されているが、資格養成科目としての性格を合わせもった専門科目における授業評価の在り方についても明らかにする。 学習者、すなわち各授業履修者・各プログラム受講者（学生）について、学習意欲・学習行動などを実証的に分析した調査はほとんど存在しないため、アンケート・インタビュー調査などを実施し、基礎データを得る。
メンバー	鈴木 眞理、柳田 雅明、野末 俊比古
結果コメント	事前計画の甘さが費用面や執行面に影響を与えたと思われる。今後継続するのであれば、今回の結果をどのように活かしていくか、またFDにつなげていくかを考えていただきたい。ここで得られた学生のアンケートを教員が次の授業へ反映させていくことに興味をもっている。資格科目だけにとどめずに、他の科目・教員へ展開していってもらいたい。

代表者氏名	魚住 清彦（社会情報学部）
事業計画テーマ・概要	【ティーチング&ラーニング・ポートフォリオに基づく総合的教育支援】 社会情報学部の教育プログラムは2008年度から開始され、2009年度には、入学時に「自己発見レポート」として、在学時に「自己プログレスレポート」として、個々の学生キャリア支援につながるプログラムも開始・運用されている。学部教育プログラムの中では、カリキュラムにかかわる教育実施データは徐々に蓄積され、多くの授業科目で、その実施状況を開示、分析していくための素地が生まれつつある。ただし、それらを統一的に眺めることのできる環境をもつに至っていない。 そこで、教育プログラムとキャリア支援プログラムにより蓄積された情報に基づいて、TLポートフォリオを構築し、学生と教員両者が有効に活用できる環境を整備することとした。これを活用することによって、可能な限り短いサイクルで、持続的に教育システムの検証と見直しが実施できる体制を構築し、実践していくことが可能となる。
メンバー	学部専任教員全員
結果コメント	情報システムの基本仕様では、非機能要求を明確にすることが重要である。今回はプロトタイプ of 作成とテストであったが、実フィールドでは、運用条件が変わるため、非機能の部分を見直して発注することが望ましい。学部教員全員が参加していることは大変評価できる。ユーザーのスキル向上へつながる基本設計をすることに大いに期待している。
代表者氏名	西澤 宗英（法学部）
事業計画テーマ・概要	【大学生に対するリーガルリスク教育】 大学生を取り巻くリーガルリスクが多様化、深刻化していることから、それに対応する教育カリキュラムを構築し、社会人が生活していくなかで必要なリーガルリスクについても、独力で解決できるような基本的なリーガリティを身につけさせるような導きや、大学教育としてこれまで蓄積してきた法律学に関する研究・教育を、実務に活かし、「セルフヘルプ力とリーガリティを修得した人材」の育成をめざす。
メンバー	藤川 久昭、楊 林凱
結果コメント	やるべきテーマは興味深いが、計画とスケジュール管理が十分でなかったため、思っていたレベルまで達成できなかったことが残念である。継続する場合には、事前調査をしっかりと行い、計画的に実施していただきたい。また、他大学への調査を成果にしっかりと結びつけていただきたい。

2010年度

代表者氏名	狐崎 直文（理工学部情報テクノロジー学科）
事業計画テーマ・概要	【IT専門実験室における演習環境の改善】 IT専門実験室におけるコンピュータを使った演習中に学生が直面したコンピュータハードウェアおよびソフトウェアのトラブルに対応可能な環境の構築が本事業計画の目的である。ハードウェアのトラブルに対しては、貸し出し可能なハードウェアを用意し、ソフトウェアのトラブルに対しては、学生が疑問を書き込み、担当の教員やIT専門実験室にいる他の学生がアクセスできる質問掲示板を作成して、担当の教員によるリアルタイムのフィードバックを可能にした上に、担当の教員、TAだけでなく、IT専門実験室にいる他の学生による、リモートデスクトップ機能を使用したサポートを可能にする演習室内サービスの提供を可能にする環境を構築する。
メンバー	水澤 純一、河上 篤史、藤本 悠、松田 源立、武藤 剛、矢吹 太朗、斉藤 友彦、松原 俊一
結果コメント	所期の目的は達成できていると思われ、予算の使い方も妥当であるが、検証をどのようにされたかを明確に述べて欲しかった。 さらに、実運用で成果が出ることを期待する。 また、様々な人が使用する中ではリスク対応が課題となるため、初期対応をきちんとしてほしい。
代表者氏名	内田 達也（国際政治経済学部国際経済学科）
事業計画テーマ・概要	【経済学導入教育用マテリアルの開発】 2012年度のキャンパス再配置を視野に入れ、学部および教養教育プログラムの充実を図るの一貫として、経済学導入教育用マテリアルの開発を行う。 現在、国際政治経済学部では、新入生を対象にクラス指定の必修科目として入門セミナーというコースを開講しており、プレゼンテーションや議論を通じて経済学的なものの見方や考え方を学んでいる。経済学的な観点から経済事象を理解し、さまざまな疑問点を探求する姿勢を身につけることを目標としており、2009年度の卒業生アンケートにおいても、こうした試みは高い評価を受けている。 しかしながら、その方法論については、各担当教員に任されており、いまだ試行錯誤を重ねている最中である。このため、学科内では、当該コースの目的達成のためにある程度の核となるマテリアル開発の必要性が論じられている。当該プロジェクトは、そうしたガイドラインたりえるマテリアルの開発を目指している。
メンバー	内山 義英、竹田 憲史、友原 章典
結果コメント	教材作成までのプロセス、教員間の意見交換、関係授業における情報共有がされていること等、FDとしての効果が高く評価できる。 ただし、電子教材を開発する場合には、この教材を使用して、改善点等を事前に反映されることが望ましい。
代表者氏名	竹田 賢（経営学部）
事業計画テーマ・概要	【校友追跡調査に基づく実業要請志向教育プログラム開発のためのシステム構築】 本事業は昨今目覚ましい速さで進展を見せるグローバル化によって、リアルビジネスの現場で高度に要請されるようになった知識・スキルの変容と実態を精緻に捕捉分析し、それらへの対応を教育プログラムへと即応的に体化するための仕組み作りとその実践を目指すものである。また、周知のとおり、『大学設置基準及び短期大学設置基準の一部を改正する省令(平成二十二年二月二十五日文科科学省令第三号)』により、大学設置基準第四十二条において、以下の一条項が加えられている。 大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。 同省令は2011年4月1日から施行されるため、本学において当該改正への対応が急務となることは言を待たない。本事業は、まさに「学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力」に係る教育プログラム開発を可能とするシステム構築を目的とするものであり、時宜を捉えた学内先駆事例となりうるものと言うことができる。
メンバー	荒木 万寿夫、加藤 篤史、矢内 一利、山下 勝、岩井 陽香
結果コメント	所期の目的は達成できている。ただ、予算と実績との照合の関係がもう少し具体的に書かれていることが望ましい。 Webの改修作業、並びに教育プログラム開発をどのような方向で、具体的にしていかが今後の課題である。

代表者氏名	三條 和博（経済学部）
事業計画テーマ・概要	【「科学・技術に関する意識データベース」の高度利用】 ー学生プロファイリングに基づく科学リテラシ科目の構築を目指してー プログラムの概要 本事業は、本学における自然科学系教養教育の改善に資する中長期プロジェクトの一環として、2009年度に構築した「科学・技術に関する意識データベース」の高度利用を図るものである。 〈背景および2009年度の成果〉 青山スタンダード科目における自然理解関連科目を通じて実施した「科学・技術に関する意識調査」の結果として、過去6年間に延べ約15,000件分の回答済み調査票が紙媒体として蓄積してあった。2009年度において、このうち約12,000件分の回答データを電子化した「科学・技術に関する意識データベース」を作成した。 〈2010年度の計画〉 2010年度は、（1）2009年度時点で電子化されずに残ったデータについて追加入力作業を行いデータベースの完成度を高めること、（2）このデータベースを利用し、受講学生のプロファイルおよび授業のあり方に関する、教育上有用な情報の抽出を目指し種々の分析を行うこと、（3）得られた結果の公開とデータベース利用プロセスの共有ツール化を図ること、の3点を実施する。
メンバー	中田 恭子（理工学部）
結果コメント	データベースが完成し、所期の目的が達成されたと思われる。また、評価軸も妥当である。業者に丸投げで委託するのではなく、評価コメントを受け止め、業者との連携を密にして進めていたことは評価できる。 最終的に納品されたデータ分析に関して、どのように受け入れ検査をしたのか明確にしてほしい。
代表者氏名	稲積 宏誠（社会情報学部）
事業計画テーマ・概要	【ティーチング&ラーニング・ポートフォリオに基づく総合的教育支援】 プログラムの概要 本学部では、通常カリキュラムに基づく教育情報に加えて、入学時の自己発見レポートに基づくデータ、さらに在学中の自己プロGRESSレポートに基づくデータを保持している。そこで、本事業では、これらを融合することによって、学生の学習支援のみならず教員（組織）の教育力支援のためのティーチング&ラーニング（TL）ポートフォリオを設計・活用し、学生のキャリア設計支援と学部教育活性化を持続的に実現していくことを、完成年度に向けての学部としての取り組みと位置づけている。 昨年度は、TLポートフォリオの仕様を確定し、設計へと進め、今年度以降にこれを活用した展開を目指した。特に、今年度は、学部1期生の就職を控えており、今年度後期に向けて、キャリア支援にも耐えうるものとして試用可能なシステムとしてのリリースを図ることを目的とする。
メンバー	学部専任教員全員
結果コメント	所期の目的どおり、プロトタイプ仕様書ができたことは評価できるものの、検証中ということで最終結果が書かれていないので、きちんと報告してほしい。

2011年度

代表者氏名	内田 達也（国際政治経済学部国際経済学科）
事業計画テーマ・概要	【経済学導入教育用マテリアルの開発】 2013年度のキャンパス再配置を視野に入れ、学部および教養教育プログラムの充実を図るの一貫として、経済学導入教育用電子教材の開発を行う。 現在、国際政治経済学部では、新入生を対象に入門セミナーというコースを開講しており、プレゼンテーションや議論を通じて、経済学的なものの見方や考え方を学んでいる。経済学的な観点から、経済事象を理解し、さまざまな疑問点を探求する姿勢を身につけることを目標としており、卒業生アンケートにおいても、こうした試みは高い評価をうけている。しかしながら、その方法論については、各担当教員に任されており、いまだ試行錯誤を重ねている最中である。このため、学内では、当該コースの目的達成のために、ある程度の核となる教材開発の必要性が論じられている。当該プロジェクトでは、そうしたガイドラインたりえる電子教材の開発を目指している。
メンバー	内山 義英、竹田 憲史、友原 章典
結果コメント	年度当初からの計画が実施されており、プロジェクトの進め方も妥当である。著作権問題を配慮していることはFDとして評価できる。今後、年度ごとの内容の更新が適宜行われ、教育効果についても継続的に自己評価・他者評価が行われることを期待する。
代表者氏名	八田 進二（会計プロフェッション研究科）
事業計画テーマ・概要	【会計専門職大学院教育における実践的教育の展開】 会計専門職大学院の目的は、とすれば、会計士試験の合格のためといった近視眼的な理解がされがちであるが、会計専門職大学院は、実務と一体となった学習を展開することによって、有為な会計プロフェッションを育成しようとの理念に立っている。したがって、会計専門職大学院にあっては、一定数の実務家教員の配置が求められているのであり、カリキュラム上も、単なる理論科目のみならず、実務を基礎とした科目や、実務における実践的教育としてのインターンシップ等が置かれているのである。 そうした会計専門職大学院教育において、常に課題となるのは、実践的教育の実施方法である。とくに、実務をいかにして教場の場において教育するか、また、インターンシップ等をいかにして実施するかという点である。現在、各大学院における実務家教員による教育及びインターンシップ等の実施方法は、実のところ一定の規準もなく、その水準もまちまちである。 そこで、本事業計画では、全国の会計専門職大学院のうち、相応の規模を維持し、一定の会計プロフェッションを輩出している大学院を対象として、実践的教育の実施方法を調査し、その結果をもとに、会計専門職大学院における実践的教育の標準的ないし標準とすべき方法を明らかにすることにある。
メンバー	多賀谷 充、小西 範幸、橋本 尚、町田 祥弘、吉村 貞彦、片山 英木、内山 峰男、山田 善隆
結果コメント	大学院の現状把握については当初の目的どおり、日本のほぼすべての会計専門職大学院のアンケートと訪問調査を実施し、報告書にまとめたことは評価できる。ただし、目標の一つである講義内容にまで踏み込んだ議論については、今後の課題である。
代表者氏名	DIAS, J. V.（文学部英米文学科）
事業計画テーマ・概要	【多学部間における英語教育情報共有のためのオンライン・システム構築】 英米文学科は自学科の英語教育に加え文学部全体の英語教育を責任担当しており、これまでも他学部の英語教育責任者との間に相互協力が行われてきた。しかし、本学学生の英語教育における需要をどのように満たしているかなどについて、オンライン上で定期的かつ適時に情報交換を行うための場は確立されていない。また、非常勤教員に教育プログラムの変更等についての情報を送ったり、非常勤教員が学生に授業関係の告知やファイルを送るための、共通した使いやすいシステムも存在しない。 こういった問題は「Word Press」というブログ・ソフトウェアを使うことにより解決できる。このソフトは、プラグインの導入により、授業向けブログや通常のホームページを簡単に作成できるようになるなど、広範な機能を持たせることができる。これにより、Wordファイル、PDFファイル、PowerPointファイル、写真、短いビデオといった教材を学生にダウンロードさせることができる。 本企画の目的は、英米文学科と他学部の英語科目責任者を繋ぐWord Pressブログサイトの開発である。これにより、各学部内外における教育プログラム改善のための意見交換がより円滑に行え、非常勤教員も含めた担当者間での各種素材の共有がより容易になる。
メンバー	STRONG, G. B.（文学部英米文学科）、ALLEN 玉井 光江（文学部英米文学科）、外池 滋夫（文学部英米文学科）、REEDY, D. W.（理工学部）、LAMBACHER, S. G.（社会情報学部）、DUFF, B. R.（経営学部マーケティング学科）
結果コメント	既存のWEBサイトを一新し、ブログサイトを立ち上げるという初期の目的は達成されたと考えられる。今後の課題として、AGU4Uのサイトを学生達を含め有効な情報共有の場として、活用されることを期待する。また、継続的なコンテンツなどの更新が必要となろう。

代表者氏名	STRONG, G. B. (文学部英米文学科)
事業計画テーマ・概要	【翻訳タスクによる読解指導：教員研修DVDの作成】 本企画は、青山スタンダードの英語科目のほか、授業内において英語から日本語の翻訳作業を伴う他の一般・専門科目の担当教員の支援に繋がるものである。 英米文学科の英語教育プログラム検討委員会が行った調査の結果に基づき、新しい教室活動を試験的に行う。 学生の参加を促進し、授業を双方向的にするため、授業活動にはtask-based teaching (TBT) を取り入れる。簡単に述べると、語学教員におけるタスクはできる限り実生活で行われるようなものであるべきで、学生の積極的な参加が望まれる。 本企画の最終的な成果は、本学の教員たちが翻訳という現在提唱されている語学教授法の中では新しいと言えるタスクをどのような形で授業に取り入れているかについての記述及び授業風景を収録した教員指導用のDVDとなる。
メンバー	DIAS, J. V. (文学部英米文学科)、ALLEN 玉井 光江 (文学部英米文学科)、小張 敬之 (経済学部)、山本 史歩子 (教育人間科学部)、宮澤 淳一 (総合文化政策学部)
結果コメント	計画当初案どおりの予算執行が進められ、プロジェクトが所期の目的を達成したと考えられる。 具体的には、教員の授業の進め方などを盛り込んだDVDが完成したことで、利用の第一歩が始まっている。さらに、DVDを充実して授業効果が出ることを期待したい。

2012年度

代表者氏名	DHORNE, F. (文学部フランス文学科)
事業計画テーマ・概要	【フランス語学管のための理解力カストラテジーによる改善プログラム】 フランス文学科の学生がフランス語を実践的に学ぶため、これまで利用してきたe-ラーニングの視聴覚教材の不十分な点等を改良し、新たなe-ラーニングのオリジナル教材を制作。 新しい教材は、フランス語会話の総合的な理解力をつけるため、フランス人による自然な会話を収録。学びの順序にも配慮し、e-ラーニングの問題も含めたものとした。
メンバー	ADAMI, S. LEBLOND, A.
結果コメント	FDの観点では、教員が主体的に関わっており、そのプロセスも妥当であった。 作成された教材ソフトは、フランス語の視聴覚教材として今後のe-learningに有効に活用できる内容となっており、評価できる。 今後の課題としてはCALLシステムが整備された時点で、これをどう連動させていくかについて検討されたい。 特に今後の運用実施に向けて、より詳細な予算計画を立てられたい。
代表者氏名	稲積 宏誠 (社会情報学部)
事業計画テーマ・概要	【学生意識調査結果を活用したキャリア支援システムの構築】 初めて就職活動に取り組む学生のために、自己分析からエントリーシート作成までの就職活動支援環境（支援システム）を構築した。 具体的には、本学で実施している「学生意識調査を用いた分析」「自己分析」「エントリーシートの入力」の3つの段階を用意した。「学生意識調査を用いた分析」では自分自身の見直し、「自己分析」では自己理解を行って、自分の将来像を描く手助けを行っている。「エントリーシートの入力」では、エントリーシートでよく問われる設問を用意し、書く際に役立つデータやサンプルの表示を行い、シート作成が円滑に進むような設計を行った。 また、このシステムは、管理者が必要に応じてユーザーに蓄積データを公開できる機能を有しているため、学生に必要だと思われるデータを積極的に提供することも可能にしている。
メンバー	寺尾 敦、東 るみ子、森田 武史
結果コメント	キャリア支援システム構築・改修作業の目標は、ほぼ達成できたといえる。 実運用に向けて、多面的なチェックがおこなわれていることも評価できる。 このシステムによって、学生の学習へのモチベーションをどう向上させられるか、速やかに検証されることを期待する。 なお、予算計画の費目と決算報告の内容との整合性についても検討されたい。

9. 学生意識調査

【開催経緯】

従来より一部の学部で学生に関する調査が実施されていたが、全学的に学生の学習に対する期待や姿勢、大学における成長感等に関する調査を実施することが、2009年度後期より全学FD委員会にて検討され、各学部教授会での承認を経て、2010年度より全学的な実施を開始した。（2010年度は全学部新入生および4学部の2年生）

2011年度からは全学部1～3年生を対象に実施した。また4年生を対象とした「卒業生調査」も2011年度から実施を開始した。

【実施の目的、実施概要】

○実施の目的

1年生（4月実施）

（学生にとって） 学生生活の目標設定・学びと進路のつながりを意識するきっかけとする

（大学にとって） 新入生の現状把握。PDCAサイクルの起点のデータとする

2年生（4月実施）

（学生にとって） 学生生活の振り返りをもとに、2年次以降の目標の再設定をするきっかけとする

（大学にとって） 1年間の学生生活の満足度・成長感を把握し、教育改善につなげる

3年生（4月実施）

（学生にとって） 就職活動のための自己分析のツール。結果を元に自己PRと志望動機の作成をする

（大学にとって） 学生の満足度・成長感を把握し、教育改善につなげる

4年生（3月実施）

（大学にとって） 4年間で学生が身につけた力・モチベーションの変化の把握、満足度・成長感を把握し、入学～4年間の総括データとする

○実施概要

（実施方法）

1～3年生は4月、4年生は後期（11月～3月）に実施する。

マークシート方式のアンケート調査で、設問内容は学年によって異なり、1～3年生は「基礎学力調査」と「学生生活に関するアンケート」の2部構成。所要時間は約90分。4年生は「学生生活における満足度調査」に関するアンケートで、所要時間は約30～40分。

（受検率、全学部合計）

2010年度	1年生	79.7%	2年生	40.8%	※2年生は4学部のみ実施			
2011年度	1年生	94.2%	2年生	46.0%	3年生	72.6%	4年生	25.9%
2012年度	1年生	87.9%	2年生	59.5%	3年生	53.7%	4年生	66.3%

（実施結果）

アンケート委託業者による回答の集計と分析をおこない、各学生（1～3年生）へフィードバックする。その際、前年以前に受検している場合は経年の変化も掲載する。

【集計結果のフィードバック】

1～3年生については、各自へ回答結果と分析結果をまとめた「集計結果シート」を用い、外部講師によるフォローアップ講座（進路指導）を実施している。

また、全実施結果および分析結果を学部教授会にて報告、学部運営の参考としているほか、全教職員対象の報告会を開催し、学院関係者で情報を共有している。

2010年度 学生意識調査の実施状況

1 年

学部	学生数(5/1)	受検者数	受検率
文学部(※)	798	624	78.2%
教育人間科学部(※)	347	285	82.1%
経済学部	555	380	68.5%
法学部	504	415	82.3%
経営学部	617	441	71.5%
理工学部	559	445	79.6%
国際政治経済学部	387	378	97.7%
総合文化政策学部	273	209	76.6%
社会情報学部	227	223	98.2%
合計	4,267	3,400	79.7%

※文学部教育学科及び心理学科は教育人間科学部に含む

2 年

学部	学生数(5/1)	受検者数	受検率
経済学部	652	203	31.1%
国際政治経済学部	367	142	38.7%
総合文化政策学部	261	146	55.9%
社会情報学部	214	118	55.1%
合計	1,494	609	40.8%

2011年度 学生意識調査の実施状況

1 年

学部	学生数(5/1)	受検者数	受検率
文学部(※1)	754	676	89.7%
教育人間科学部(※1)	339	331	97.6%
経済学部	534	510	95.5%
法学部	553	486	87.9%
経営学部	556	536	96.4%
理工学部	620	605	97.6%
国際政治経済学部	295	285	96.6%
総合文化政策学部	284	267	94.0%
社会情報学部	221	217	98.2%
合計	4,156	3,913	94.2%

2 年

学部	学生数(5/1)	受検者数	受検率
文学部(※1)	820	433	52.8%
教育人間科学部(※1)	367	203	55.3%
経済学部	605	192	31.7%
法学部	554	314	56.7%
経営学部	638	257	40.3%
理工学部	556	358	64.4%
国際政治経済学部	408	121	29.7%
総合文化政策学部	268	74	27.6%
社会情報学部	221	106	48.0%
文学部第二部(※2)	117	36	30.8%
合計	4,554	2,094	46.0%

3 年

学部	学生数(5/1)	受検者数	受検率
文学部(※1)	831	765	92.1%
教育人間科学部(※1)	329	313	95.1%
経済学部	587	322	54.9%
法学部	509	463	91.0%
経営学部	555	399	71.9%
理工学部	753	504	66.9%
国際政治経済学部	344	240	69.8%
総合文化政策学部	258	128	49.6%
社会情報学部	243	137	56.4%
文学部第二部(※2)	112	13	11.6%
合計	4,521	3,284	72.6%

※1 文学部教育学科および心理学科は教育人間科学部に含む

※2 文学部第二部英米文学科のみ

2012年度 学生意識調査の実施状況

1 年

学部	学生数(5/1)	受検者数	受検率
文学部	833	699	83.9%
教育人間科学部	312	260	83.3%
経済学部	538	524	97.4%
法学部	535	413	77.2%
経営学部	612	592	96.7%
理工学部	709	697	98.3%
国際政治経済学部	327	241	73.7%
総合文化政策学部	319	231	72.4%
社会情報学部	249	242	97.2%
合計	4,434	3,899	87.9%

2 年

学部	学生数(5/1)	受検者数	受検率
文学部(※1)	775	526	67.9%
教育人間科学部(※1)	360	233	64.7%
経済学部	609	367	60.3%
法学部	604	354	58.6%
経営学部	591	320	54.1%
理工学部	615	410	66.7%
国際政治経済学部	300	125	41.7%
総合文化政策学部	273	105	38.5%
社会情報学部	218	145	66.5%
合計	4,345	2,585	59.5%

3 年

学部	学生数(5/1)	受検者数	受検率
文学部	815	530	65.0%
教育人間科学部	357	225	63.0%
経済学部	521	260	49.9%
法学部	485	332	68.5%
経営学部	600	246	41.0%
理工学部	692	273	39.5%
国際政治経済学部	390	229	58.7%
総合文化政策学部	269	120	44.6%
社会情報学部	256	163	63.7%
文学部第二部(※2)	96	27	28.1%
合計	4,481	2,405	53.7%

※1 文学部教育学科および心理学科は教育人間科学部に含む

※2 文学部第二部英米文学科のみ

卒業生調査 実施結果

2011年度

学部	卒業生数 (2012年3月)	回答数	回答率
文学部	1,079	309	28.6%
経済学部	517	118	22.8%
法学部	472	104	22.0%
経営学部	541	84	15.5%
理工学部	517	226	43.7%
国際政治経済学部	285	67	23.5%
総合文化政策学部	234	36	15.4%
社会情報学部	238	63	26.5%
文学部第二部	168	50	29.8%
経済学部第二部	40	6	15.0%
経営学部第二部	29	4	13.8%
合計	4,120	1,067	25.9%

2012年度

学部	卒業生数 (2013年3月)	回答数	回答率
文学部	760	575	75.7%
教育人間科学部(※)	321	247	76.9%
経済学部	536	233	43.5%
法学部	459	167	36.4%
経営学部	512	263	51.4%
理工学部	557	464	83.3%
国際政治経済学部	304	261	85.9%
総合文化政策学部	233	190	81.5%
社会情報学部	199	173	86.9%
文学部第二部	100	79	79.0%
経済学部第二部	19	2	10.5%
経営学部第二部	9	4	44.4%
合計	4,009	2,658	66.3%

※ 文学部教育学科および心理学科は教育人間科学部に含む

10. シラバス充実化

シラバスのWEB公開と充実化

【実施の目的、実施概要】

1. シラバス記載内容の統一化

本学では、1954年の文学部・経済学部を嚆矢として、その後の開設された学部も全てシラバス（講義内容）を冊子にまとめて発行し、学生による講義の選択や学習計画の作成を支援してきた。しかし、2007年度の大学基準協会による認証評価では、シラバスの記述の統一性に問題が見られることが指摘された。

指摘に基づき、教員間の記述の内容や量についてのばらつきをなくすように、全学FD委員会では、シラバスについては全学的に統一と充実を図り、シラバス記入マニュアルの充実や、教員への適切な記述の要請を強化した。また、講義内容原稿の入力システムの稼働、学生ポータルへの掲載等を実施してきた。特に、記述内容に関しては、全学FD委員会で2008年度にシラバスの項目を再検討し、「授業の到達目標およびテーマ」の追加、授業計画を15項目に分けて記入することなどを実施することとし、その内容は2009年度からシラバスに反映されている。その結果、2010年度までにはシラバスの統一化は基本的に実現した。

2. 公開にむけて

法改正

学校教育法施行規則等の一部を改正する省令（平成22年文部科学省令第15号）が平成22（2010）年6月15日に公布され、平成23（2011）年4月1日から施行されることとなった。

この省令は、大学等が公的な教育機関として、社会に対する説明責任を果たすとともに、その教育の質を向上させる観点から、公表すべき情報を法令上明確にし、教育情報の一層の公表を促進することを趣旨としている。

この法改正を受け、本学においてもシラバス公開に向けて急ぎ検討することになった。

学校教育法施行規則（昭和22年文部省令第11号）の改正の概要と留意点（抜粋）

(1) 大学（短期大学、大学院を含む。）は、次の教育研究活動等の状況についての情報を公表するものとする。こと。（第172条の2第1項関係）

（中略）

【5】 授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること。（第5号関係）

これらは、大学設置基準第25条の2第1項等において、学生に明示することとされているものであること。その際、教育課程の体系性を明らかにする観点に留意すること。年間の授業計画については、シラバスや年間授業計画の概要を活用することが考えられること。

他大学の状況

2010年当時、全国私立大学FD連携フォーラム加盟校や関東圏FD連絡会のなかで、シラバスがWeb上で非公開の大学は本学のみであった。（印刷物である冊子「講義内容」は、教職員・学生はもとより他大学に対しても配布・公開）

また、下記に引用した「日経進学ナビ」の記事にあるように、受験生が志望校の選択手段の一つとして利用するという、新しい需要も発生しつつあった。

（参考）

志望校選びにも活用できる「シラバス」

授業への興味を引き出すために、多くの大学では、「シラバス」と呼ばれる分厚い授業計画書を作成しています。授業科目名、担当教員名、講義目的、講義概要、毎回の授業内容、成績評価方法、教科書・参考文献、履修

上の注意事項などが詳細に記載されており、自分にあった中身なのかを吟味した上で、科目を選択させるようにしているわけです。このシラバスは、本来は在学生を対象に作られているものですが、受験生が志望校選別に活用することもできます。その大学でどんな授業が行われているのかを、具体的に確認できるからです。事務局や図書館などで、シラバスを閲覧できる大学もあるので、志望校に問い合わせてみましょう。

(日経進学ナビ <http://daigaku.shingakunavi.jp/p/contents/parents/university/chapter03.html>)

公開のスケジュール

- | | |
|------------|--|
| 2010年7月21日 | 2010年度第5回FD推進委員会及び第3回全学FD委員会において、仕様について審議し、公開へ向けた作業を開始した。 |
| 2010年12月8日 | 第5回全学FD委員会において、公開時期等を中間報告。 |
| 2011年3月1日 | 学部シラバス、Webでの暫定公開を開始。科目等履修生の科目選択に寄与。 |
| 2011年4月1日 | 学部シラバス（2006～2011年度）本番運用開始。和英両バージョンで公開したことにより、外国留学（協定校・認定校）における事務の効率化に寄与。 |
| 2011年5月 | 大学院シラバス（2011年度～）外部公開開始。 |

青山学院大学 講義内容・シラバス
Aoyama Gakuin University Syllabus

トップ > 科目検索

学部シラバス 大学院シラバス

絞り込みたい内容を指定し、画面下の「検索」をクリックしてください。

【設置】○ 昼間部 ● 第二部(夜間部)

開講学部・学科等

☐ 青山スタンダード科目 ☐ 外国語科目

☐ 文学部

☐ 文学部共通科目 ☐ 文学部外国語科目 ☐ 教育学科 ☐ 英米文学科

☐ フランス文学科 ☐ 日本文学科 ☐ 史学科 ☐ 心理学科

☐ 比較芸術学科

☐ 教育人間科学部

☐ 教育人間科学部外国語科目 ☐ 教育学科 ☐ 心理学科

☐ 経済学部

☐ 法学部

☐ 経営学部

☐ 国際政治経済学部

☐ 総合文化政策学部

☐ 理工学部

☐ 理工学部共通科目 ☐ 物理・数学科 ☐ 化学・生命科学科

☐ 電気電子工学科 ☐ 機械創造工学科 ☐ 経営システム工学科

☐ 情報テクノロジー学科

☐ 社会情報学部

☐ 教職課程関連科目

☐ 教職課程科目

キャンパス ☐ 青山 ☐ 相模原

科目名

担当教員名

漢字、カナ、英字のいずれでも検索できます

開講学期 ☐ 前期 ☐ 後期

☐ 通年 ☐ 集中

曜日 ☐ 月曜日 ☐ 火曜日 ☐ 水曜日

☐ 木曜日 ☐ 金曜日 ☐ 土曜日

時限 ☐ 1時限 ☐ 2時限 ☐ 3時限

☐ 4時限 ☐ 5時限 ☐ 6時限

☐ 7時限

講義内容

本文

スペースで区切ると and 検索になります

年度 2012 2012/09/21現在の状況です。今後変更が生じる可能性があります。

並び順 開講学部・学科等

2011年3月公開時の検索画面

11. FDEagoプロジェクト

【実施経緯】

FD活動の1つの重要な目標は、教育の質を向上させるために努力することを教員が当然のこととして認識するように意識改革を実行することであるが、文章やメッセージだけの呼びかけでは意識に残ることが少ない。そこで、FD活動に特化したキャラクターを設定し、様々な新企画をキャラクターと共に実行することが2011年7月に提案された。その後、協議を重ねた後、本学のイメージキャラクターである“EAGO”に関連づけた“FDEago”というキャラクターを新たに作成し、2012年5月以降、学内でのFDEagoの周知および各種新企画を“FDEagoプロジェクト”として開始することになった。

【実施の目的、実施概要】

本学のFD活動を推進するためのキャラクターとしてFDEagoを作成し、2012・2013年度の2年間に期間を限定して、活動することにした。また、FD活動に関する新企画を“FDEagoプロジェクト”として実施することになった。FDEagoプロジェクトはFDEagoと同じく2年間に限定した企画になるため、通常では実施しにくい実験的な取り組みも行うことを目標とした。

FDEago プロジェクトの開始と共に、FD活動に関する事柄を標語にして学内周知をおこなう“FD Tip”や、教員へのFD活動の周知をおこなうための掲示板“FD Board”の設置を開始した。FD Boardには、FD Tipの他、既に設定されているFD推薦図書を書評と共に掲載することにした。

また、学生へよい授業に関する思い出を作品として募集する企画“Happyくらす作品コンテスト”も実施し、9件の応募、4件の入選作品があり、11月には表彰をおこなった。入選作品は大学WEBサイト等の媒体へ掲載をおこなった。

FDEago：学内掲示物を掲載

FD Tip：全作品を講評と共に掲載

FD Board：現物の写真を掲載

Happyくらす作品コンテスト：全入選作品を掲載

【まとめと今後の展望】

残存期間である2013年度において、2012年度に実施を始めた企画の他、新たな企画を進める予定である。

2012 年 6 月 1 日訂補

青山学院大学

Happy くらす 作品コンクール

募集要項

青山学院大学
全学 FD 委員会

学生のみなさんが青山学院大学でたくさんのことを学び、学生たちの成長を見て教職員も喜びを感じられるような、みんながハッピーになれる学びの場を作っていきたいという思いは、大学に集う全ての人が願っていることだと思います。そんな思いから青山学院大学での授業の思い出について、学生のみなさんに作品の形で表現していただいて、他の学生たちや教職員と広くその思いを共有してほしいと思っています。みなさんの声を聞かせてください。

1. テーマ

「心に残る授業」

青学生のみなさんの講義の思い出、心に響いたクラス、自分を変えた授業、目の覚めた講義、元気の出た授業など、講義を通して得た発見や感動、体験、成長などを作品にして応募してください。

2. 応募資格

青山学院大学の学部生・大学院生（複数名での応募可）

3. 応募テーマ

次の3つのジャンルのいずれかから選んでください。

- ① 第1 ジャンル： エッセーなど、文章で表現する作品。最大 2000 字。
- ② 第2 ジャンル： 詩、俳句、短歌、川柳など、短い韻文で表現された作品。
- ③ 第3 ジャンル： 漫画（四コマ漫画、ストーリー漫画など）（最大 A4 サイズ用紙 10 枚相当。ただし、提出原稿の用紙サイズは自由）。

注）応募作品は未発表のものに限らせていただきます。また、応募作品は他者の権利（著作権、肖像権等）を侵害しないように十分な配慮をしてください。

4. 応募方法

応募を希望する場合は、agufd@aoyamagakuin.jp あてに空メールを送信してください。折り返し、応募用紙を添付のうえ、返信しますので、必要事項を記入して、agufd@aoyamagakuin.jp あてに応募用紙と作品のファイルを添付して提出してください。また、紙媒体での提出を希望する場合には、以下の問い合わせ先に記載されている各キャンパス担当者に直接提出して下さっても結構です。

注) 応募作品数に制限はありません。一人で複数の題材による応募も可能です。

5. 公開について

入選した作品は、青山学院大学全学 FD 委員会が発行する FD Letter、大学ウェブサイト等 FD 関連活動の情報を提供する媒体において活用させていただきたいと思いますので、ご了解をお願いします。

6. 提出期間

2012 年 9 月 29 日（土） 必着

7. 選考

選考は大学 FD 推進委員会において厳格に行われます。「大学での講義のよい思い出を伝える、優れた作品になっているか」を主な選考基準とします。

応募作品の中から、ジャンルの区別なく優れたものを選考し、入選作品として下記の賞を授与します。

最優秀賞	副賞 4 万円分の図書カード
優秀賞	副賞 2 万円分の図書カード
佳作	副賞 5 千円分の図書カード

選考結果は 2012 年 10 月 31 日（水）に大学のウェブサイトで発表するとともに、入選者個人に通知いたします。

以上

2012年度 Happy くらす 作品コンクール 応募作品一覧表

No.	所属	学年	作品ジャンル	作品名	授業名	最終結果
1	文学部史学科	3	エッセー		教育学A、教育学B	
2	法学部法学科	4	エッセー	人生で初めて道徳の授業をうけた	キリスト教概論Ⅱ	佳作
3	法学部法学科	1	短い韻文	ワタシダレ 仮面をつけて見失う	キリスト教概論Ⅰ	
4	経営学部経営学科	2	エッセー		マーケティング論	優秀
5	国際政治経済学部 国際政治学科	3	エッセー	原石とダイヤモンド	入門セミナー	最優秀
6	総合文化政策学部 総合文化政策学科	1	エッセー		イングリッシュ・コミュニケーション	
7	経済学部第二部 経済学科	4	エッセー	イギリスとの出会い	リーディング・コンプリヘンションⅠ、Ⅱ	
8	社会情報学研究科 社会情報学専攻 ヒューマンイノベーションコース	2	エッセー		認知科学概論	佳作
9	教育人間学研究科 教育学専攻 博士後期課程	1	エッセー	間主観的であるという存在の学び	特定の授業なし	

1. 【最優秀賞】 国際政治経済学部3年 中野 聡美さんの作品 「原石とダイヤモンド」

「なめてんのか!」と、その教授は教室に入って挨拶をするなり怒鳴った。その教授とは、今はもうご退職された袴田茂樹教授のことだ。講義名は「入門セミナー」。国際政治経済学部に入學したら、学科を問わず全ての学生にとって必修となる授業だ。クラスは約30名という少人数制で、毎回異なる教授による講演を聞いてレポートを書き、クラスごとの授業を隔週で行うというものだった。その日、袴田先生は激怒していた。なぜなら、ある学生の提出したレポートが何かの論文をそのまま引用したものだったということがバレたからだ。現代っ子の大学生にはよくあること——。だから私はその時にはどうして先生がそこまで怒るのか分からなかった。しかし、一年後この授業が終わるころには先生の意図が分かるようになっていた。先生が全身全霊で授業に向かい、そして私たちに伝えたかった本当のことがなんなのか、それが自分なりに分かったときは心が震えた。

袴田先生はレポートを書くときにとにかく「自分の言葉」で書くということを口が酸っぱくなるほど繰り返し言っていた。でも、初めは「自分の言葉」でレポートを書くなんてとても難しいし、そもそも「自分の言葉」って一体なんなのだろう、とレポートを書くたびに悩んだ。参考文献を読めば自分が意図せずともその本の主張に引きずられ、何が正しいのかよく分からなくなって、気付いたら朝になっていたなんていうことは全然珍しくなかった。正直、この通年の授業は心底大変だった。いわゆる「楽単(楽に単位が取れる授業)」とは正反対だった。

ある日、先生は授業が始まるなり国際政治に関する論文を音読し始めたことがあった。その論文の筆者はなんと14歳の女の子で、テーマは「日本は政府開発援助(O D A)を減らすべきか?」というもの。中学2年生が書いたとは思えないほどしっかりした内容だったが、その時に先生が「14歳の中学生でも自分の言葉で論文が書ける。難しい用語なんて一切使っていない。こういうことです、自分の言葉で書くということは」と言い、続けて「年が小さいからと

いって本質が分からないわけじゃない」と言ったのだ。その瞬間、私は「は！そういうことか」と心の中が一気に突き抜けて晴れるのを感じた。初めて大学の勉強って面白いかもしれない、と思えた瞬間でもあった。おそらく袴田先生が私たちに伝えたかったこと、それは「自分の頭で考えること」の重要性。「自分の言葉」で表現することの大切さ。そして、それこそが大学における「学問」だということだ。

それから、この授業がどんどん楽しいと思えるようになった。自分の中で国際政治のテーマを消化してじっくり考えること、足りない知識は本を読んで補って、そして自由にレポートで表現できることなど、自分の中でやる気が出始めた。何度か回数をこなすと自分なりに「本質」が分かったような気がして、それも嬉しかった。もしも、この授業で袴田先生と出会わなかったら、私は大学でのレポートやプレゼンテーションなどを全部受け身でやっていたと思う。自分の頭で考えて自分の言葉で表現するということは、大学の勉強に限らず、人生のどの局面でも必要なことだ。そうしなければ先生の言う「本質」にはたどり着けないような気がするからだ。だから、私は大学に入って入門セミナーを受講して袴田先生に出会えて本当に幸運だったと思っている。この授業ほど私の大学生活に影響を与えたものは無い。袴田先生は、まるで原石のままの学生を磨くダイヤモンドだった。

【講評】授業に対する袴田先生の真摯な態度と、それが学生に響いた様子が伝わってくる。簡潔な文章で、授業の魅力をうまく表現している。

2.【優秀賞】 経営学部2年 金 起成さんの作品

経営学科の2年生になった私は去年より頑張るぞと思い、国際交流センターの前で友達と単位のとりやすい授業を先輩に聞いて、授業登録をやっていた。外では去年のようにサークルの勧誘やダンスサークルのパフォーマンスなどで学校はとても賑わっていた。

私は経営を勉強する学生としてマーケティング論は欠かせないものだと考えていたので一番にマーケティング論を登録した。単位が取りにくいなど気にしなかった。なぜなら、マーケティングは授業の内容が難しくてもやるしかない勉強だと思っていたからだ。

4月のある日、マーケティング論の一回目の授業が行われた。先生はどういう人か男性か女性かそれとも若い先生か友達と話をしながら、教室へ向かった。

先生は男性で授業の方向性やどういう内容か試験の関する情報など説明をしてくれた。先生の言葉を聞いていてある言葉が胸にぐっときたのである。それは、「氷が溶けると春」という発想がとても大事だということだった。「氷が溶けると水」のような理科系の考え方ではマーケティングを勉強する文科系の学生は社会で生き残れないと言ったのだ。

もちろん、私は理科系の考え方をしていた。自分でもショックだった。しかも、まだ、学生なのに自分の力量のなさがばれてしまったと思って恥ずかしかった。その時から私は発想の転換をはかりたいと思いみんなとは違う考え方を持とうと努力したが、ある日同じマーケティング論授業を聞いている友達から学校の帰り道で今見ている空は何色に見えるのと聞かれ、綺麗な水色に見えるよと言ったが、私の答えを待っていたかのように速やかに私に向かってそういう考え方ではマーケティングは無理だよと言い出した。

当たり前のような考え方はやめようと努力してきたつもりなのに友達に虚を衝かれて少しいラッとした。それで、「お前は空が何色に見えるの」と言い返したら、私はピンク色に見えるよと答えたのだ。なぜピンク色に見えるのと聞いたら「最近幸せすぎて空がまさにピンク色に見える」と言ったのだ。

この子もあの授業に相当影響を受けていたと分かった。あとのあの先生の言葉がこれまで学生の心に響くとはマーケティング論のすべてを習った気がした。しかし、発想の転換をはかるということはとても難しいことである。20年間を同じことばかりやってきて固まった自分の脳が後この何年間で変わるのか。とても心配で仕方がなかった。

未だに「氷が溶けると春」という発想は身につけてない。前期のマーケティングの授業が終わり夏休みを迎えたが、私はそのことで今も悩んでいる。それだけではない、物事を見極める力、多角的な視野を持つことなど、先生のあの一言で私はいろんなことに気づき始めた。逆にいうと物事について悩み、考える時間が増えてきたということである。今まで生きていてこのように悩み、考える時があったのだろうか。今まで前だけをみて走ってきたのではないかと自分への考察や物事を考える時間があるにも足りなかったのではと深い反省とともにマーケティング論の授業を受講したことができて本当に良かったと思っている。自分の狭い視野を気づかせてくれてとても感謝の気持ちである。

これからも自分の視野を広め、物事を深く考えることができるようにいっぱい悩んで苦しんで成長したいと思った。

【講評】 マーケティングの特徴と学生の頑張る姿が上手な文章で表現されている。先生の与えたのはある一言というのはすこし残念。いい先生というよりいい学生では？

3. 【佳作】 社会情報学研究科2年 太田 真梨子さんの作品 「認知科学概論」鈴木宏昭先生

短大から教育学科に編入後、すぐにゼミを決めなければならなかった。教育学科はいくつゼミに入っても良いシステムだったので、とりあえず興味のありそうなゼミ5つくらいに絞り直接話を聞きに行き2つに絞った。その一つが鈴木宏昭先生のゼミだった。私は、小学校から殆どの授業がつまらないと思ってきて、殆ど聞いていなかった。お陰で中学では殆どの授業を寝て過ごし、高校では出席日数が足りなかったり、定期試験前に教師に呼び出され、「頑張って今学期で2取っちゃおう」（1は単位出ないため）などと言われ、翌日の試験に出る始めの数題をなんとなくそのまま教えられたりした。学校が嫌いだった。短大に入り、高校までよりは1人の人間として語ってくれるような授業に親しみが持てた。しかし、それほど何かが変化したり、驚きがあるというわけではなかった。

従って、鈴木先生のゼミも特に期待はしていなかった。しかし妙にこの先生とは会って話す度に、通常の教師との話を通じない感じや、余計な説明を沢山しなければならず、その挙げ句最終的に半分も分かってもらえず疲労だけが残るというような感覚がなかった。「??? 妙に話すのが楽だなあ」と思った。そしてゼミは、妙に楽しくなくなかった。普通ならどんな授業でも感じるはずと思っていた抵抗感や圧迫感、不愉快さ、つまらなさ、面倒臭さ、馬鹿馬鹿しさ・・・がないのである。「何でこの時間は毎週、楽しくないんだろ???」積極的に参加していたわけではないが、3年が終わるまでとりあえずこの気持ちは消えなかった。もう一つ不思議に思った。鈴木先生のこと時々友人・知人の間で話題に出るとき、男子学生からの評判が良いことだった。大抵先生の話になると、男子学生の方が女子学生より辛口で、減多に「あの先生はいい」なんてはっきり聞くことができない印象があったのだが鈴木先生の話は意外にも「ああ、あの先生知ってる。授業とって。いい先生だよ」とか「授業、面白いよね」とかいう言葉を、1人2人でなく私が出会って話題に上った鈴木先生を知っているという男子学生殆どが言っていることに内心、とても驚いた。男子生徒からの悪い評判は一つも聞かなかった。しかし当時のゼミの人数は少なく、4人だったため「ああ、人数が少ないからこんなに私が良いと思える授業なんだ、きっと。どうせこの先生だって、大人数の授業ではつまらない授業やってんだろなあ」「少人数なんて誤摩化すのは簡単なんだ、大抵大人数の授業で化けの皮が剥がれるんだ!」とりあえずこう思うことにした。

4年になったとき、たまたま鈴木先生の80人くらいいる大人数の授業（「認知科学概論」）を取るようになった。相模原でしか取れない他の授業があり、一つの授業のためだけに相模原に行くのは嫌だったのと、時間的にまあ丁度良く選択必修の足しにするためにも履修することに決めた。今回は、少しだけ期待した。「どんなのか、見てみよう!」

毎回、びっくりした。自分の感覚が生き返るという感じがして、終わってD棟の自動ドアを出て帰るときに明らかに元気になっている自分を感じた。正に生きる力ってこのことかもしれないと思っている。80人のうちの1人である私にまで届き元気になる感覚があった。生き返らせているというよりも、殺してないだけなのではないかと思った。今にも踏みつぶされたりもぎ取られそうな芽のような学生の知的好奇心を、壊さないように大切に大切に守りながら、学問の面白さ、美しさという太陽で威風堂々私たちの芽を照らしている芸術作品のような授業だった。また、妙に風通しの良いような感じがして、一つだけ確信できるような感覚があった。それはこの先生この授業は奇麗で美しい世界と繋がっていきそうということだった。

私が今まで受けて来た何百という授業の中でアンテナに引っかかった5本の指に収まる希少で貴重な本物の授業の一つが、この「認知科学概論」である。因に、その中の一つには鈴木先生の先生である佐伯先生の「学習学原論」も入っている。そういう意味では、やはり鈴木先生の授業は本物に繋がっていたんだと大学院に入って納得した。勝手な仮説が立証された。私が好きな哲学者の内田樹氏が本の中で言っている先生の先生や先生の先生の先生の先生・・・など見えない縦の繋がりを考えると、佐伯先生の先生も本物だったんだろなあ、そしてその先生もまた本物の授業・先生や美しい世界と繋がっていた（繋がろうとしていた）んだろあと思えてくる。もしかしたら自分も本物や美しさと繋がれるかもしれないと感じられることは安心でき、勇気づけられる。

【講評】 学生のひねくれ具合がとてもよい。どんでん返しもあって、文章も優れている。鈴木先生の授業がどのように素晴らしいのか、もう少し具体的に描いてほしい。

4.【佳作】 法学部4年 松本 菜那子さんの作品 「人生で初めて道徳の授業をうけた」

塩谷先生のキリスト教概論を受けて私はそう感じた。「キリスト教」という科目名なのでどうしても宗教の教義・価値観を押し付けられるのではないかと身構えてしまう。しかし塩谷先生の「キリ概」に対して私はそんな印象を持ったことは1度もない。むしろ「キリスト教」だけではおさまらない「自分とはどんな生き物なのか」を考える90分間がそこにあったと思う。

特に印象に残っているのが大学3年の前期で十戒を扱ったときで、そのうち1戒から4戒は神と人の間の戒律として扱われた。どうして十戒があるのかを理解しやすくするために、先生はそもそも人とはどういう考え方をしてしまうのかを多くの具体的なエピソードで講義した。その講義の中に私は自分の他人との接し方のベースがあるように感じた。先生は何ひとつ難しいことは言っていない。ごくごく当たり前の、ありきたりな日常のエピソードが並べられているだけのはずなのに、私は今まで気付かなかったり、意識的に見ようとしなかった自分の弱い部分が目の前の授業で取り上げられ、一つ一つ丁寧に解説されているようだったと思った。そして、今までの自分がいかに格好つけていたのかを理解し、初めて自分がどういう人間なのか考えようと思った。正直情けない自分を認めることになったが、それが何だか面白かった。

『なぜ神は1人でなければならないのか』、それは私たちが他者に左右され、たやすく傷ついてしまう生き物だからだ。私は親の価値観を中心に生きてきた。親に褒められなくて仕方がなくて、親が何気なく吐いた一言で自分の顔や体型が大嫌いになった。

『なぜ偶像を作ってはいけないのか』、それは私たちがイメージで相手を見てしまいがちな生き物だからだ。今まで私は相手に自分の理想を押し付け、思い通りにいかないといって勝手に傷ついてきた。そして理想どおりになってくれないのは「相手が努力をしないからだ」と思い込み、人を見下してきた。

『なぜ神の名をみだりに呼んではいけないのか』、それは私たちがそれを理由にして何でもして良いと考えてしまう生き物だからだ。私はプライドが高く、怒られるのも失敗するのも嫌いだ。そのため、いつも責任転嫁できるように、逃げ道を探すように、許可やもっともらしい行動の理由をほしがった。

『なぜ休まなければならないのか』、それは自分のためではなく周囲に安らぎを与えるためだ。自分が無理をすることは自分の問題で、人に何の迷惑もかけていないと思っていた。心配をかけたり、自分の忙しさに周囲を振り回しているなんて考えたこともなかった。

現在、このような自分の欠点に気づいたが、いまだに私は人に勝手に期待してしまうし、逃げ道を探してしまう。スケジュールをつめすぎて人に合わせられないし、忙しいとか寝ていない、食べていないという口癖も直らない。そういう自分を改善するためにキリスト教を信じる人もいるかもしれないし、それもひとつの手段だと思う。しかし、案外自分はこういう自分を嫌だと感じていないので、私は改善するのではなくこういう自分とどのようにうまく付き合っていくかを考えようと思う。自分の今までの人間関係の失敗経験も、自分のことを直視できるようになって初めて使えるようになった。そのきっかけは「自分とはどんな生き物か」について考える90分間だった。

そして最後になるが、レポートを返却する際は一人ひとりの内容を把握した上でコメントし、礼拝に出席すると顔を覚えていて一言声をかけてくださる塩谷先生に、自分が感謝と尊敬をしていることを伝えたい。

【講評】 塩谷先生の授業を通して自分の生き方を見つめ直し、いかに生きるべきかについて学んだことがとてもよく表現されている。



表彰式に出席された入賞者のみなさん

左より 長谷川副学長、金さん、中野さん、太田さん、加藤副委員長

12. FD letter

【開催経緯】

FD推進委員会・全学FD委員会の発足以来、学内の教職員へ向けたFD活動の広報は、会議体での報告の他、学内WEBサイトへの情報掲載という方法で行われてきたが、主にFDに関するイベントの周知等、報告事項が主な内容となっていた。

そこで新たな展開として、日々の授業のヒントとなるような情報を月1回のペースで発信していくニュースレターをFD推進委員会より発行することとした。

ニュースレターの名称を「FD letter」として、2011年3月より発行を開始した。

【実施の目的、実施概要】

○実施の目的

教員が日々の授業をおこなうに当たって、改善のヒントとなるような情報を提供する。また、学内WEBサイトへバックナンバーを掲載し、教員は何時でも閲覧できる環境を整える。

○実施概要

2011年3月より、月1回のペースでニュースレターを発行する。発行日は各学部教授会開催日に合わせ、教授会時に配布をおこなう。また、学内WEBサイトへ掲載し、専任・非常勤教員が何時でも閲覧できる環境を用意する。

掲載内容は、受講生への情報発信等をおこなう「講義ツール」の使用方法からFD推進委員による授業風景のレポート、FD関連の推薦図書の紹介等、多岐に渡る。

また、ミニコーナーとして他大学のFD活動紹介や公益財団法人大学コンソーシアムより提供を受けた「まんがFDハンドブック」の紹介等も行った。

2011年3月の第1号発行より、2012年度末までに計13号を発行した。

【まとめと今後の展望】

当初の計画より、掲載内容やスケジュールに若干の変更が生じたものの、概ね計画通りのニュースレター発行が行われた。何号か発行を経た頃より、一部の専任教員よりニュースレターについて声を聴くようになり、少しずつ浸透してきた様子が伺えた。

2012年度も発行を継続していく予定だが、号数を経ることで内容がマンネリ化する可能性が考えられるため、ある程度の段階で掲載内容を見直し、新しい展開を図っていく必要があると思われる。

13. 諸規則

○青山学院大学FD規則

(2009年3月26日理事会承認)

(趣旨)

第1条 この規則は、大学設置基準（昭和31年文部省令第28号）第25条の3に基づき、青山学院大学（以下「本学」という。）全体の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組みであるファカルティ・ディベロップメント活動（以下「FD活動」という。）について必要な事項を定めるものとする。

(組織)

第2条 本学のFD活動を適切に実施するため、次の委員会を置く。

(1) 全学FD委員会

(2) FD推進委員会

2 全学FD委員会は、FD活動を円滑に運営するために必要な事項等を審議する。

3 FD推進委員会は、FD活動の企画、立案及び実施に必要な事項等を審議する。

4 全学FD委員会及びFD推進委員会について、構成、審議事項等、その運営に必要な事項は、別に定める細則による。

(所管)

第3条 この規則は、学務部教務課が所管する。

(改廃手続)

第4条 この規則の改廃は、全学FD委員会、学部長会及び教授会の議を経たのち、常務委員会及び理事会の承認を得て、学長がこれを行う。

附 則

この規則は、2009年3月27日から施行する。

○青山学院大学全学FD委員会運営細則

(2009年3月16日学部長会承認)

(趣旨)

第1条 この細則は、青山学院大学FD規則第2条第4項の規定に基づき、全学FD委員会（以下「FD委員会」という。）について、構成、審議事項等、その運営に必要な事項を定めるものとする。

(構成)

第2条 FD委員会は、次の委員をもって構成する。

(1) 青山学院大学FD推進委員会運営細則第2条第1項に規定するFD推進委員会委員

(2) 青山学院大学全学教務委員会規則（以下「全学教務委員会規則」という。）第2条第1項に規定する全学教務委員会委員

(3) 全学教務委員会規則第9条に規定する全学教務委員会出席者

2 FD委員会が特に必要と認めるときは、委員以外の者に列席を求め、その意見を聴くことができる。

(委員長)

第4条 FD委員会に、副委員長1名を置く。

2 副委員長は、委員長が委員の中から指名する。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときには、委員長の職務を代行する。

4 副委員長の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

(招集、開催及び定足数)

第5条 FD委員会は、必要に応じて委員長が招集し、その議長となる。

2 FD委員会の定足数は、構成員の過半数とする。

(審議事項)

第6条 FD委員会は、次の事項を審議する。

- (1) FD活動全般に関する事項
- (2) FD推進委員会の審議結果に関する事項
- (3) その他FD活動を円滑に運営するために必要な事項

(審議結果)

第7条 委員長は、前条の審議結果を学長に報告するものとする。

(事務の所管)

第8条 FD委員会に関する事務は、学務部教務課が行う。

(改廃手続)

第9条 この細則の改廃は、FD委員会、学部長会及び教授会の議を経て、学長が行う。

附 則

この細則は、2009年3月27日から施行する。

○青山学院大学FD推進委員会運営細則

(2008年10月6日学部長会承認)

改正 2009年3月2日 2012年2月27日

(趣旨)

第1条 この細則は、青山学院大学FD規則第2条第4項の規定に基づき、FD推進委員会（以下「委員会」という。）について、構成、審議事項等、その運営に必要な事項を定めるものとする。

(構成)

第2条 委員会は、次の委員をもって構成する。

- (1) 副学長（学務及び学生担当）
- (2) 専任教員の中から学長が指名する者 若干名
- (3) 事務職員の中から学長が指名する者 若干名

2 前項第2号及び第3号に規定する委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

3 委員会が特に必要と認めるときは、委員以外の者に列席を求め、その意見を聴くことができる。

(委員長)

第3条 委員会に、委員長を置き、前条第1項第1号に規定する副学長をこれに充てる。

2 委員長は、委員会を代表し、委員会の業務を統括する。

(副委員長)

第4条 委員会に、副委員長1名を置く。

2 副委員長は、委員長が委員の中から指名する。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときには、委員長の職務を代行する。

4 副委員長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

(招集、開催及び定足数)

第5条 委員会は、必要に応じて委員長が招集し、その議長となる。

2 委員会の定足数は、構成員の過半数とする。

(審議事項)

第6条 委員会は、次の事項を審議する。

- (1) FD活動の啓発に関する事項
- (2) FD活動の企画、立案及び実施に関する事項
- (3) 学長の諮問する事項

(4) その他FD活動全般に関する事項

(審議結果)

第7条 委員長は、前条の審議結果を学長に報告するものとする。

(学生FDスタッフ)

第8条 必要な場合には、委員会の下に学生FDスタッフ（以下「スタッフ」という。）を置くことができる。

2 スタッフは、委員会の委員の指示により、FD活動に係る業務に当たる。

3 スタッフは、学部又は大学院研究科に在籍する学生で、FD活動への参加を希望する者の中から、委員会が任命する。

(事務の所管)

第9条 委員会に関する事務は、学務部教務課が行う。

(改廃手続)

第10条 この細則の改廃は、委員会及び学部長会の議を経て、学長がこれを行う。

附 則

この細則は、2008年10月7日から施行する。

附 則（2009年3月2日）

この細則は、2009年3月27日から施行する。

附 則（2012年2月27日）

この細則は、2012年4月1日から施行する。

○青山学院大学FDに係るデータ取扱に関する要領

(2009年2月4日制定)

(趣旨)

第1条 この要領は、学校法人青山学院個人情報保護に関する規則に基づき、青山学院大学のファカルティ・ディベロップメント（授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組み。以下「FD」という。）活動において必要なデータの収集、集計と取り扱いについて、必要な事項を定める。

(目的)

第2条 データについては、以下の目的に使用される。

(1) FD活動における企画・立案に資する

(2) FD活動の報告に資する

2 前項以外の目的で、FD推進委員会（以下委員会）委員長が必要と認めたもの。

(データの範囲)

第3条 本要領が予定するデータとは、以下に掲げる各別から個人を特定できる情報を除いた匿名化データをいう。

(1) 広報入試センターが業務上収集する入試及び広報関連データ

(2) 学生部が管理するデータ

(3) 教務課が管理するデータ

(4) 進路・就職センターが業務上収集する就職関連データ

(5) 委員会が実施する調査データ・アンケートデータ

(6) その他委員会が必要とするデータ

(データの収集)

第4条 FD活動に関わる必要なデータは、委員長が各部署と協議の上、学長名に基づき収集を行う。

(データ管理責任者)

第5条 データ管理責任者は委員会委員長とし、データは、各部署より委員長宛に提出する。

(データ利用者と利用時の注意義務、集計場所及び目的外利用の禁止)

第6条 データは委員会で認められた集計目的にのみ用いられ、その集計は同委員会から委嘱された専任教員（以下データ利用者）が、委員長の任命を受けてこれを行う。

2 データ利用者は集計期間中、原データや中間生成ファイルの保管に遺漏なく努めなければならない。ネットワークを介した当該情報の漏洩や集計場所への第三者の立ち入り、保存メディアの管理に対し、データ利用者は細心の注意を払う義務を負う。

3 データの使用場所は、原則として本学内とするが、データに十分な匿名化処理が施されていて、かつ委員長が特に必要と認めた場合についてはこの限りでない。

(結果の公表と守秘義務)

第7条 データ利用者は、係る集計が終了した後、速やかに委員長に報告する。委員長は集計結果について、委員会の議を経たのち、必要に応じて公表することができる。結果の正規公表がなされない限り、データ利用者及び委員会委員は、集計過程で知りえた情報を一切口外してはならない。

(データの利用期間と破棄)

第8条 委員会で認められた目的に係る集計が終了した後、データ利用者は、速やかに中間生成ファイルを含む全ての利用データを削除し、データ管理責任者は、データの破棄を確認するとともに、これを学長に報告しなければならない。

(事故等への対応)

第9条 前条及び前条以外の項目について、事故等が発生した場合は、「学校法人青山学院個人情報保護に関する規則」を準用するものとする。

(改廃手続)

第10条 この要領の改廃は、委員会が行う。

附 則

この要領は、2009年2月4日から施行する。

14. FD推進及び全学FD委員会委員一覧

FD推進委員会、全学FD委員会の設置について

〔経緯の概要〕

- ・ 2008年の大学設置基準改正によるFD活動の義務化
「大学の各教員に対し義務付けるものではなく、各大学が組織的に実施することを義務付けるものである」
(設置基準改正の補足説明文書より)
- ・ FDプロジェクト活動は、プロジェクトチーム方式によって、初期の啓発活動として十分な成果を残した。
- ・ 今後、FD推進委員会によって機動的かつ柔軟な発想による企画立案を進める。
- ・ また、全学的に教育改善を進めるためには、学科主任クラスで構成される全学教務委員会の参加によって実施していくことが必要との認識に至った。
- ・ 全学教務委員会の事務所管は学務部となっており、全学FD委員会も同様とした。

全学FD委員会（太枠）

FD推進委員会

内容：FD活動の啓蒙・企画検討・立案・実行

<例>

- ・ 授業改善（授業評価アンケート、シラバス、GPA制度）
- ・ 教育環境支援（事務サポート、施設・設備）
- ・ 啓発活動（授業公開、シンポジウムなどの企画・立案）

企画・提案・（実行）

構成員：副学長（委員長）1名

学長指名委員（教員より）5名※副委員長1名を選出

学長指名委員（職員より）5名

※ここには学務部の全学教務委員担当職員を含む

全学教務委員会

内容：教学に関する全学的な調整

<例>学事暦、授業時間の設定、卒業延期制度

構成員：副学長（2名）、宗教部長、青スタ、学科主任（各学部より1名）、
学務部長、学生支援ユニットマネージャー、事務列席者

1. FD推進委員会委員

2008年度

		委嘱期間	備考
		2008/10/7～2010/10/6	
委員長	長谷川 信	副学長、経営学部	
副委員長	宮川 裕之	社会情報学部	
委員	杉谷 祐美子	教育人間科学部	
委員	申 恵丰	法学部	
委員	中野 昌宏	総合文化政策学部	
委員	米山 淳	理工学部	
委員	薮田 洋	学務部教務課長	
委員	戸田 隆也	学務部教務課係長	
委員	鳥海 貴裕	学務部教務課	
委員	相川 絵理子	学生支援ユニット学務グループ	
委員	秋場 美澄	学生支援ユニット学務グループ	
列席者	伊豆 一男	学務部長	

2009年度

		委嘱期間	備考
		2008/10/7～2010/10/6	
委員長	長谷川 信	副学長、経営学部	
副委員長	宮川 裕之	社会情報学部	
委員	杉谷 祐美子	教育人間科学部	
委員	申 恵丰	法学部	～2010/3/31
委員	中野 昌宏	総合文化政策学部	
委員	米山 淳	理工学部	
委員	薮田 洋	学務部教務課長→庶務部長	2009/11/1付異動
委員	戸田 隆也	学務部教務課係長	
委員	鳥海 貴裕	学務部教務課	
委員	相川 絵理子	学生支援ユニット学務グループ	
委員	秋場 美澄	学生支援ユニット学務グループ	
列席者	伊豆 一男	学務部長	

2010年度

		委嘱期間	備考
		2008/10/7～2010/10/6 (全員～2011/3/31に伸長)	
委員長	長谷川 信	副学長、経営学部	
副委員長	宮川 裕之	社会情報学部	～2010/9/30
副委員長	加藤 篤史	経営学部マーケティング学科	2010/10/1～
委員	許 末恵	法学部	2010/4/1～
委員	中野 昌宏	総合文化政策学部	
委員	米山 淳	理工学部	
委員	薮田 洋	庶務部長→進路・就職センター事務長	2010/11/1付異動
委員	戸田 隆也	学務部教務課係長	
委員	鳥海 貴裕	学務部教務課→学生支援ユニット学務グループ	2010/3/1付異動
委員	相川 絵理子	学生支援ユニット学務グループ	
委員	秋場 美澄	学生支援ユニット学務グループ	
列席者	上倉 功	学務部長	2010/11/1付異動
列席者	伊豆 一男	事務局長	2010/11/1付異動
事務局	小山 宜也	学務部教務課	
事務局	土居 美菜子	学務部教務課	

2011～12年度

		委嘱期間	備考
		2011/4/1～2013/3/31	
委員長	長谷川 信	副学長、経営学部経営学科	
副委員長	加藤 篤史	経営学部マーケティング学科	
委員	杉谷 祐美子	教育人間科学部	
委員	宮川 裕之	社会情報学部	
委員	中野 昌宏	総合文化政策学部	
委員	米山 淳	理工学部	
委員	伊豆 一男	事務局長	～2013/2/5
委員	鈴木 寛也	事務局長	2013/2/6～
委員	上倉 功	学務部長	
委員	戸田 隆也	学務部教務課係長	
委員	鳥海 貴裕	学生支援ユニット学務グループ	
委員	館田 純	学生支援ユニット学務グループ	～2012/5/31
委員	蓬田 豊子	学生支援ユニット学務グループ係長	2012/6/1～
事務局	小山 宜也	学務部教務課	
事務局	土居 美菜子	学務部教務課	

2. 全学教務委員会委員

2009年度

所属等	氏名
委員長 副学長(学務及び学生担当)	長谷川 信
副委員長 副学長(将来構想及び第二部担当)	土山 實男
大学宗教部長	大島 力
青山スタンダード教育機構副機構長	薩摩 順吉
文学部	武内 信一
教育人間科学部	丸山 千秋
経済学部	中村 まづる
法学部	菊池 純一
経営学部	竹田 賢
国際政治経済学部	狩野 良規
総合文化政策学部	堀内 正博
理工学部	林 光一
社会情報学部	増永 良文
学務部長	伊豆 一男
相模原事務局 学生支援ユニット課長	原 啓
学長室長	本橋 正人
学務部教務課	瀬沼 修
相模原事務局学生支援ユニット 学務グループ課長	高野 悦子

2010年度

所属等	氏名
委員長 副学長(学務及び学生担当)	長谷川 信
副委員長 副学長(将来構想及び第二部担当)	土山 實男
大学宗教部長	大島 力
青山スタンダード教育機構副機構長	薩摩 順吉
文学部	木村 松雄
教育人間科学部	丸山 千秋
経済学部	中村 まづる
法学部	大石 泰彦
経営学部	竹田 賢
国際政治経済学部	狩野 良規
総合文化政策学部	梅津 順一
理工学部	中山 裕道
社会情報学部	長橋 透
学務部長	伊豆 一男
相模原事務局 学生支援ユニット部長	鈴木 寛也
学長室長	原 啓
学務部教務課	瀬沼 修
相模原事務局学生支援ユニット 学務グループ課長	高野 悦子

2011年度

所属等	氏名
委員長 副学長(学務及び学生担当)	長谷川 信
副委員長 副学長(将来構想及び第二部担当)	土山 實男
大学宗教部長	伊藤 悟
青山スタンダード教育機構副機構長	薩摩 順吉
文学部	木村 松雄
教育人間科学部	樋田 大二郎
経済学部	中村 まづる
法学部	大石 泰彦
経営学部	高橋 邦丸
国際政治経済学部	狩野 良規
総合文化政策学部	梅津 順一
理工学部	中山 裕道
社会情報学部	長橋 透
学務部長	上倉 功
相模原事務局 学生支援ユニット部長	鈴木 寛也
学長室長	原 啓
学務部教務課	篠山 良子
相模原事務局学生支援ユニット 学務グループ課長	立花 慎一

2012年度

所属等	氏名
委員長 副学長(学務及び学生担当)	長谷川 信
副委員長 副学長(将来構想及び第二部担当)	平澤 典男
大学宗教部長	伊藤 悟
青山スタンダード教育機構副機構長	堀内 正博
文学部	佐野 弘子
教育人間科学部	北村 文昭
経済学部	矢吹 初
法学部	大石 泰彦
経営学部	高橋 邦丸
国際政治経済学部	内山 義英
総合文化政策学部	中野 昌宏
理工学部	谷口 健二
社会情報学部	長橋 透
学務部長	上倉 功
相模原事務局 学生支援ユニット部長	大竹 昭雄
学長室長	原 啓
学務部教務課	高野 悦子
相模原事務局学生支援ユニット 学務グループ課長	立花 慎一

※所属等は各年度4月1日現在

2008～12年度

青山学院大学FD活動報告書

発行日 2013年10月1日

発行 青山学院大学全学FD委員会

学務部教育支援課

〒150-8366 渋谷区渋谷4-4-25 17号館2階 スチューデントセンター

TEL 03-3409-4165 FAX 03-3409-9423

発行責任者 長谷川 信

